

T K 60 遺 跡

北海道営畑地帯総合整備事業に伴う緊急発掘調査報告書

2004年

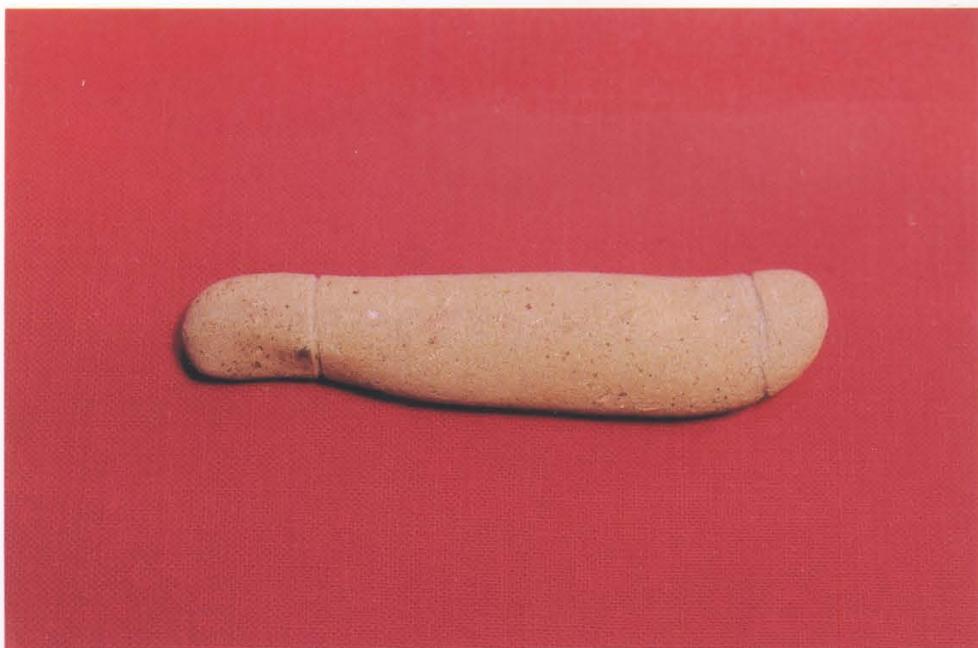
北海道常呂町教育委員会



1. 発掘調査地遠景（南側より撮影）



2. 発掘調査風景（東側より撮影）



1. 刻線石器（3号竖穴出土）



2. K-8発掘区石器出土状況

序 文

北海道東部地域に位置する常呂町は人口約5,000人であり、農業・漁業を基幹とする一次産業の町であると共にサロマ湖を擁する観光の町でもあります。町のキャッチフレーズが「ホタテと遺跡とカーリングの町」と標榜するとおりホタテは全国一の水揚げをほこり、遺跡は約2,500軒の竪穴住居のある史跡常呂遺跡など大遺跡が多く残されています。また、長野やソルトレーク冬期オリンピックに町の選手が出場するなどカーリング競技も盛んです。

この度、北海道営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査が行われました。この遺跡からは約7,000年前の縄文文化早期の住居3軒、約4,000年前の縄文文化前期の住居1軒など8軒の住居が発見されるとともに、全域から約2万点に及ぶ土器や石器が出土しました。中でも縄文文化早期の住居は急斜な台地に作られており常呂町では初めての発見となりました。この頃の完形土器は少なく、貴重な資料となりました。また、細長い自然石の両端に付けられた刻線はどのような用途と目的を意図して作られたのでしょうか。興味深いものです。この地から南側を望むと緩い斜面の台地がありますが、ここには遺跡は無いようです。この遺跡に住んだ人々は南側に面した日当たりの良い場所を選らんでいたことが想像できます。さらに遺跡の前面はかつて海からの入り江だったとも考えられており、海の漁貝類を食糧として求めていた姿が想像できます。

この遺跡の発掘体験には網走管内など472名の児童、生徒が参加されました。古代の人々の遺物に直接触れた体感は忘れることなく記憶されたことであろうし、物を大切にする気持ちもさらに芽生えたことと思われまふ。地中に埋もれている一つ一つの資料はその地で暮らした人々の生活に根ざした貴重な財産であります。この財産を未来に守り、遺していく責務を痛感するしだいです。

今回の発掘調査では文化庁調査官瀬宣田佳男、東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋、北海道教育委員会田才雅彦、宗像公司、所有者である林敏洋氏をはじめ多くの方々からご指導、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表するとともに、本書が広く活用されることを念願し発刊の言葉といたします。

平成16年3月

北海道常呂町教育委員会
教育長 谷 昭 廣

例 言

1. 本書は北海道営畑地帯総合整備事業岐阜地区（担い手支援型）に伴うTK60遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
2. 本遺跡は北海道常呂町字岐阜343-15番地にある。遺跡の登録番号はI-16-58である。
3. 発掘調査は網走支庁から委託を受けて、常呂町教育委員会が主体となって実施した。
4. 調査経費の一部は文化庁からの補助を受けている。
5. 本書の執筆は報告末尾に氏名を記載したものが行い、編集は武田修による。
6. 付編の各種分析・同定については次の方々、機関に依頼した。

（株）加速器分析研究所

パリノ・サーヴェイ（株）

知床博物館 合地信生

北海道教育大学旭川校 和田恵治

7. 遺構、遺物の写真撮影は武田修が行った。
8. 各種遺物の実測は吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子の協力を得た。
9. 調査体制

調査機関 平成15年5月12～10月31日（文化庁補助による調査は9月1日～10月31日）

調査担当者 武田 修

調査員 佐々木覚

作業員 宇野彰一、原田聖五、武田美津子、阿部嘉世子、仙石京子、清永順子、
後藤チエ子、高木貴美子、杉田弘子

整理員 高木貴美子、仙石京子、本橋和子、大平由紀恵、松下留美子、宮下千賀子、
安田恭子

10. 発掘調査及び整理作業には下記の方々のご指導、助言を得ました。記して感謝の意を表す
しだいで。

文化庁記念物課 瀬宣田佳男、東京大学大学院人文社会系研究科 宇田川洋、同 熊木俊
朗、東京大学大学院新領域創成科学研究科 佐藤宏之、東京大学大学院 山田哲、網走市
立郷土博物館 和田英昭、同 米村衛、美幌町農業博物館 小林敬、斜里町知床博物館
合地信生、同 松田功、田中コンサルタント 豊原熙司、北海道教育委員会 千葉英一、
田才雅彦、宗像公司、北海道網走支庁東部耕地出張所 守山耕一

また、土地所有者の林敏洋氏には発掘調査に際し格段のご理解とご協力を得ました。

目 次

序	常呂町教育委員会 教育長 谷 昭 廣	i
例 言	ii
第 I 章	調査の概要.....	1
第 II 章	遺構.....	8
第 III 章	発掘区の遺物.....	45
第 IV 章	まとめ.....	82

附 編

附編 1 TK60遺跡出土焼土に含まれる鉱物とその熱履歴について
斜里町立博物館 合 地 信 生

附編 2 TK60遺跡出土の黒曜石産地分析
北海道教育大学旭川校 和 田 恵 治

附編 3 TK60遺跡から出土した炭化材の樹種
パリノサーヴェイ (株)

附編 4 年代測定結果報告書
(株) 加速器分析研究所

挿 図 目 次

第1図	T K60遺跡と周辺の遺跡位置図……………3	第32図	住居、発掘区遺物出土状況……………44
第2図	サロマ湖周辺の地形変遷図……………4	第33図	縄文早期土器・前期土器出土状況…46
第3図	T K60遺跡遺構配置図……………5	第34図	縄文中期土器・晩期土器出土状況…47
第4図	T K60遺跡地形図……………6	第35図	発掘区出土土器……………48
第5図	発掘区土層図……………7	第36図	発掘区出土土器……………49
第6図	1号竪穴平面図……………9	第37図	発掘区出土土器……………50
第7図	1号竪穴床面・埋土出土土器……………10	第38図	発掘区出土土器・土製品……………51
第8図	ピット1、2、3、4、7平面図…11	第39図	K8発掘区一括石器出土状況……………52
第9図	2号竪穴・2a号竪穴平面図……………13	第40図	K8発掘区一括石器……………54
第10図	2号竪穴床面・埋土、2a号竪穴床面 埋土出土土器……………14	第41図	発掘区出土石器……………55
第11図	2b号竪穴、ピット9平面図……………16	第42図	発掘区出土石器……………56
第12図	1号竪穴床面・埋土、2b号竪穴床面 ・埋土、3号竪穴床面・埋土、4号竪 穴床面・埋土出土土器……………18	第43図	発掘区出土石器……………57
第13図	2b号竪穴埋土出土土器……………19	第44図	発掘区出土石器……………58
第14図	2b号竪穴埋土出土土器……………20	第45図	発掘区出土石器……………59
第15図	2b号竪穴埋土出土土器……………21	第46図	発掘区出土石器……………60
第16図	3号竪穴、ピット6平面図……………22	第47図	発掘区出土石器……………61
第17図	3号竪穴床面・埋土出土土器……………24	第48図	発掘区出土石器……………64
第18図	3号竪穴埋土出土土器……………25	第49図	発掘区出土石器……………65
第19図	4号竪穴、ピット5平面図……………27	第50図	発掘区出土石器……………66
第20図	4号竪穴床面・埋土出土土器……………28	第51図	発掘区出土石器……………67
第21図	4号竪穴床面出土土器……………29	第52図	発掘区出土石器……………68
第22図	5号竪穴、ピット8平面図……………32	第53図	発掘区出土石器……………69
第23図	5号竪穴床面・埋土出土土器……………34	第54図	発掘区出土石器……………70
第24図	5号竪穴埋土出土土器……………35	第55図	発掘区出土石器……………71
第25図	5号竪穴床面・埋土出土土器……………36	第56図	発掘区出土石器……………72
第26図	6号竪穴埋土出土土器……………37	第57図	発掘区出土石器……………73
第27図	6号竪穴平面図・遺物出土分布図…38	第58図	発掘区出土石器……………74
第28図	6号竪穴床面・埋土出土土器……………40	第59図	発掘区出土石器……………75
第29図	6号竪穴・埋土出土土器……………41	第60図	発掘区出土石器……………76
第30図	6号竪穴床面・埋土、ピット4、7 埋土出土土器……………42	第61図	発掘区出土石器……………77
第31図	6号竪穴床面・埋土、ピット5床面 出土土器……………43	第62図	発掘区出土石器……………78
		第63図	発掘区出土石器……………79
		第64図	発掘区出土石器……………80
		第65図	発掘区出土石器……………81

図 版 目 次

図版1	1号竪穴遺物出土状況	図版17	ピット4、ピット7
	1号竪穴	図版18	K8発掘区一括石器出土状況

図版 2	1号竪穴床面石器出土状況 1号竪穴床面・埋土出土石器	図版19	K 8 発掘区一括石器 発掘区出土石器
図版 3	2号竪穴 2号竪穴床面・埋土出土石器	図版20	発掘区出土石器
図版 4	2号竪穴・2 a号竪穴 2 a号竪穴炭化材検出状況	図版21	発掘区出土石器
図版 5	2 a号竪穴床面・埋土出土石器 2 b号竪穴	図版22	発掘区出土石器
図版 6	2 b号竪穴床面・埋土出土石器	図版23	発掘区出土石器
図版 7	2 b号竪穴埋土出土石器	図版24	発掘区出土石器
図版 8	3号竪穴 3号竪穴埋土石器出土状況	図版25	発掘区出土石器
図版 9	3号竪穴埋土出土石器	図版26	発掘区出土石器
図版10	4号竪穴 4号竪穴床面出土石器	図版27	発掘区出土石器
図版11	4号竪穴床面出土石器 4号竪穴埋土出土石器	図版28	発掘区出土石器
図版12	5号竪穴遺物出土状況 5号竪穴	図版29	発掘区出土石器
図版13	5号竪穴床面出土石器 5号竪穴埋土出土石器	図版30	発掘区出土石器
図版14	6号竪穴 6号竪穴床面土器出土状況	図版31	発掘区出土石器
図版15	6号竪穴床面・埋土出土土器	図版32	発掘区出土石器
図版16	ピット2、ピット3	図版33	発掘区出土石器
		図版34	発掘区出土石器
		図版35	発掘区出土石器
		図版36	発掘区出土石器
		図版37	発掘区出土石器
		図版38	発掘区出土石器
		図版39	発掘区出土石器
		図版41	発掘区出土石器

付編表図版目次

付編 I

図 1	化学反応と示差熱分析法 (D T A) との関係	84
図 2	資料 1 (加熱前) の X 線回折分析による鉱物同定	86
図 3	資料 1 (加熱後) の X 線回折分析による鉱物同定	86
図 4	資料 1 の示差熱分析	87
図 5	資料 2 (加熱前) の X 線回折分析による鉱物同定	89
図 6	資料 2 (加熱後) の X 線回折分析による鉱物同定	89
図 7	資料 2 の示差熱分析	90
写真 1	塊状の資料 1 (左側) と固結度の乏しい資料 2 (右側)	92
写真 2	示差熱分析計 (北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学)	92

付編 II

図 1	黒曜石原産地同定ダイアグラム	94
表 1	黒曜石ガラス化の化学分析値	95

付編Ⅲ

表 1	樹種同定結果	96
図 1	炭化材(1)	98
	ヤナギ属	
	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	トネリコ属	
図 2	炭化材(2)	99
	ハリギリ	

付編Ⅳ

表 1	B P年代および炭素の同位体比	101
-----	-----------------	-----

口 絵 写 真

- 口絵 1 (1) T K60遺跡調査地遠景(南側より撮影)
(2) T K60遺跡調査状況(東側より撮影)
- 口絵 2 (1) 3号竪穴埋土出土の刻線石器
(2) 発掘区石器出土状況

第 I 章 調査の概要

1. 調査に至る経緯

平成12年7月7日に埋蔵文化財保護のための事前協議書が網走支庁長より提出された。その結果、TK30、TK31、TK32、TK33、TK34、TK35、TK36、TK40、TK41、TK42、TK45、TK46、TK50、TK52、TK55、TK56、TK57、TK58、TK59、TK60、TK61、TK62、TK63、TK64、ST01、ST02、TK04、TK05、TK06、TK07、TK11、TK12、TK13、TK14、TK20、TK27の36遺跡が該当することが明らかとなった。計画地域が広範囲に及び該当する遺跡も多いため事前打合せを8月30日に行い、所在調査を11月17日～20日に北海道教育委員会と常呂町教育委員会で実施することとなった。所在調査の結果、該当遺跡の大部分は客土、深度破碎などの工事であり遺跡に直接影響を与えるものでないため工事着工差し支えなし、慎重工事、工事立会が必要との回答が12月22日にあった。しかし土地改良に該当されるTK60遺跡、同61遺跡、同62遺跡については包蔵地範囲確認調査の実施が必要とされ平成13年5月8日～5月10日に北海道教育委員会と常呂町教育委員会で実施した。その結果、TK60遺跡では縄文早期の遺物包含層を確認した。TK61遺跡では過去の農地造成により遺物包含層は消失していることが確認され、TK62遺跡では遺物包含層は認められなかった。

これらの結果を受けて網走支庁と遺跡保護の観点から計画変更等の協議を図ったが、同畑地が急斜面にあり営農上の大きな障害となっているため、土地改良はやむを得ないものと判断され、平成15年5月12日から10月31日まで調査を実施することとなった。

2. 遺跡の環境と周辺の遺跡

常呂町の地形は標高85～70mの高位段丘、標高35～20mの中位段丘、標高10～5mの低位段丘に別けられている。その中で本遺跡は「岐阜台地」と通称される中位段丘（第1図）にある。「岐阜台地」にはこれまでのところ55箇所及び遺跡が確認されている。岐阜台地には樹枝状の小谷が幾つも入り込む。小谷は湧水源でもあり、遺跡は台地端部や縁辺部など小谷の周辺に遺されていることが多い。一方、本遺跡は縄文早期（約7,000年前）を主体としていることが明らかとなったが、この頃の地形は現在と大きく異なりサロマ湾とトコロ湾の湾状地形であったとされている（第2図-1）。縄文前期末の本遺跡はトコロ湾から西側に入り込む入り江の縁部にあったことになる（第2図-2）。

本遺跡は南側に面する比較的急斜面にある。調査区最上部にあるE12発掘区と最下部の比高差は5.6mである。調査区域の中で特に西側は斜度約10°の急斜となるものの、堅穴が密集する区域では斜度も幾分弱くなり、南側に低くなるにつれて緩い斜面となる。周辺の全体地形を見ると堅穴のある区域から発掘区域外の東側にかけて僅かであるが内湾する傾向がある。（第

4 図) 遺跡の主体は東側に向かう内湾沿いにある可能性が高く、今回検出した遺構はその西側一部をなすものと思われる。

岐阜台地においてこれまで発掘調査された遺跡は岐阜第 1 遺跡、同第 2 遺跡、同第 3 遺跡である。これらの遺跡は岐阜台地の北側にあるもので、南側では今回の T K 60 遺跡が最初の発掘調査となった。北側の遺跡は縄文早期、前期、中期、晩期、続縄文、擦文の各期に及び遺物も多量に出土するが、本遺跡は縄文早期を主体に縄文前期末葉の竪穴があるだけであり、遺物も調査面積の割に多くはない。同一台地上において北側と南側では明らかに立地や年代構成が異なり、時期毎の集落の分布を比較する上で少なからずの情報を得ることができた。

3. 基本土層

本遺跡の基本土層は(第 5 図)に示す通り第 I 層表土、第 II 層暗褐色土、第 III 層暗黄褐色土の 3 層に分層される。しかし、この III 層は発掘区全域で一様に堆積しているわけではない。大部分の発掘区では第 II 層と第 III 層が欠落しており、第 I 層の表土を剥土すると地山である 2～3 mm の粒子の粗い山砂を混入する重粘土が露呈する状態である。第 II 層、第 III 層が最も顕著に堆積するのは各アルファベットの 2～7 グリッドにかけてである。この区域は(第 3 図)に示すとおり傾斜がきついながらも下面に移行するに従いしだいに緩斜面となる。包含層出土の遺物もこの区域に最も集中している。

4. 調査グリッド

発掘調査グリッドは D 基である X (12347.70)、Y (-19681.89) と E 基である X (12363.28)、Y (-19906.69) を基準に設定した(第 4 図)。各グリッドの呼称は東西をアルファベット、南北を数字で表わした。

(武田 修)

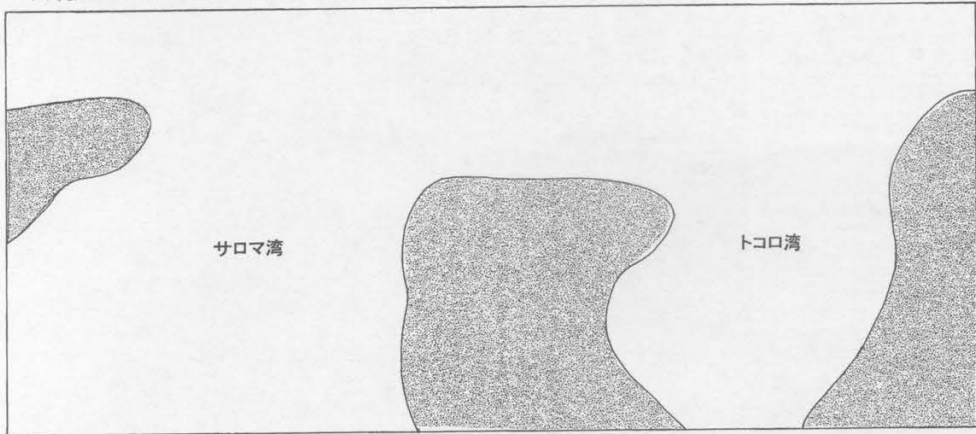
凡 例

記号	遺 跡 名
a	岐阜第1遺跡
b	岐阜第2遺跡
c	岐阜第3遺跡
d	史跡常呂遺跡
e	史跡常呂遺跡
f	ライトコロ川口遺跡
g	栄浦第一遺跡

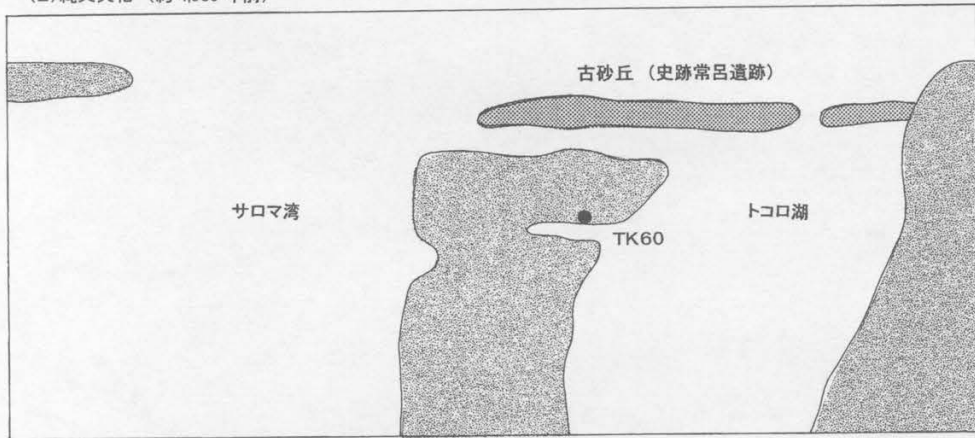


第1図 TK60遺跡と周辺の遺跡位置図

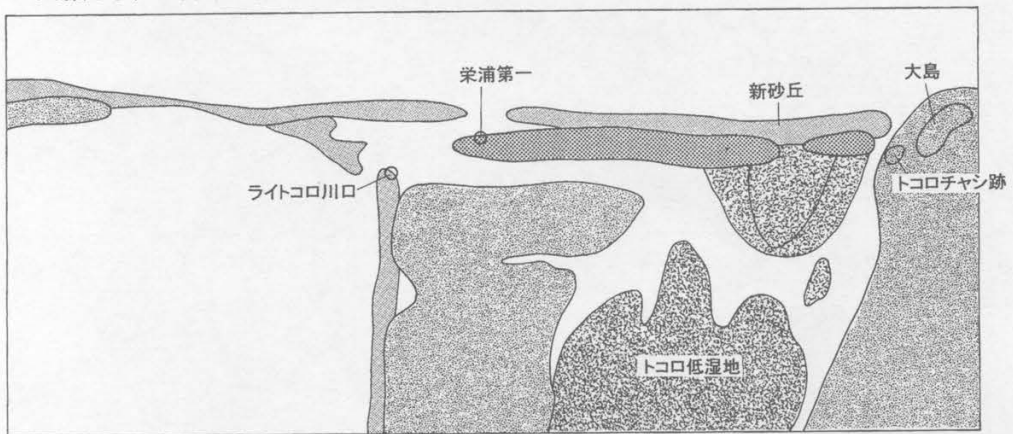
(1)縄文文化 (約 7,000 年前)



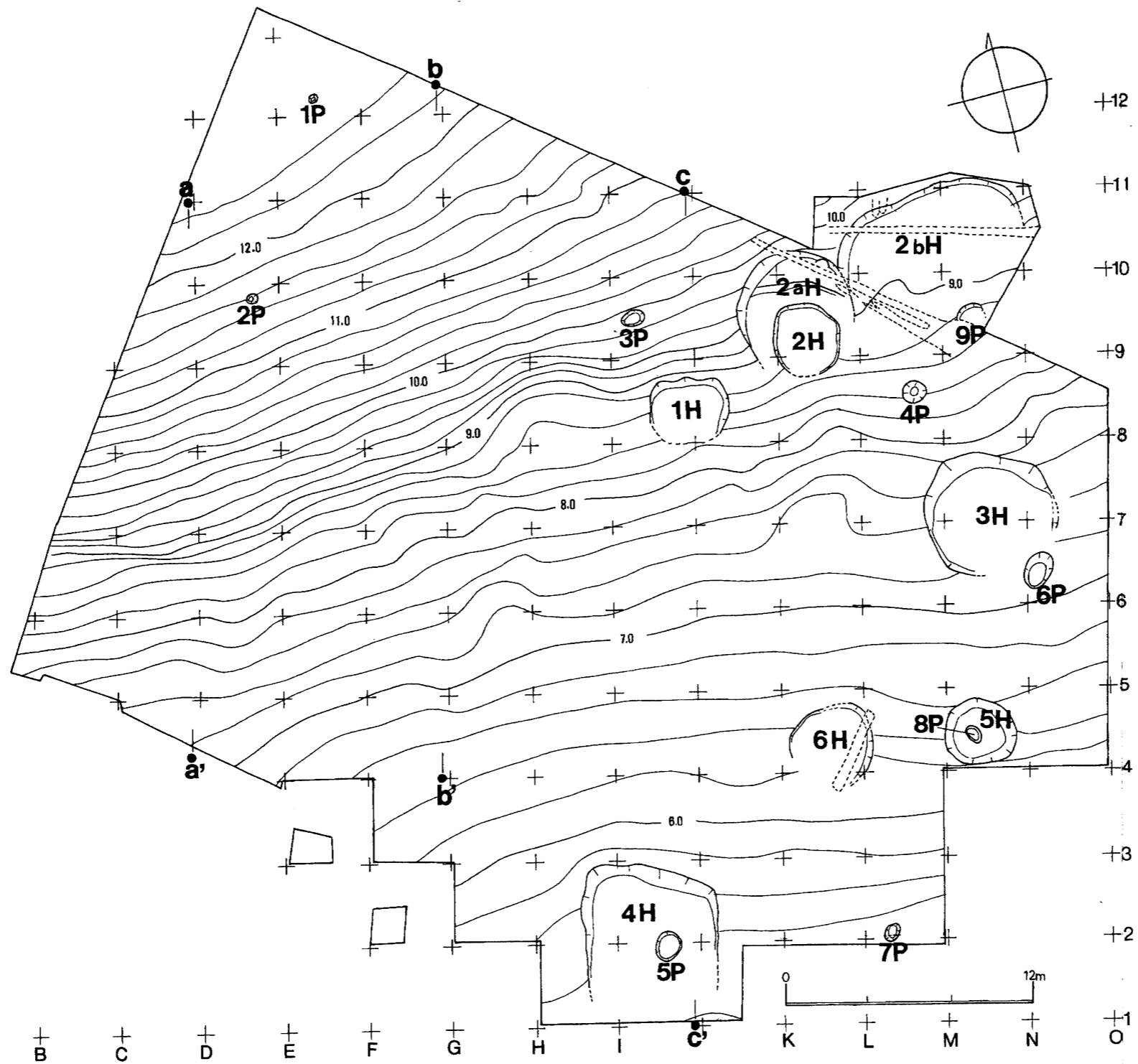
(2)縄文文化 (約 4,000 年前)



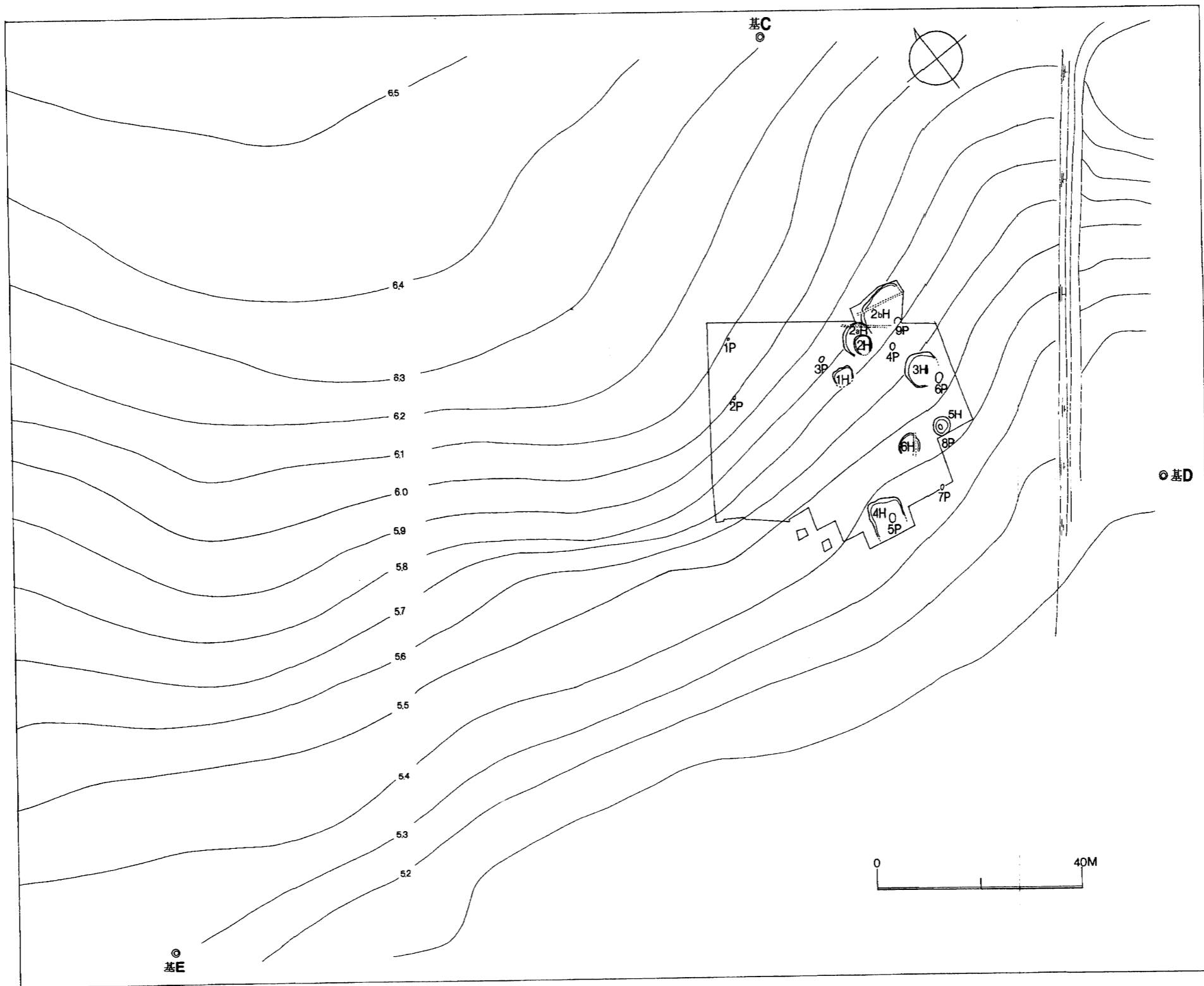
(3) 擦文・オホーツク文化 (約1,000年前)



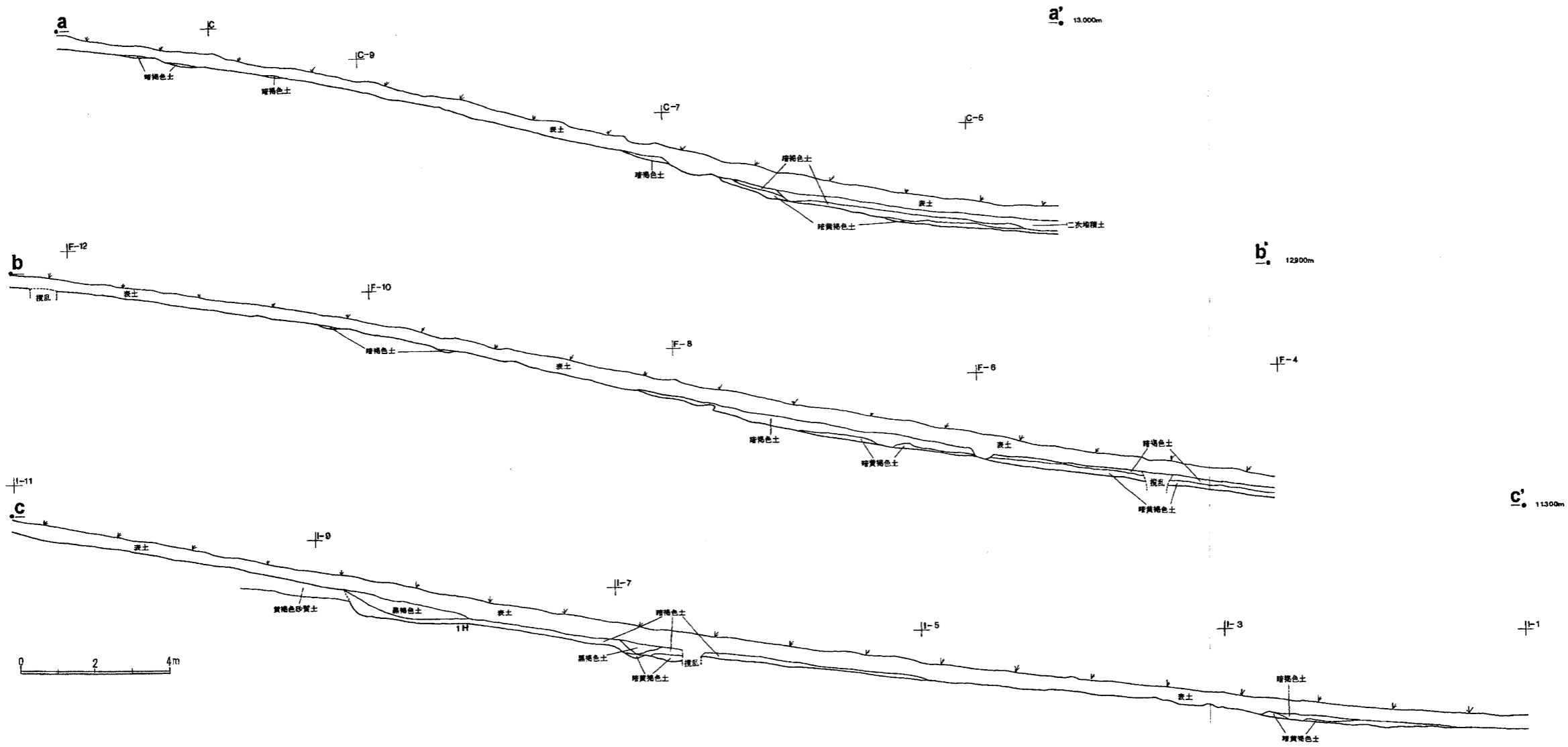
第2図 サロマ湖周辺の地形変遷図



第3图 TK60遺跡遺構配置図



第4図 TK60遺跡基準杭設置位置図



第5图 发掘区土层图

第Ⅱ章 遺 構

1 号 竪 穴

遺 構 (第6図、図版1)

本竪穴はI 8～J 8グリッドの表土を剥土後に黒褐色土と暗褐色土の落ち込みが認められたため調査を行った。規模は東西3.70m、南北は約3.30mと思われる。壁高は北壁が確認面から約40cm、東西の壁は北側から南側にかけてしだいに浅くなり、南壁はほとんど検出できなかった。南西側の壁の一部は倒木痕によって破壊されている。竪穴中央より西側に多少寄ったところに炉跡と思われる焼土がある。竪穴の中央付近の床面から第7図-6の石斧が出土し、その西側では第7図-1～5の削器、石匙、石鏃が第6図の上部に示すとおり、平らに並べられた状態で出土した。

柱穴は支柱穴と思われる直径12cm、深さ14cmのものが1本、壁柱穴は直径6～12cm、深さ4～8cmのものが3本確認された。

遺 物 (第12図-1～4、第7図、図版2)

第12図-1は床面出土。胎土に繊維を含む縄文前期の土器。2は無文のミニチュア土器。3は口縁部が内屈した無文土器。4も繊維を含む。補修口の右側に燃糸文が施される。縄文前期。

石器は第7図-1～6が床面と7が近接した位置から出土した。1は有茎石鏃。2は石鏃の未製品。3は石匙。4は削器。5は使用痕のある剥片。6は磨製石斧。7は石匙。8は石皿。1・2・4・5は黒曜石製。3・7は頁岩製。6は青色泥岩製。8は砂岩製。

小 括

本竪穴は床面から良好な土器が出土していないため時期は不明であるが、平面形態から縄文早期の可能性はある。

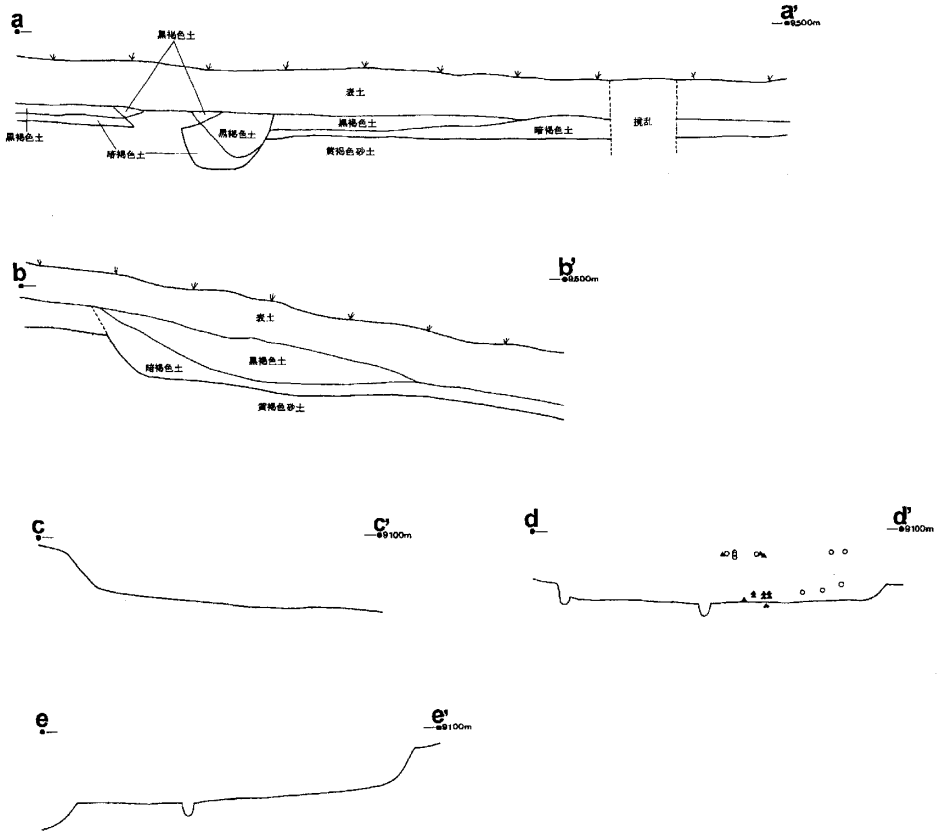
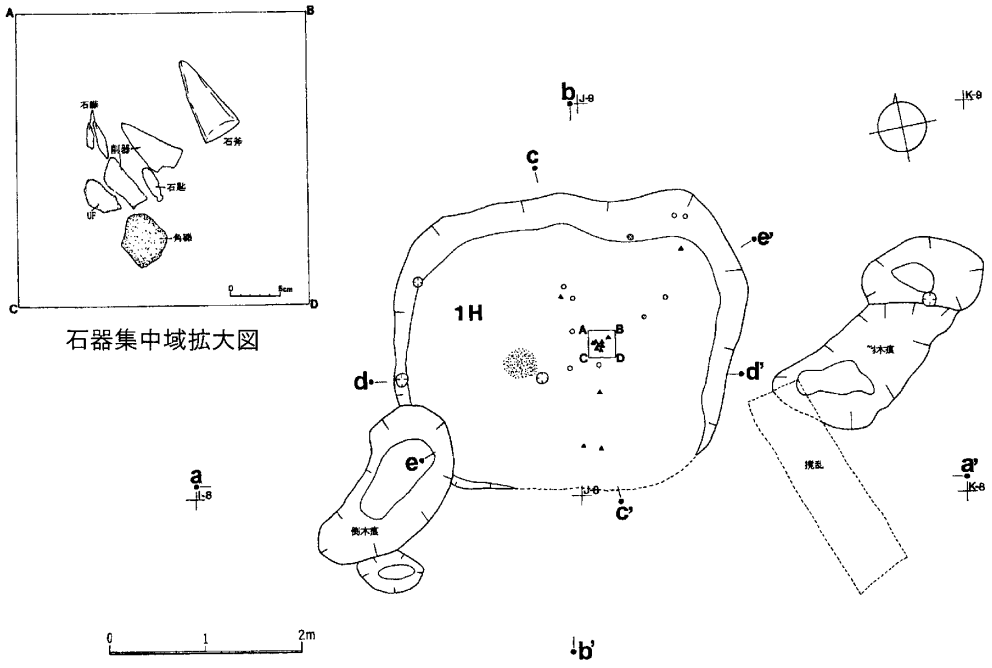
(佐々木 覚)

ピ ッ ト 1

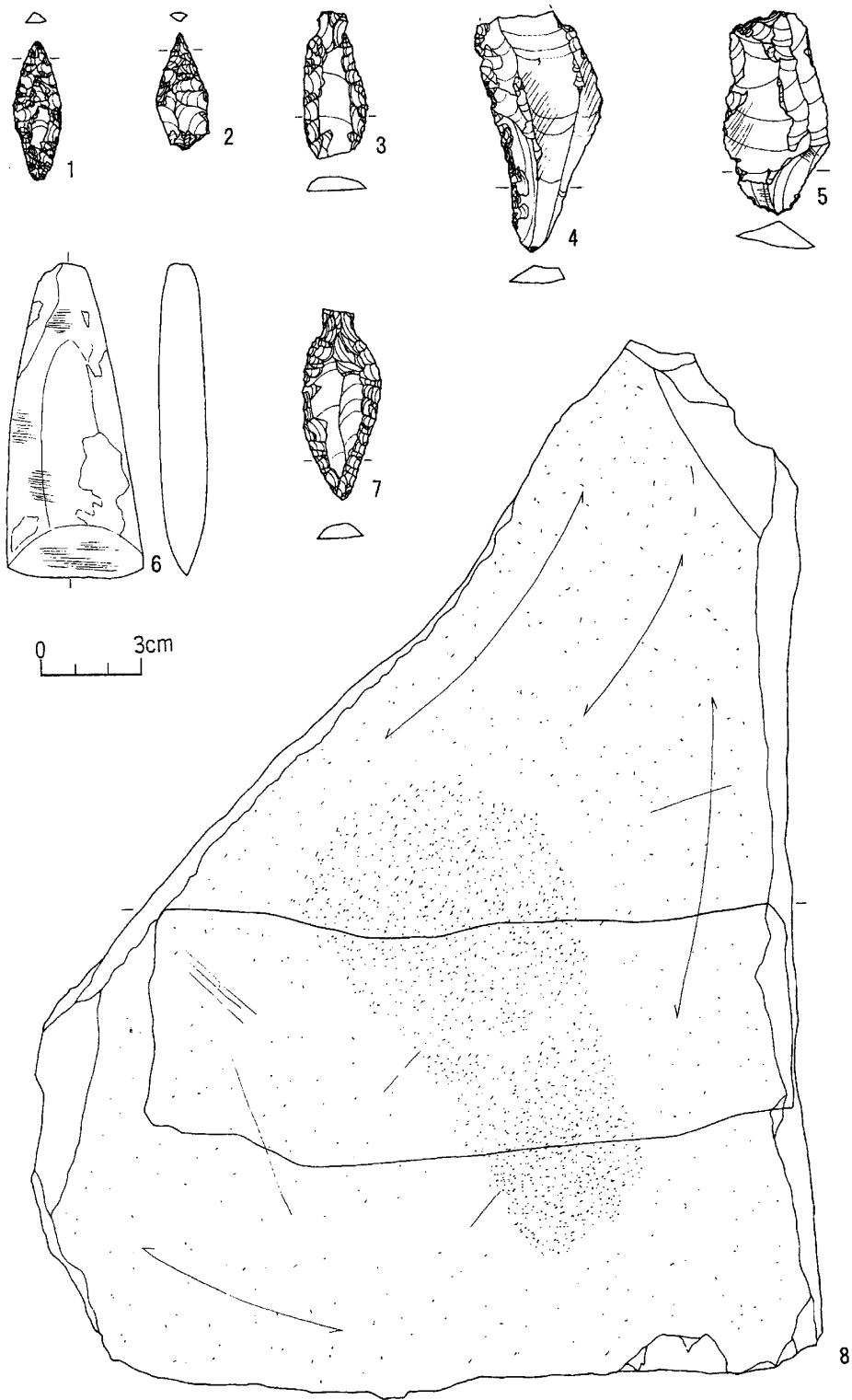
遺 構 (第8図)

本ピットはE11～E12グリッドにかけて位置する。長軸約0.42m、短軸約0.35mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約15cmを測る。埋土は暗褐色土だけが堆積し、遺物は出土していない。

(佐々木 覚)



第6图 1号竖穴平面图



第7图 1号竖穴床面(1~6)·埋土(7·8)出土石器

ピ ッ ト 2

遺 構 (第8図、図版16-1)

本ピットはD9グリッドに位置する。直径約0.60mの不整形円形を呈し、壁高は確認面から約20cmを測る。埋土は暗褐色土であるが、壁際や床面直上の一部には黄褐色土が混入する。遺物は出土していない。

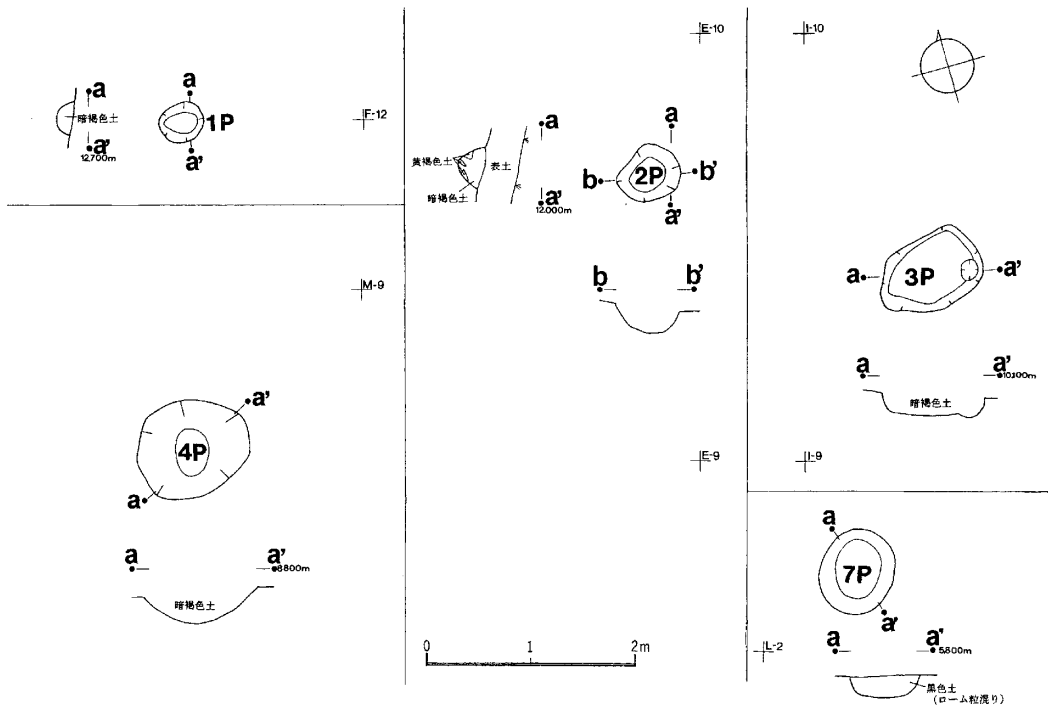
(佐々木 寛)

ピ ッ ト 3

遺 構 (第8図、図版16-2)

本ピットはI9グリッドに位置する。規模は長軸約1.0m、短軸約0.68mの五角形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測る。ピットの東隅の床面には小さく浅い窪みがある。埋土は暗褐色土が堆積し、遺物は出土していない。

(佐々木 寛)



第8図 ピット1、2、3、4、7平面図

ピ ッ ト 4

遺 構 (第8図、図版17-1)

本ピットはL 8 グリッドに位置する。規模は長軸約1.08m、短軸約0.90mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約30cmを測る。床面直上や暗褐色土層中から土器が出土している。

遺 物 (第30図-10・11)

この2点は埋土出土である。2点とも風化が著しいため文様等は不鮮明である。10は円形文が見られ、11は撚糸が施される。2点は縄文前期と思われる。

(佐々木 覚)

2 号 豎 穴

遺 構 (第9図、図版3-1)

本豎穴は2 a 号豎穴を調査中に発見した。規模は長軸約3.20m、短軸約3.0mの不整円形を呈する。南壁は斜面にあるため一部を検出できただけである。各壁は緩く立ち上がり、壁高は確認面から北壁約35cm、西壁約17cm、東壁約15cmを測る。柱穴は直径16~18cm、深さ約18~35cmの主柱穴が4本、壁柱穴は直径8~10cm、深さ5~8cmのものを3本検出した。炉跡は認められない。

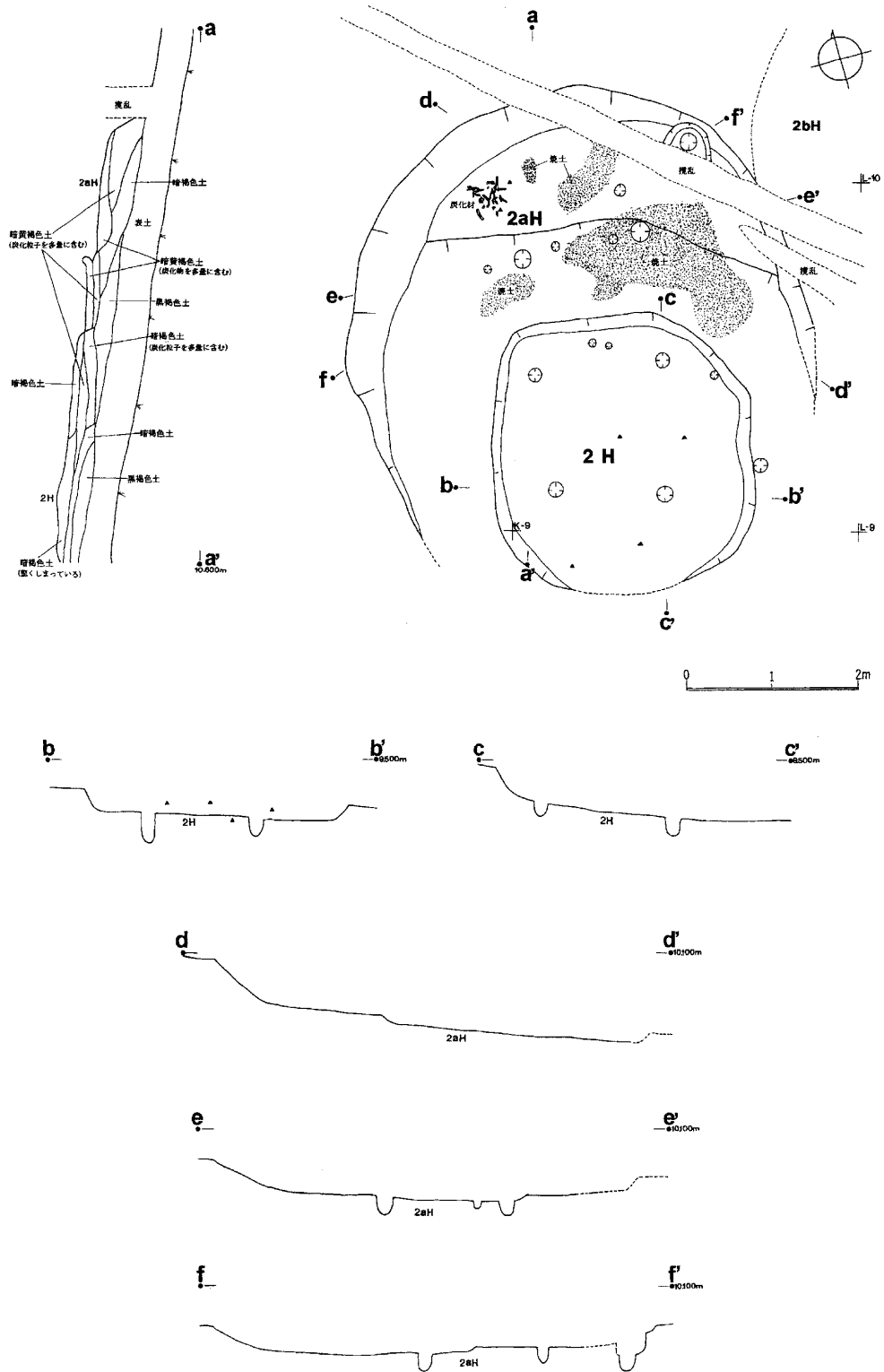
遺 物 (第10図-1~5、図版3-2~6)

土器は出土していない。石器は第10図-1が石槍、2が片面加工ナイフ。2点は床面出土である。埋土からは3が有茎石鏃。4が片面加工ナイフ。5が石皿。1~4は黒曜石製、5は砂岩製である。

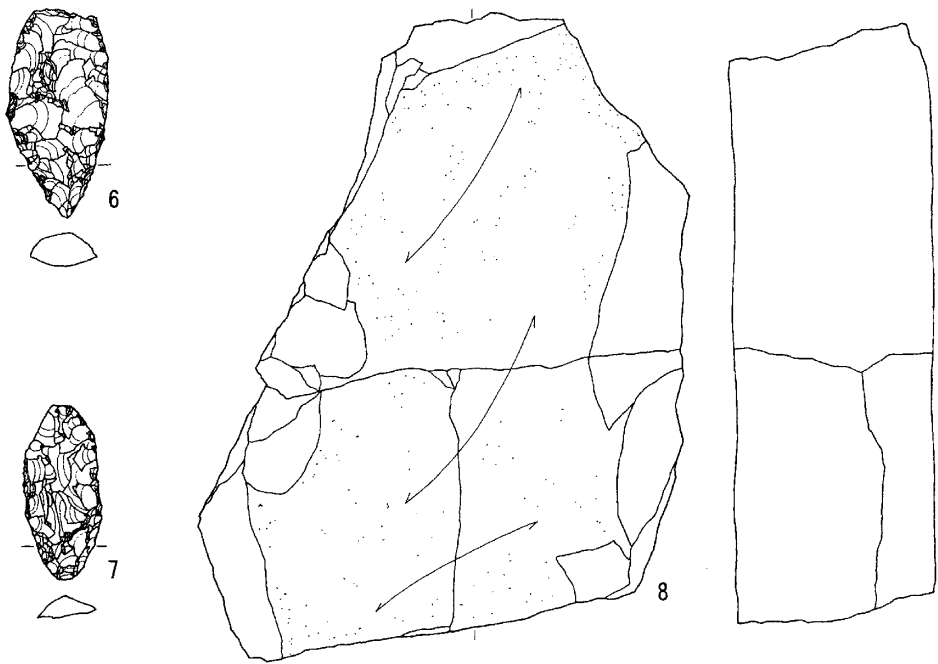
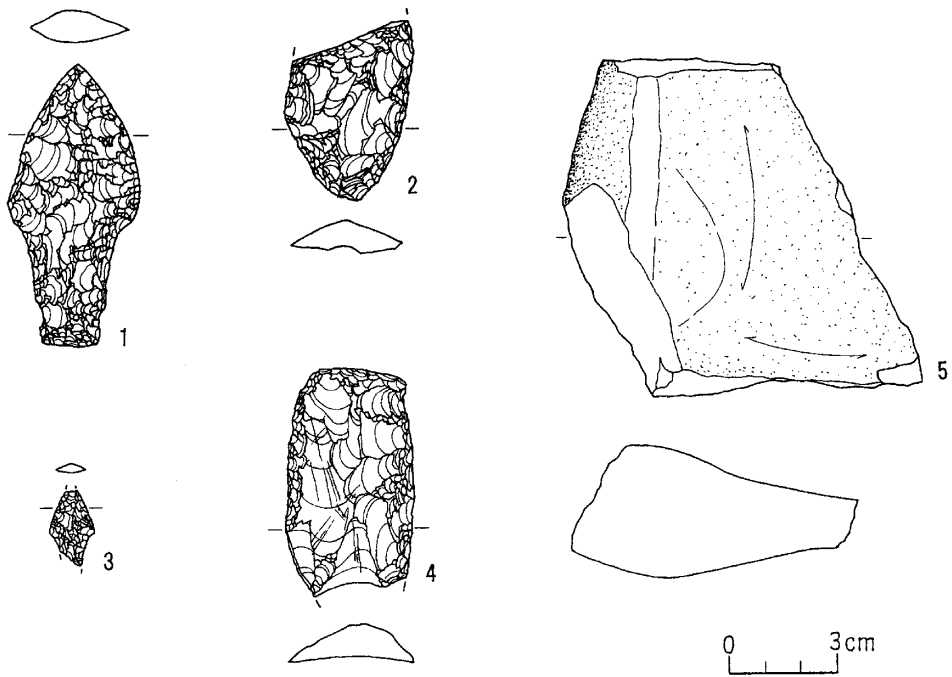
小 括

2 a 号豎穴より新しい時期のものであるが詳細は不明である。

(佐々木 覚)



第9図 2号竖穴、2a号竖穴平面図



第10图 2号竖穴床面(1·2)·埋土(3~5)、2 a号竖穴床面(6)·埋土(7·8)出土石器

2 a 号 豎 穴

遺 構 (第9図、図版4)

本豎穴はJ9～K9グリッドにかけて位置する。表土を剥土後に黒褐色土と暗褐色土の落ち込みが認められたため調査した。規模は東西約5.20mであるが、南北は南側が斜面にあるため検出できなかった。形態は円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。壁は緩く立ち上がり、壁高は北壁が約40cmを測る。東壁、西壁は北壁側からしだいに浅くなり消滅する。柱穴は直径8～20cm、深さ9～21cmのものが8本確認された。中央から南側は2号豎穴に破壊されているためであろう炉跡は認められなかった。豎穴埋土から床面にかけて多量の焼土と赤化した礫が多数出土している。埋土中や北壁際には炭化物が多量に含まれており焼失住居と考えられる。

北壁から約1m内側では10cmほど高いステージとなっている。北東壁際の柱穴は深さ約14cmの浅い掘り込みの中にある。

遺 物 (第10図-6～8、図版5-1～3)

第10図-6・7は片面加工ナイフ。8は石皿。表裏面に砥面がある。6・7は黒曜石製。8は砂岩製。

小 括

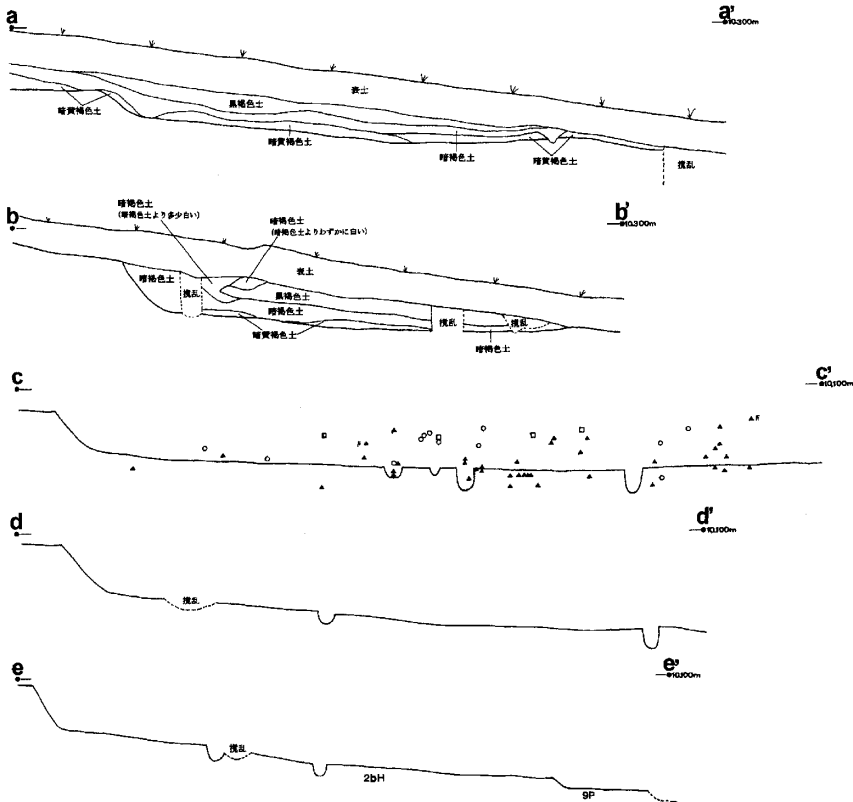
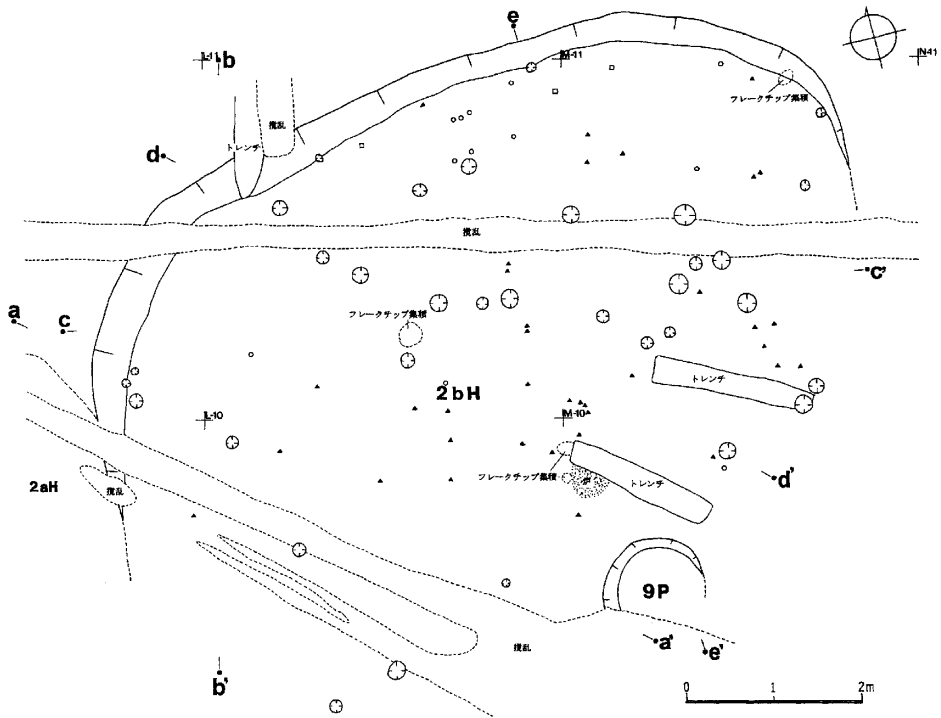
本豎穴は床面から土器が出土していないため時期は不明である。焼土、炭化材を伴う焼失住居である。

(佐々木 寛)

2 b 号 豎 穴

遺 構 (第11図、図版5-4)

本豎穴は2 a号豎穴の東側と重複する。2 a号豎穴との切り合いは僅かに接し、接している部分の大半は暗渠管の埋設による攪乱を受けているため明確に把握できなかった。規模は東西9.0m。北壁は認められたが南壁は斜面により欠失しているため全体の形態は不明である。北壁は緩く立ち上がり、壁高は確認面から約50cmを測る。柱穴は直径14～22cm、深さ21～35cmの主柱穴と思われるものが4本、直径8～16cm、深さ7～15cmの壁柱穴が7本ある。その他、直径6～20cm、深さ8～31cmの柱穴が23本認められた。炉跡は豎穴のほぼ中央に位置する。埋土上部からの試掘により半分を破壊してしまったが直径45cmの大きさである。埋土には黒曜石製



第11図 2b号竪穴, ピット9平面図

のフレーク・チップ集積が4箇所認められた。

なお、本竪穴の半分は調査区域外に入り込んでいるため、土地所有者の承諾を得て作物収穫後に発掘区を拡張して行った。

遺物（第12図－5～20、第13図、第14図、第15図、図版6、図版7）

第12図－5は床面出土。縄文前期末の押型文に伴う無文土器。6～20は埋土出土。6は縄文中期トコロ六類。7～9は櫛目文。10・14は短冊形、11は短冊形と菱形、12は矢羽根形、13は短冊形と三角形の押型文が施される。15・16は無文。17は底部に円形文が連続する。18は口唇部に刻み。19・20は縄文早期東釧路系である。

石器は第13図－1～3が床面出土の他は埋土出土である。1は片面加工ナイフ。2は両面加工ナイフ。3は片面加工ナイフ。4～7は石鏃。8・9は両面加工ナイフ。10は石匙。11～17は削器。10は頁岩製、15が玄武岩製の他は黒曜石製。

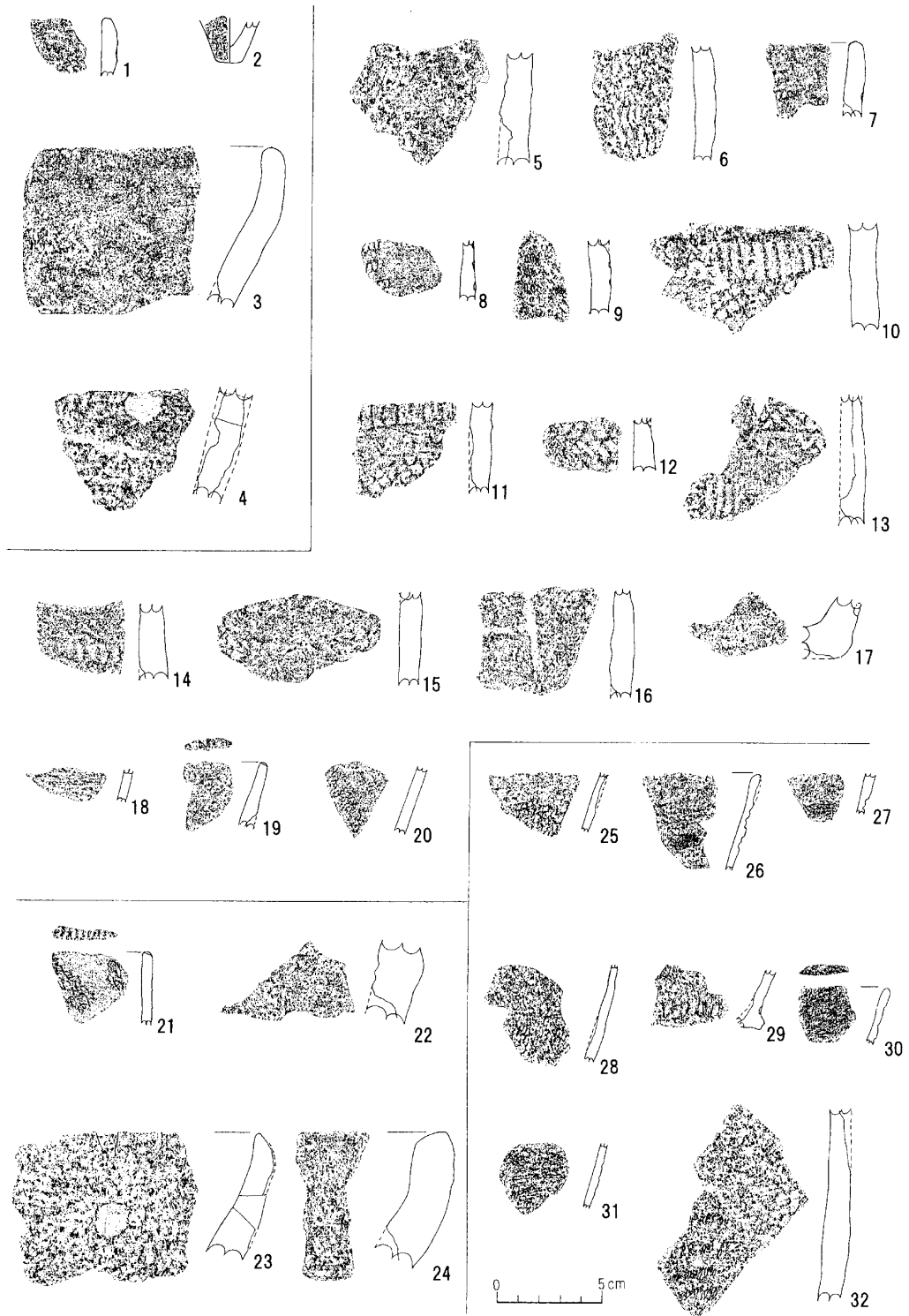
第14図－1は削器。2は石匙。3～10は搔器。3を除き急斜な刃部である。11は石錐。12・13は磨製石斧。1・3～11は黒曜石製・2はメノウ製。12・13は青色片岩製。

第15図－1は石皿。表裏面とも研磨され、一面には「L」字状の浅い溝がみられる。砂岩製。

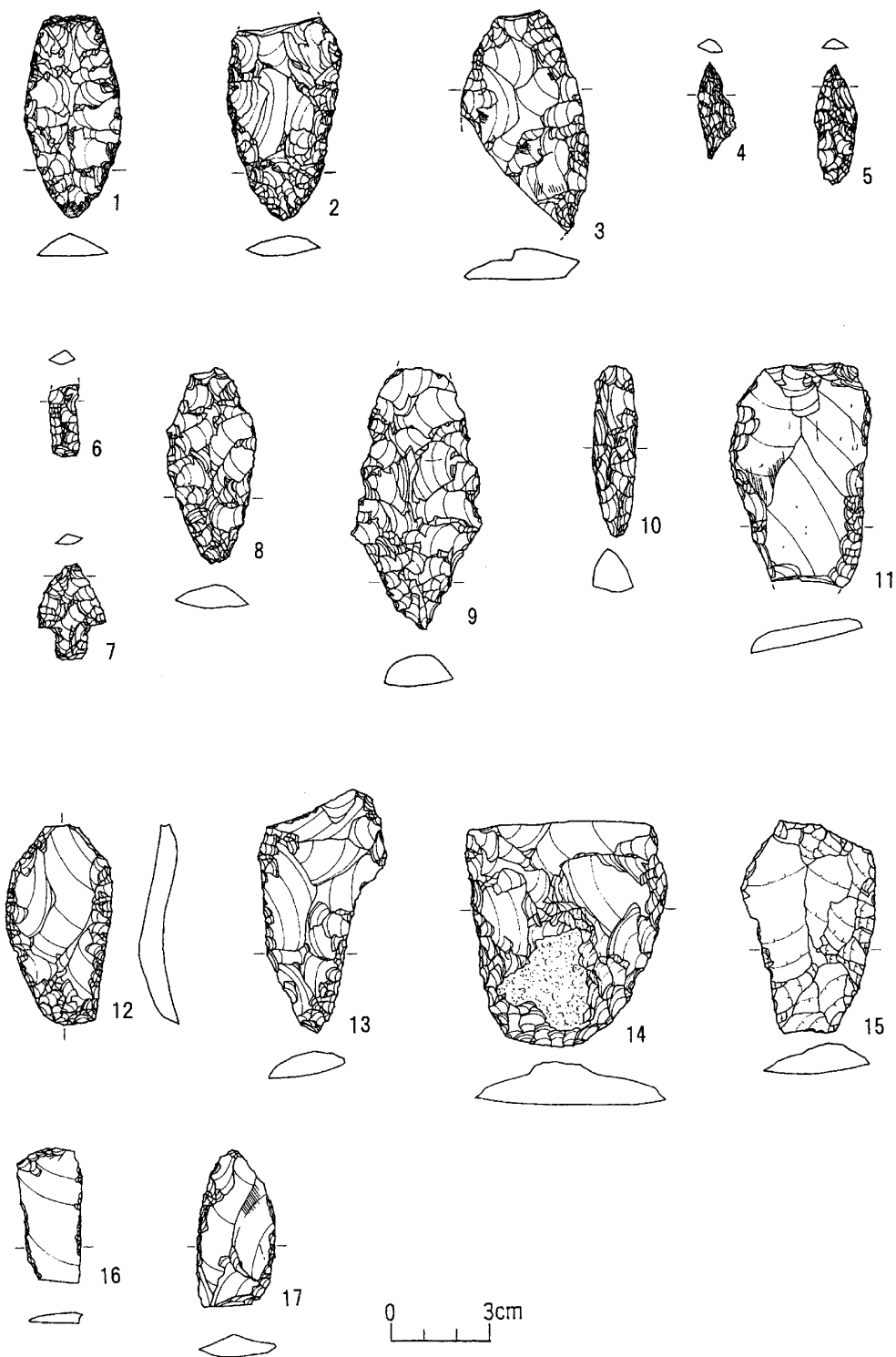
小括

本竪穴は床面と埋土から押型文が出土している。時期は縄文前期末と考えられる。

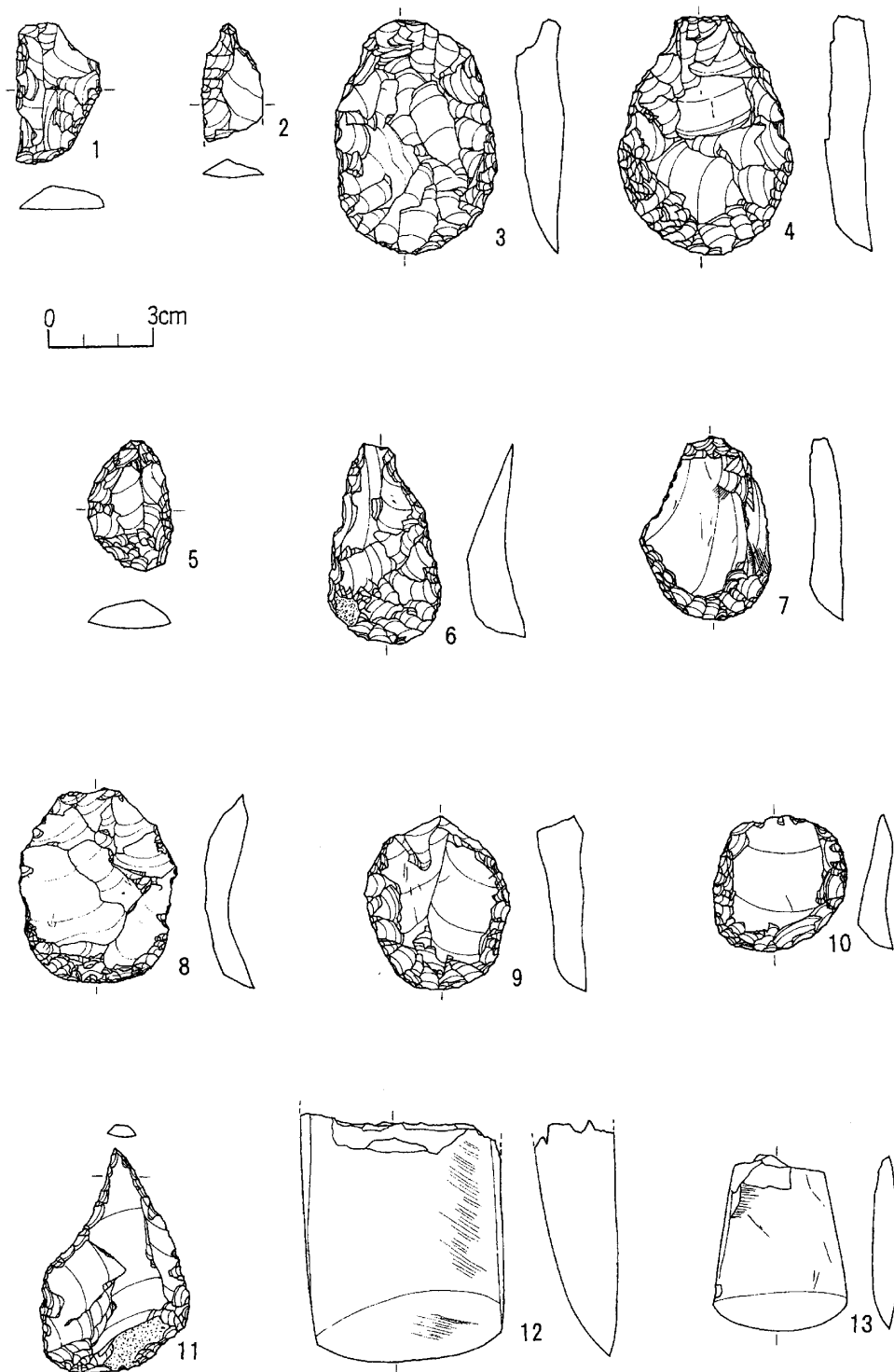
（佐々木 覚）



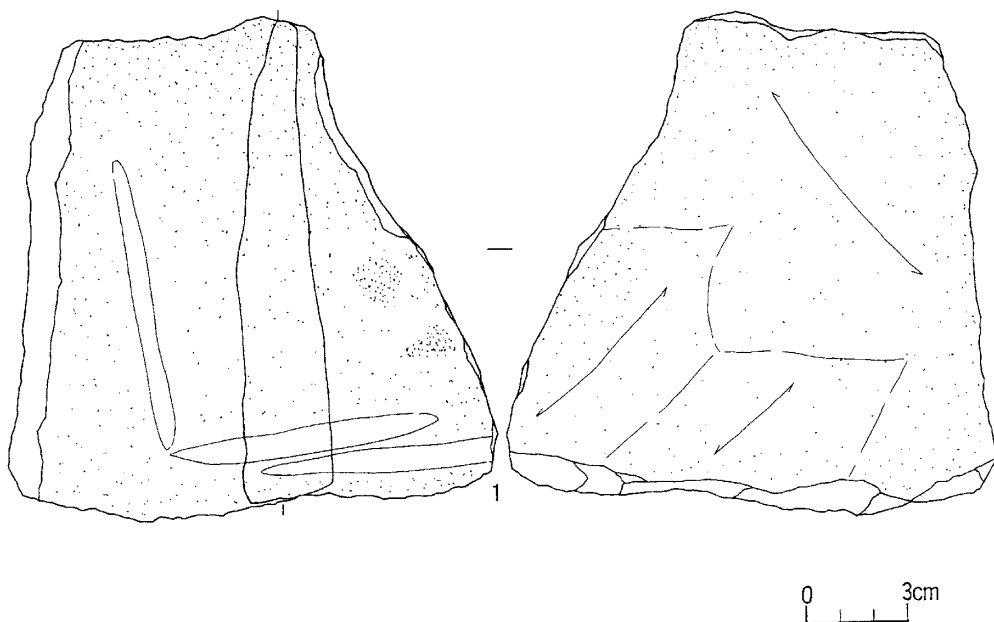
第12图 1号竖穴床面(1)·埋土(2~4)、2 b号竖穴床面(5)、埋土(6~20)、
3号竖穴床面+5cm(21)·埋土(22~24)、4号竖穴床面(25~29)·埋土(30~32)出土土器



第13图 2b号竖穴床面(1~3)·埋土(4~17)出土石器



第14图 2b号竖穴埋土(1~13)出土石器



第15図 2b号竪穴埋土(1)出土石器

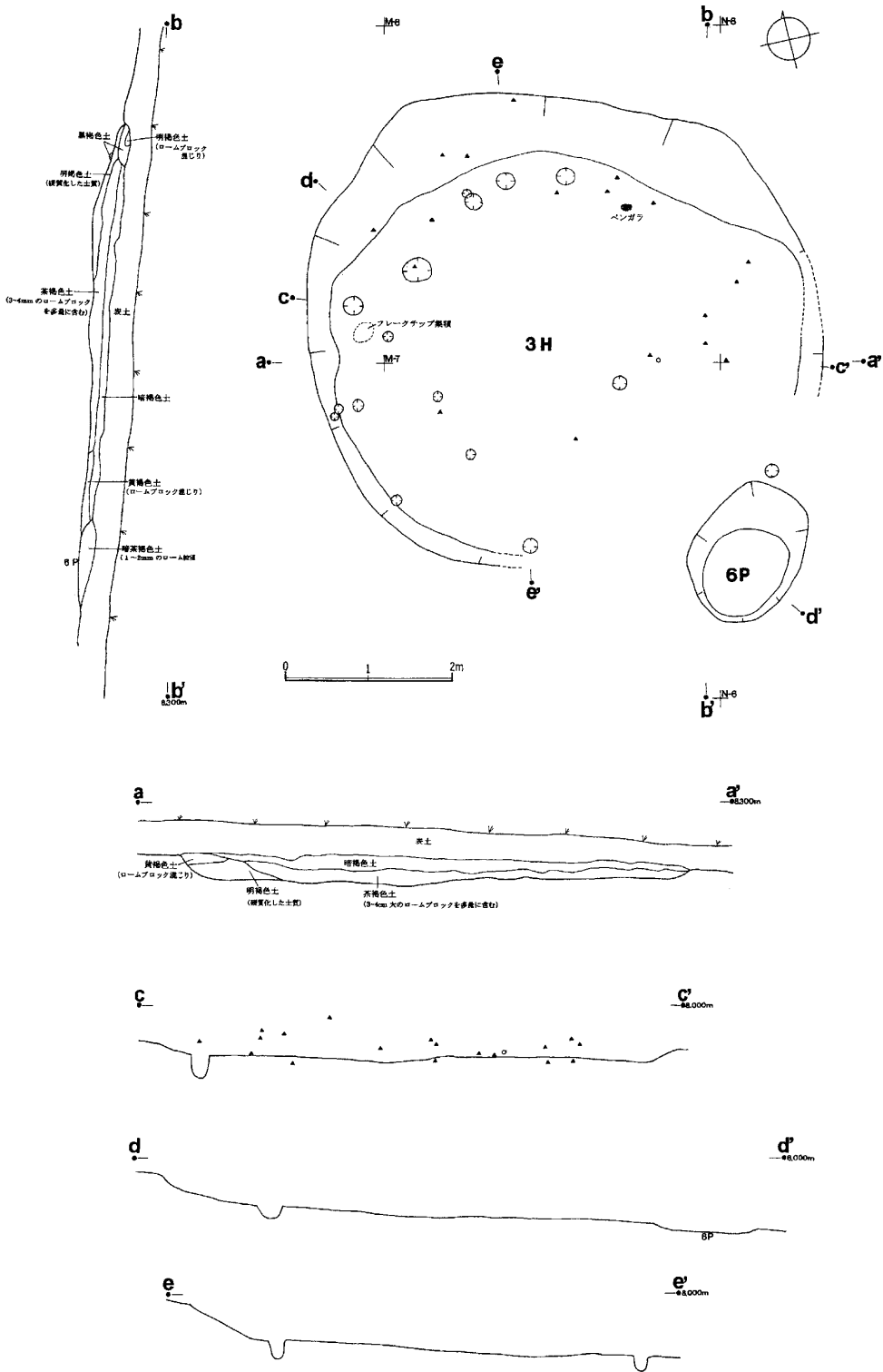
3 号 竪 穴

遺 構 (第16図、図版8-1)

本竪穴はL6・L7、M6・M7、N6・N7グリッドにまたがって位置する。表土を剥土した段階で暗褐色土の落ち込みを確認した。竪穴は基盤層である砂混じりの黄褐色土層(ローム層)を切り込んで構築されている。北・西壁際には硬質化した明褐色土が堆積しており、これを取り除くと基盤層である黄褐色土層が現れ壁を検出した。しかし、斜面に構築されているため北壁は検出できたものの西壁と東壁は一部のみ検出できただけである、南壁は全く検出できなかった。柱穴の存在から本竪穴の規模は東西6.0m、南北5.50mの隅丸方形を呈するものと判断できる。壁は北壁に見られる様に角度が浅い。西壁はやや丸みをもつ。壁高は北壁が確認面から約40cm、西壁30cm、東壁12cmを測る。

掘り進める過程で北壁寄りの埋土中から直径約45cmの範囲に粒状化した焼土が認められた。床面から約20cmほど浮いた状態であり、本竪穴に伴うものではないと思われる。西壁周辺の床面はやや起伏があるものの、他は比較的平坦である。

主柱穴と思われるものは北壁側の5本が相当する様であり、直径約21~33cm、深さ約16~27cmである。ほぼ等間隔に配置される。直径約10~18cm、深さ約5~25cmの壁柱穴は西壁の周囲に多く認められる。



第16図 3号竪穴、ピット6平面図

北東壁側の床面に接して淡いオレンジ色を呈したベンガラが12×6cmの範囲に認められた。炉跡は認められなかった。西壁際からは28×20cmの範囲からフレーク・チップ172点出土。床面から約3cmほど浮いた状態であるが、壁際に堆積した硬質の明褐色土を剥した段階で出土したものであるため本竪穴に伴うのであろう。

遺物（第12図-21～24、第17図、第18図、図版9）

埋土出土の遺物は暗褐色土層の上面から顕著に出土しているものの、床面からの量はそれほど多くない。

第12図-21は口唇部に刻みをもち、縄文の側面圧痕が施された東釧路Ⅲ式。22～24は胎土に植物繊維を多量に含むもので縄文前期繊維尖底土器と思われる。

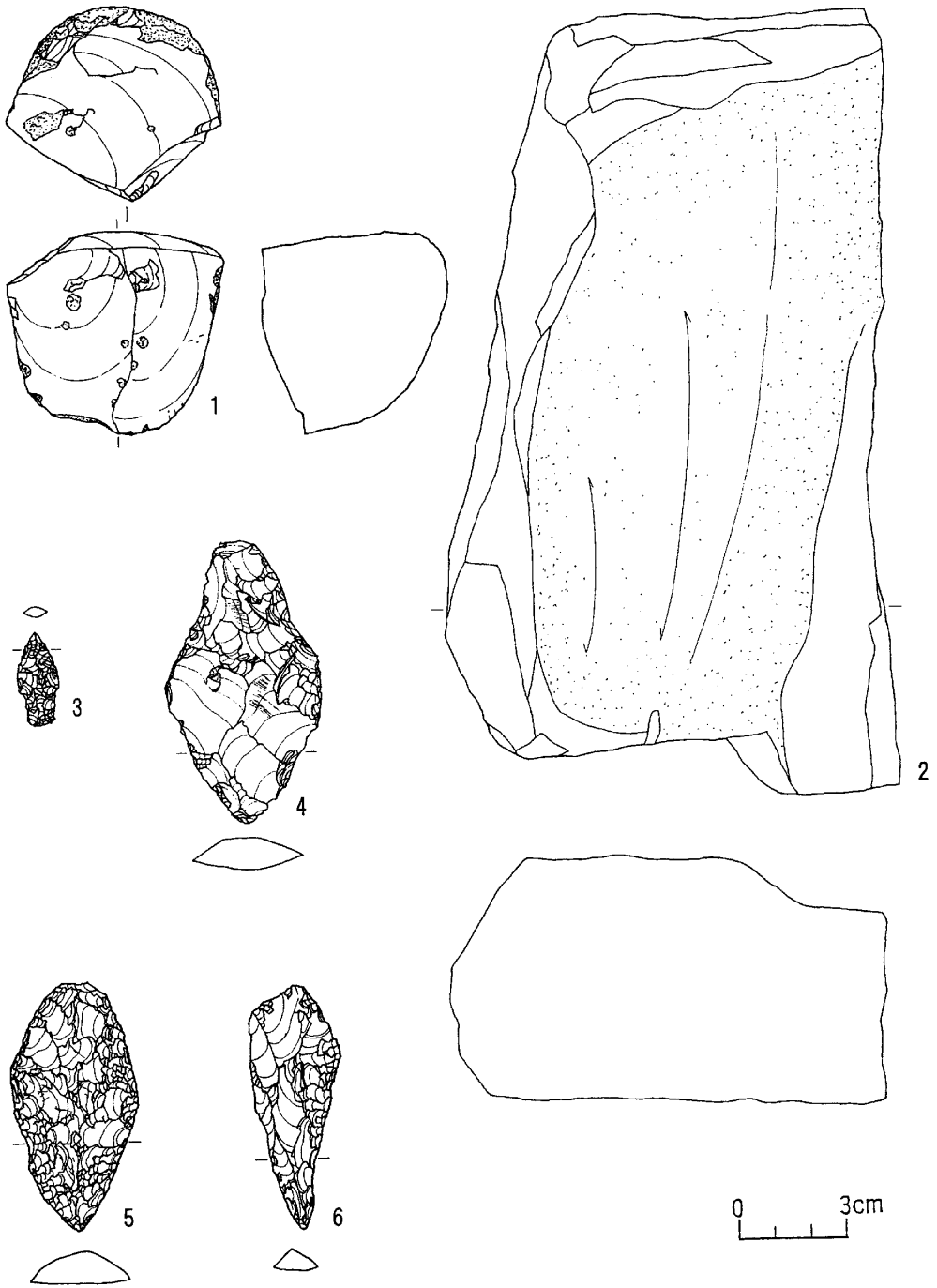
石器は第17図-1・2が床面出土。1は拳大の黒曜石の原石を大きく三面に剥離した残核。実測図下部が原石面となる。2は砥石。3は有茎石鏃。4は表裏面の調整は粗いものの柄部を作出した両面加工ナイフ。5は片面加工ナイフ。6は削器。2は砂岩製であり、他は黒曜石製。

第18図-1～3は削器。4は搔器。5は細長い棒状原石を素材としたもので両側に原石面をもつ。表裏に縦長の剥離面をのこすが、裏面の下端部はさらに剥離を加えて細く仕上げた楔状の石器。6は石鋸。下面部は両側から研磨して刃部を作出している。また左右が折れているものの表裏面とも良く研磨されている。7は刻線石器（口絵2-1）。棒状の細長い泥岩を素材とする。底面は平たく上部はやや丸味をもち、両端部に幅約0.1cmの刻線を施す。刻線は全周する。2は頁岩製、6は砂岩製、7は泥岩製、他は黒曜石製。

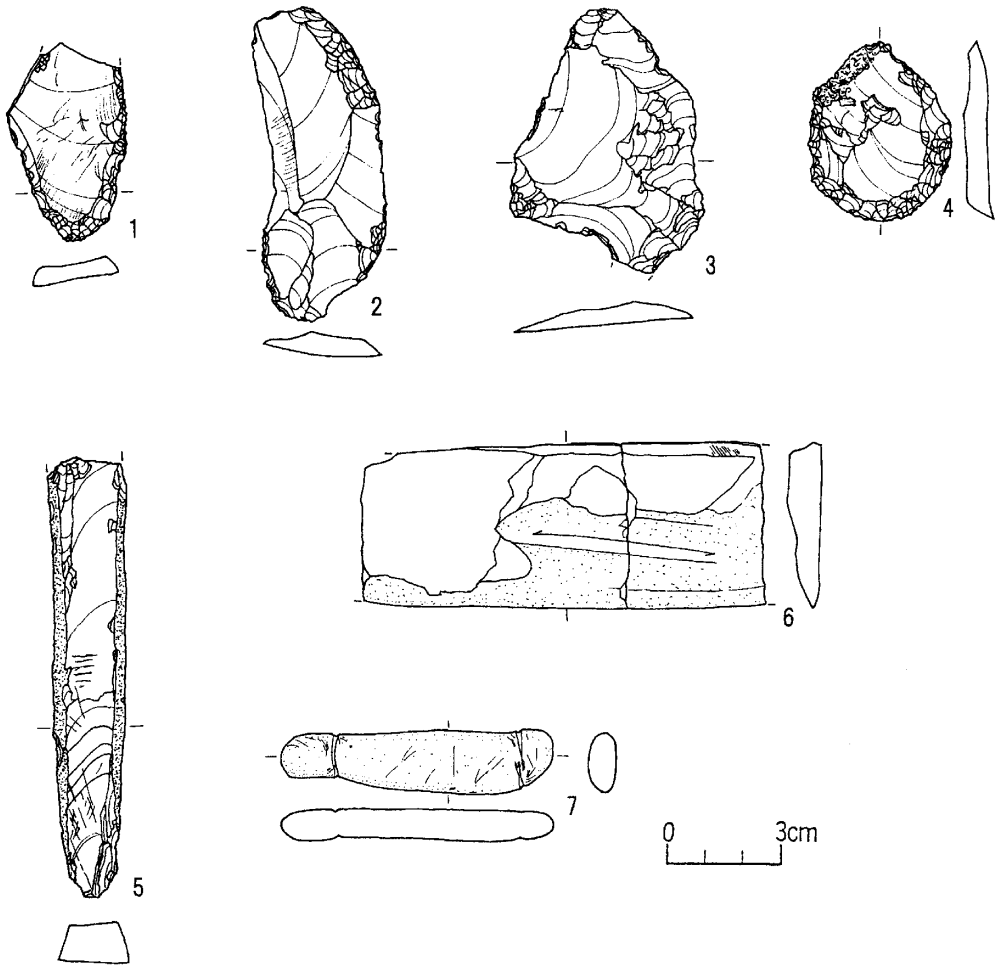
小括

本竪穴の床面から東釧路Ⅲ式土器が1点出土している。1点だけであるが、平面形態が縄文早期東釧路Ⅲ式の4号、5号竪穴に類似することなどからこの竪穴は縄文早期東釧路Ⅲ式の時期の可能性はある。

（武田 修）



第17图 3号竖穴床面(1·2)·埋土(3~6)出土石器



第18图 3号竖穴埋土(1~7)出土石器

4 号 竪 穴

遺 構 (第19図、図版10-1)

本竪穴はH 2～J 2 グリッドにかけて位置する。暗褐色土と暗黄褐色土の落ち込みが確認されたので調査した。規模は東西約6.20mであるが南北は斜面にあたるため不明である。形態は隅丸方形を呈すると思われる。壁は緩く立ち上がり、壁高は確認面から北壁約40cmを測る。西壁と東壁は北壁側からしだいに浅くなり消滅する。焼土は埋土中に2箇所認められ、赤褐色の小礫が多数含まれていた。床面に炉跡は認められなかった。

柱穴は支柱穴が直径約14～20cm、深さ約16～30cmのものが4本、壁柱穴は直径約8～16cm、深さ5～25cmのものが6本確認された。この他に直径約8～20cm、深さ7～26cmの柱穴が17本確認した。

遺 物 (第12図-25～32、第20図、第21図、図版10-2～10、図版11)

第12図-25～29は床面出土。25～27は縄の側面圧痕、28は縄文、29は底部に縄端圧痕文が施された東釧路Ⅲ式。30・31は縄の側面圧痕文が施された東釧路Ⅲ式。32は縄文前期末の櫛目文。

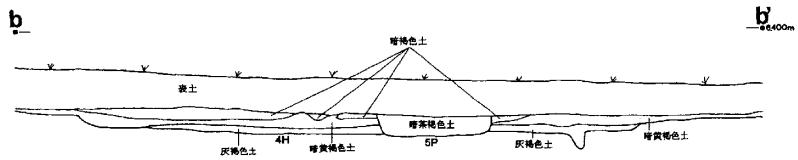
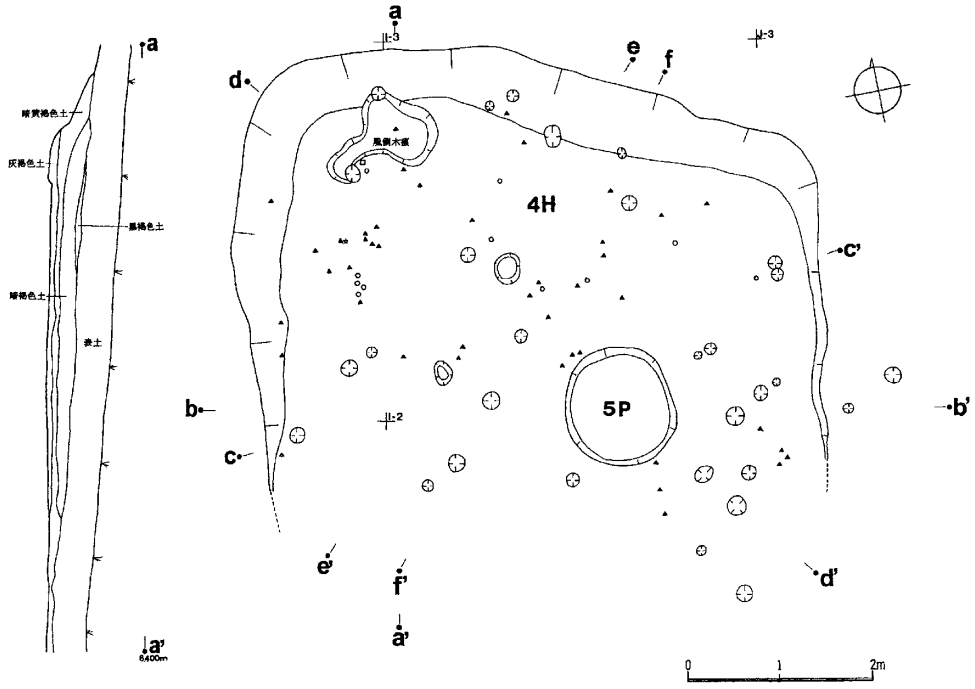
石器は第20図-1～11が床面出土。1は有茎石鏃。2は無茎石鏃。3は石槍の先端部であろう。4・5は石匙。6～8は削器。9は彫器。10は石鋸。上下に研磨された刃部をもつ。11は磨製石斧。埋土からは12の石匙、13～15の搔器がある。10は砂岩製、11が泥岩製の他は黒曜石製。

第21図-1～4は床面出土。1～3は石皿。1・2は両面とも研磨され、2の裏面には2条の細い溝が遺される。3の表面には敲打痕がある。3点は砂岩製。4は擦石。表面のみ研磨されている。泥岩製。

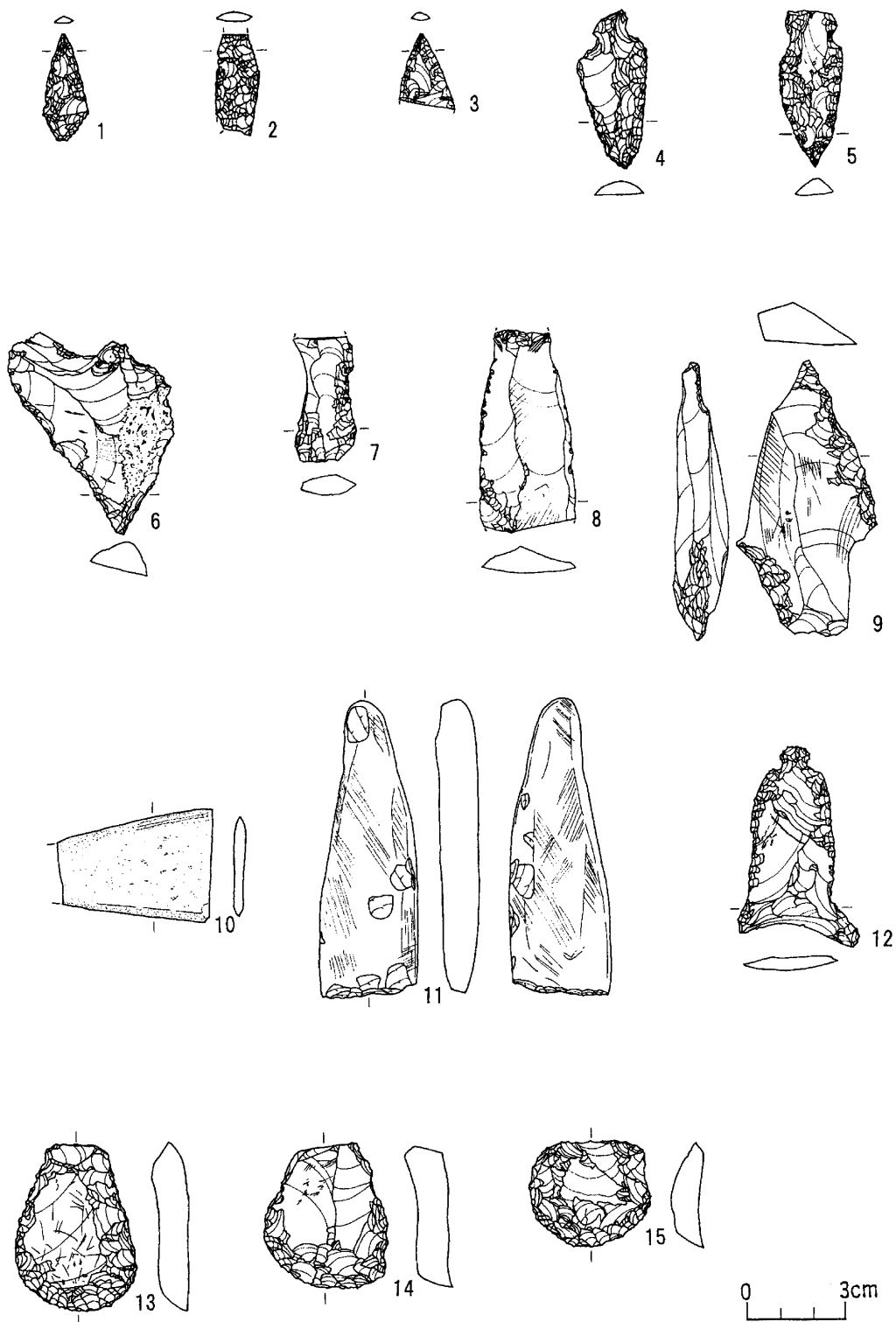
小 括

本竪穴は隅丸方形であり床面出土土器から縄文早期東釧路Ⅲ式のものと考えられる。

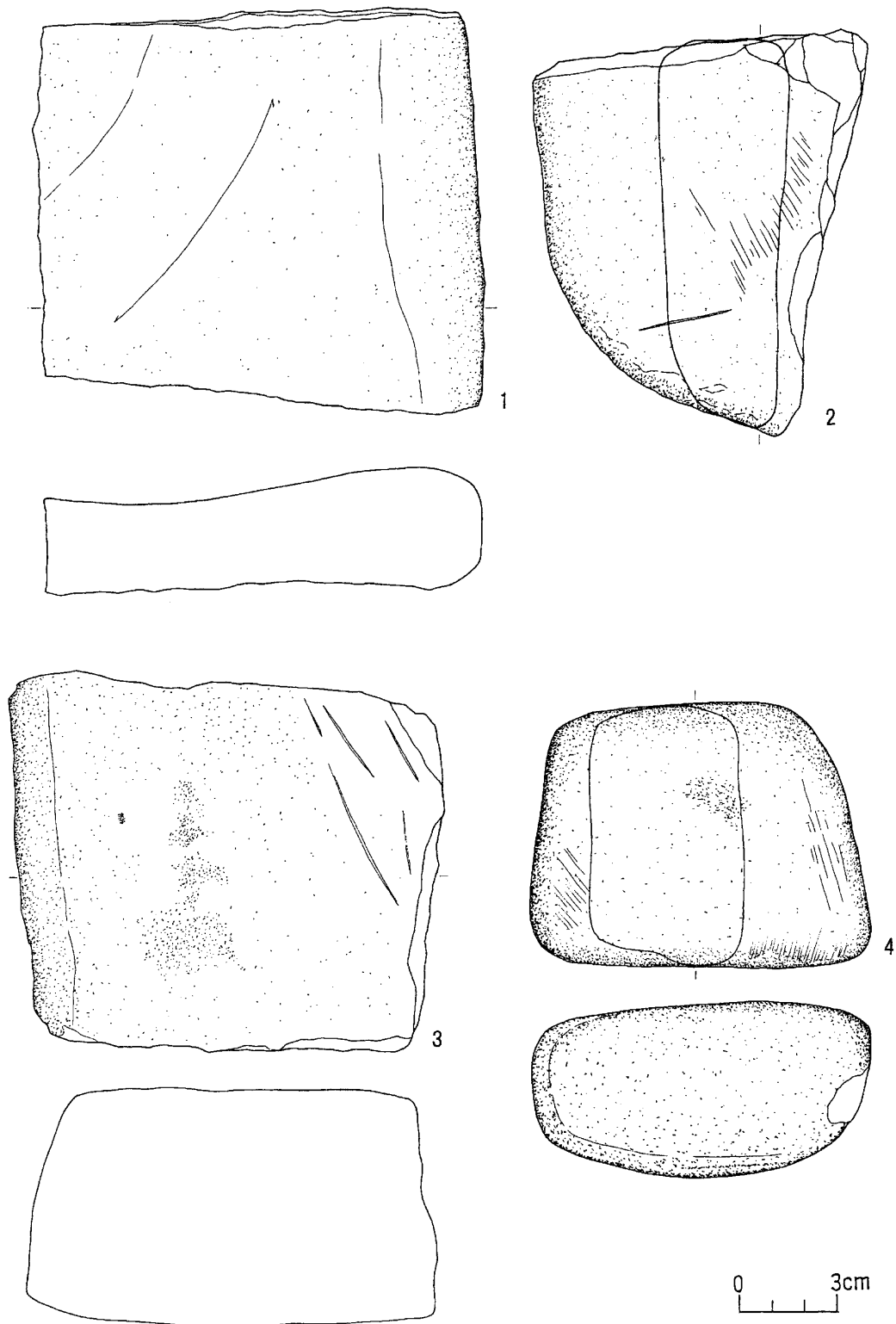
(佐々木 覚)



第19図 4号竖穴、ピット5平面図



第20图 4号竖穴床面(1~11)·埋土(12~15)出土石器



第21图 4号竖穴床面(1~4)出土石器

ピ ッ ト 5

遺 構 (第19図)

本ピットは4号竪穴の埋土中に発見した。規模は長軸約1.30m、短軸約1.18mの円形を呈し、壁高は確認面から約20cmを測る。部分的であるが4号竪穴の床面を僅かに切り込んでいる。埋土は暗茶褐色土が堆積しており、床面から2点の石器が出土する。

遺 物 (第31図-9・10)

第31図-9は削器を斜めに切断して彫器としたものである。黒曜石製。10は刃こぼれ状の使用痕がある剥片。黒曜石製。

小 括

4号竪穴との切り合い関係から縄文早期東釧路Ⅲ式より新しいと思われるが、詳細は不明である。

(佐々木 覚)

ピ ッ ト 6

遺 構 (第16図)

本ピットは3号竪穴埋土の茶褐色土と南側床面を切って構築されている。規模は長軸1.60m、短軸1.25mの楕円形を呈する。壁高は浅く、各壁とも3号竪穴の床面から約5cmを測る。床面では火熱を受けたためと思われる淡い赤色化の部分も確認された。

遺物は出土していないため時期は不明である。

(武田 修)

5 号 竪 穴

遺 構 (第22図、図版12-2)

本竪穴はM4グリッドに位置する。表土を剥土した段階で暗褐色土の落ち込みを確認したため、直行する様に土層ベルトを設定し調査を行った。部分的に耕作溝が東西に走るため、壁の上部は一部で破壊を受けるものの遺存は良い。第22図に示すとおり埋土上部から縄文早期東釧路Ⅲ式の土器、石器などが多量に出土した。遺物は竪穴の南西側から多く出土する傾向がある。

特に床面に近い遺物は硬質化した茶褐色土中に含まれているため検出しづらかった。竪穴の規模は東西約3.25m、南北約3.10mの隅丸不整形を呈する。竪穴の構築地が周辺でもやや平坦面に近いことや、掘り込みが深いこともあって南壁も検出することができた。壁際には3号竪穴同様の硬質化した明褐色土が堆積しておりこれを除去すると第23図-12に示す土器が出土し、基盤層である黄褐色土が現れた。壁は北壁側が斜めに立ち上がるものの他の壁は緩い皿状となる。壁高は北壁が40cm、南壁が10cmを測る。掘り下げる段階で竪穴の中央部にピット8を検出した。

主柱穴と思われるものは南西壁隅に1本ある。直径約18cm、深さ22cmであり、竪穴中央部に向かって傾斜する様に掘られている。直径約8～15cm、深さ約6～11cmの小柱穴は各壁の上部近くにあるものと床面近くにあるものに分けられるが、それぞれの配置に規則性はない。床面は若干ではあるが部分的に起伏をもつ。

炉跡は検出できなかった。

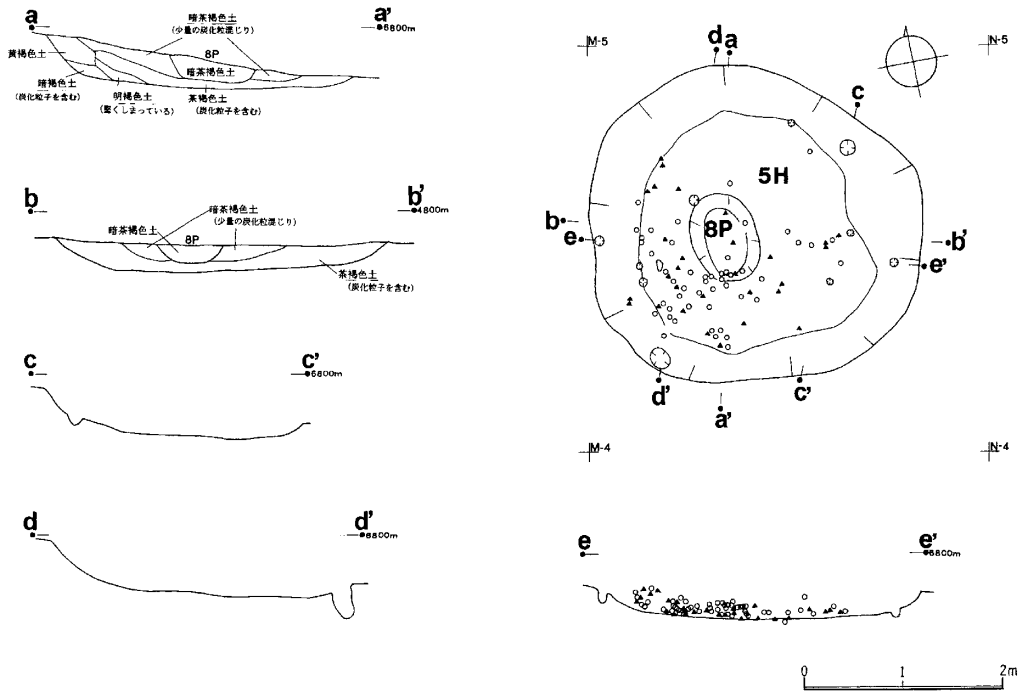
遺物（第23図、第24図、第25図、第26図、図版13）

本竪穴からは土器331点、石器431点が出土。復元できる土器は無いものの同時期の他の竪穴の中で最も多く遺物が出土した。

第23図-1～4は床面出土。1は撚紐の側面圧痕文を斜位に施す。2～6、9・10は斜位の縄文を施したもので、5は撚紐の側面圧痕文の上に重ねている。8は羽状縄文となる。9・10は比較的太い原体を用いている。11は口径推定23cm、器高推定24cmの深鉢である。口縁下部には貫通した円形文がほぼ等間隔に配置され、縄文は交互に方向を変えて施される。底部は張り出す。12は撚りの細い縄文を方向を変えて施すが、重複するほどかなり密に施文する。13～19は撚紐の側面圧痕である。13・14は同一個体であろう。18は向きを変え、下部に短縄文が施される。20～23は組紐圧痕文。24は短縄文と組紐圧痕文。25は縄端圧痕文が施される。

第24図-1～15は埋土出土。1～3は器面に組紐圧痕文と短圧痕文を交互に施すもので1の口縁部はわずかに肥厚した平縁。4は羽状縄文が施される。5の底部は指頭を押しつけた様な痕跡がある。6は縄端圧痕文。7は短圧痕文。8・9は縄文が施される。5・6・8・9の底部は楕円形を呈し、特に5・6・8は「く」字状に強く張り出す。7・10の底部も楕円形を呈するのであろう。12は撚糸文が施される。1～12は東釧路Ⅲ式。13・14は表裏面に貝殻条痕文が施される。沼尻式。15は器面が風化しているため文様を確認することはできないが、口縁部が内屈し、胎土に繊維を多量に含む厚手の土器で縄文前期繊維尖底土器と思われる。

石器は第25図-1～4が床面出土。1～3は折損するものの削器である。4は縦長の剥片。5は有莖石鏃。6は先端部が丸みをもち基部がすぼまる縄文早期特有の石鏃である。7は比較的肉厚で両側縁部が急斜な刃部をもつ削器。8は棒状を呈した小型の両面加工ナイフ。9～12・15は削器。13・14は刃こぼれ状の使用痕があるフレーク。16は刃部が欠失するものの、表裏



第22図 5号竖穴、ピット8平面図

面とも強く研磨された磨製石斧。泥岩製。17は刃部が欠失する。泥岩製の打製石斧。18は砂岩製の凹石。表面は部分的に研磨されており、石皿の転用と考えられる。16~18の他は黒曜石製。

第26図-1は断面が台形状の礫の角頂部をそれぞれ3箇所打ち欠いて石錘としたものである。

砂岩製。重量545g。2は2箇所打ち欠きの石錘。打ち欠きの表面は摩耗している。砂岩製。重量720g。

小 括

本竖穴は形態と床面出土土器から縄文早期東釧路Ⅲ式の時期と判断できる。

(武田 修)

ピ ッ ト 7

遺 構 (第8図、図版17-2)

本ピットはL2グリッドに位置する。表土下に堆積する層厚約4~5cm程の茶褐色土を掘り

込んで構築されている。埋土は黒色土が堆積する。規模は直径約0.80mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第30図-12・13)

2点とも埋土出土。焼成の良い土器であり、12は無文、13は縄文が施される。いずれも縄文晩期と思われる。

(武田 修)

ピ ッ ト 8

遺 構 (第22図)

本ピットは5号堅穴の中央部に位置する。5号堅穴の埋土である暗茶褐色土層中に構築されている。規模は長軸約0.90m、短軸約0.65mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約10~20cmである。

遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、縄文早期に位置づけられる5号堅穴より新しい時期であることは確実である。

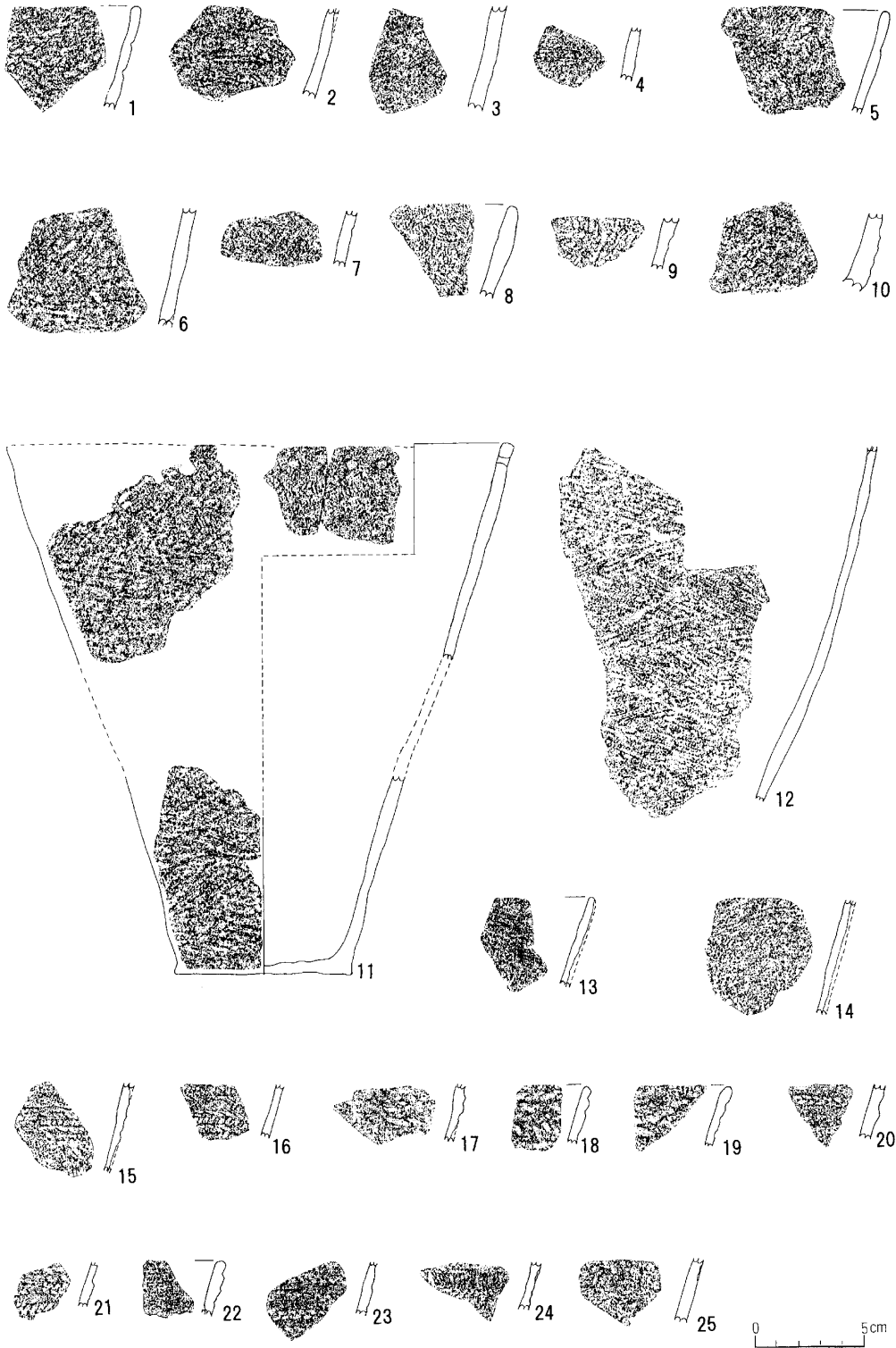
(武田 修)

ピ ッ ト 9

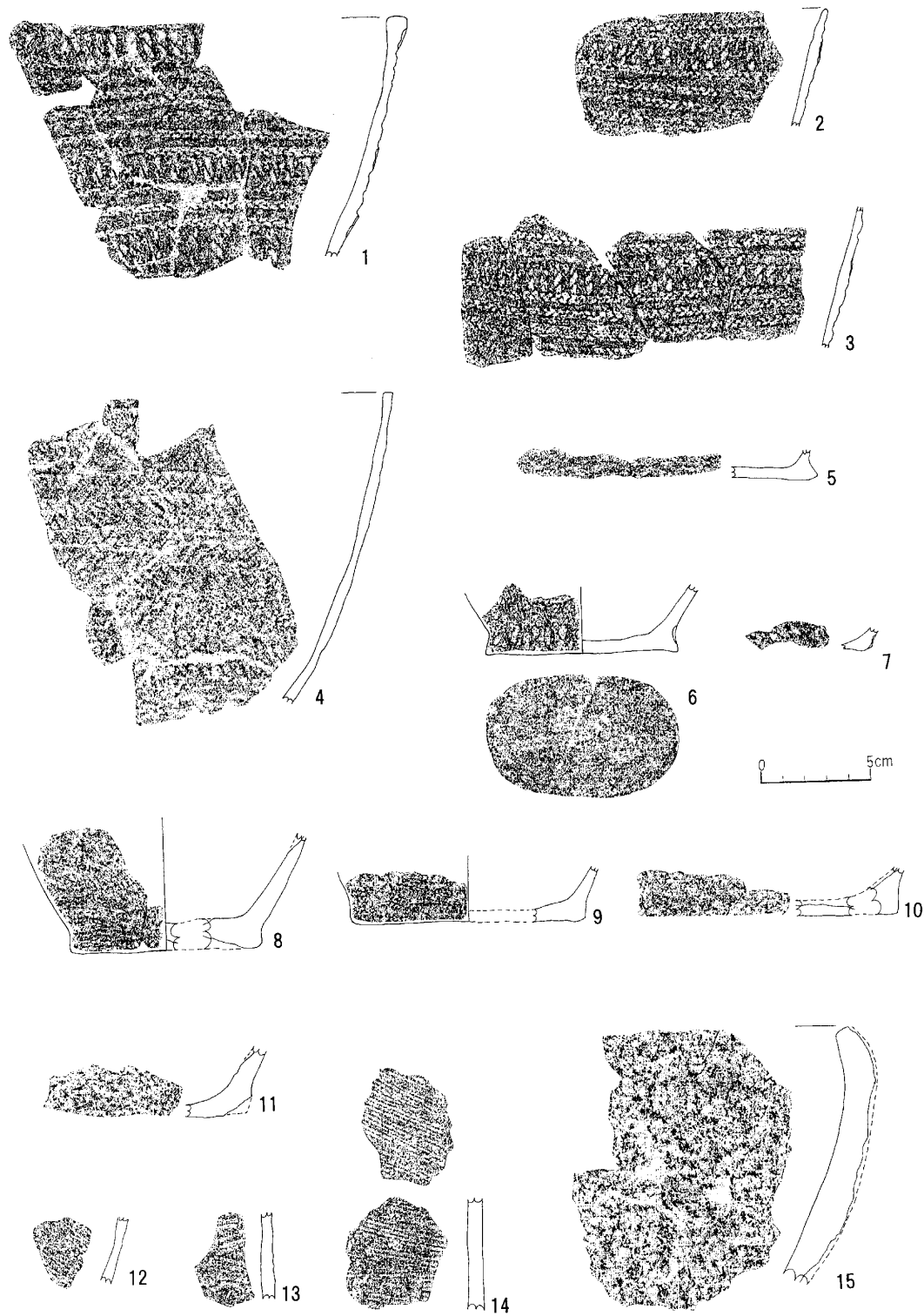
遺 構 (第11図)

本ピットは2 b号堅穴の床面精査中に発見した。南側半分は斜面により検出できなかったが直径約1.18mの円形を呈すると思われる。壁高は2 b号堅穴床面から約10cmを測る。埋土は暗黄褐色土が堆積するが、時期は不明である。

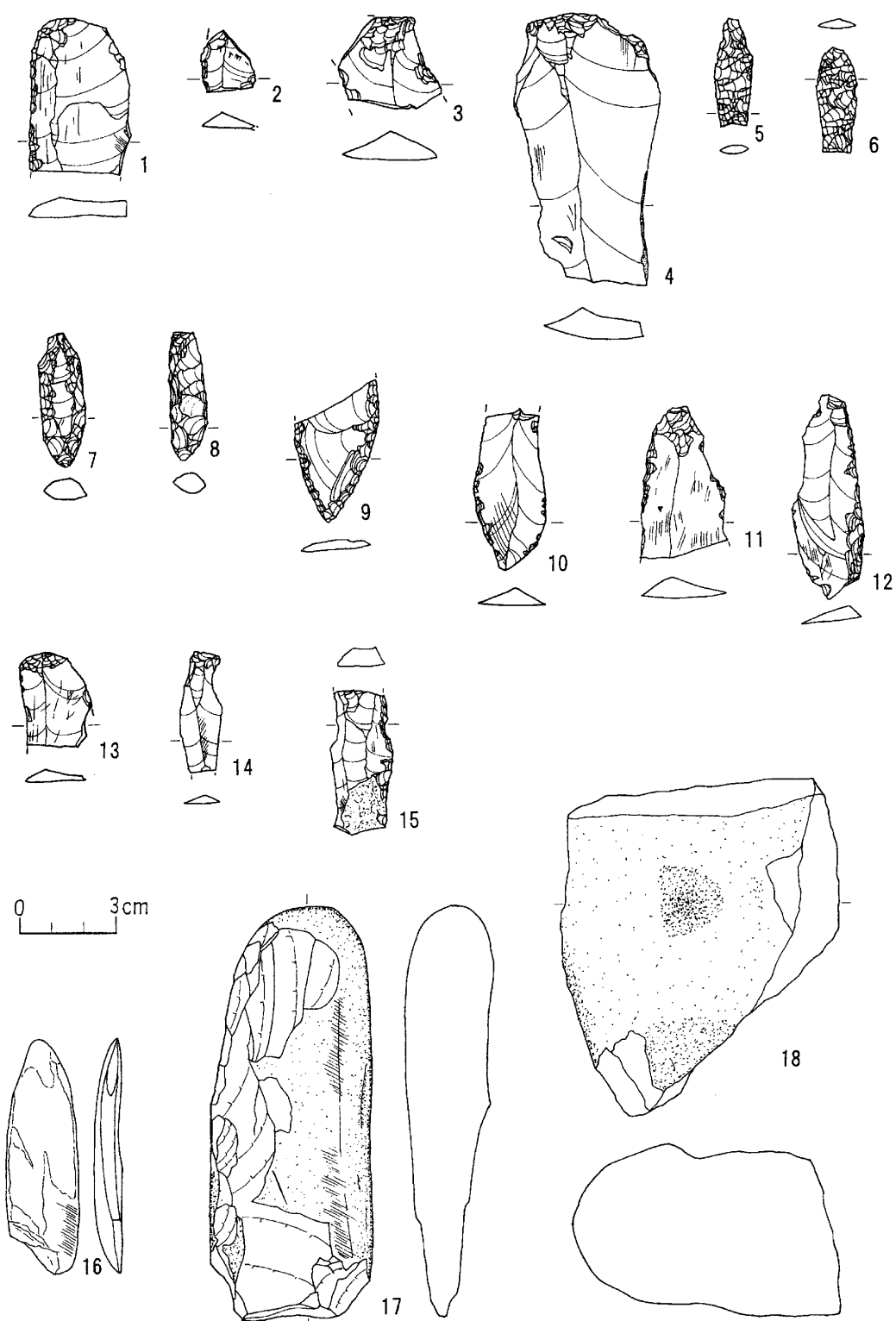
(佐々木 寛)



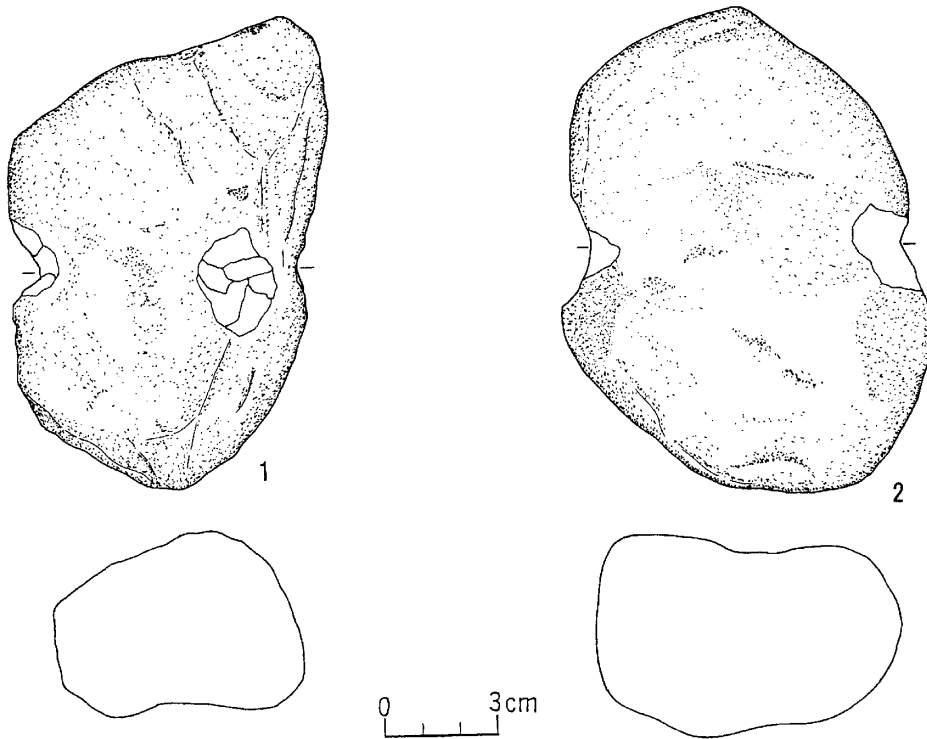
第23图 5号竖穴床面(1~4)·埋土(5~25)出土土器



第24图 5号竖穴埋土(1~15)出土土器



第25图 5号竖穴床面(1~4)·埋土(5~18)出土石器



第26図 5号竪穴埋土（1・2）出土石器

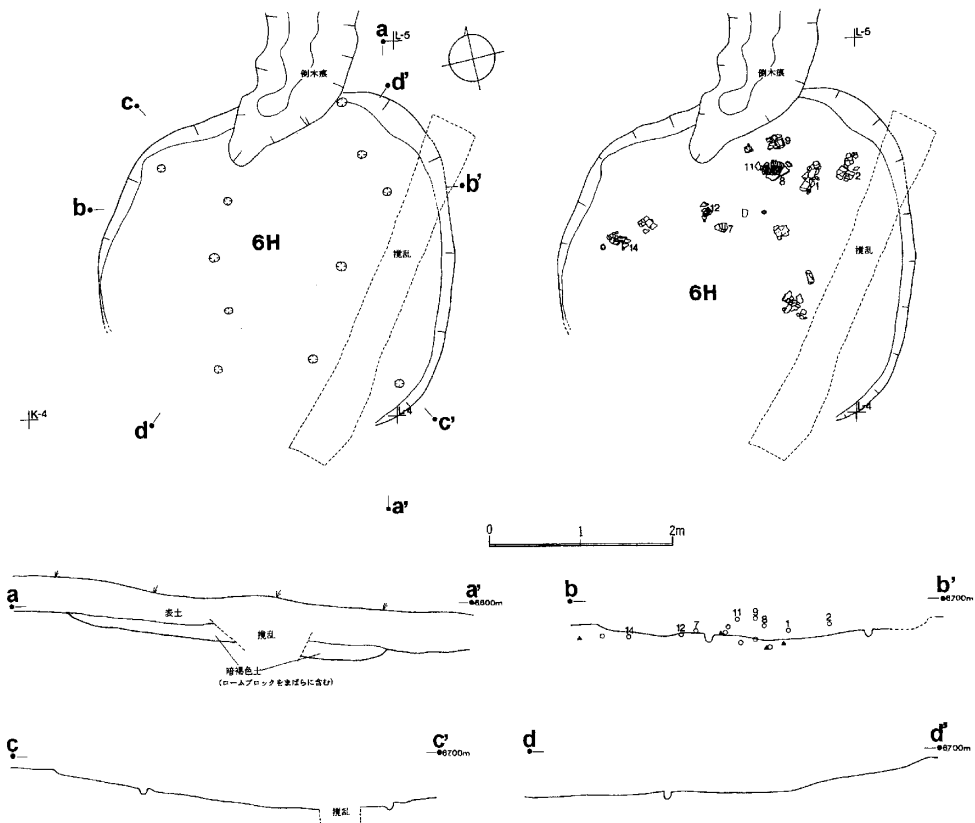
6 号 竪 穴

遺 構（第27図、図版14-1）

本竪穴はK 4・L 4グリッドにまたがって位置する。表土下の暗褐色土を掘り下げる段階で第27図に示す縄文早期東釧路Ⅲ式が広範囲にわたって出土した。このためL 5からL 3グリッドに沿って土層を観察したところ基盤層である黄褐色土の浅い掘り込みが確認でき、竪穴であることが明らかになった。壁を検出できたのは北壁と東壁及び西壁の一部である。北壁中央部は風倒木、東壁側は暗渠排水管の埋設による攪乱を受けるものの、規模は東西3.70m、南北3.20m程の隅丸方形を呈する。北壁は皿状の浅い立ち上がりをもち、壁高は確認面から約18cmである。

土器の大部分は竪穴上部に集中する傾向をもち、床面からも2点出土した。主柱穴は認められず、直径約10～12cm、深さ約6～12cmの小柱穴が竪穴の壁近くと中央部にある。特に中央部のものは3～4本で構成された南北に縦列する2列の小柱穴が規則的である。

床面は北側から南側に向かって著しく傾斜し、起伏がみられる。特に中央部では浅い掘り込みと思われるほど窪んでいる。炉跡は検出できなかった。



第27図 6号竖穴平面図・遺物出土分布図

遺物 (第28図、第29図、第30図-1~9、第31図-1~8、図版15)

第28図-1は床面出土。口径17cm、器高19.5cmの中型深鉢土器。口縁部から胴中部にかけて撚りの細い縄文を交互に向きを変えて羽状に施し、底部は横位に施す。底部は張り出す。内外面とも煤が付着する。2は口径24cm、器高29cmの大型深鉢土器。口縁部は波状を呈する。1と同様の施文方法であり、やや太めの縄文を口縁部から胴中部まで交互に向きを変えて施す。胴下部から底部までは細い縄文を横位に施している。この箇所赤化が著しい。底部は張り出す。補修口をもつ。3は口径23.5cmを測る。口唇部に縄文が施される。胴中部と底部は接合できなかったが器高は推定27cm程の大型深鉢であり、口縁直下に2条の撚紐が押捺されている。器面には撚りの異なる縄文が斜位に交互に施され、附加状縄文がみられる。胴下部から底部にかけて赤化する。

第29図-1は口径25cmを測る。底部と接合できないため正確ではないが、推測28cmの器高である。実測図に示すとおり無文部に撚紐4条を斜位に押捺する。胴上部の施文は同一の縄文を向きを変えて施すものの胴下部は異なる原体を用いて羽状に施す。胴下部の赤化が著しい。2の上面観は口径長軸27cm、短軸23cmの楕円形である。口唇部は平縁となる。器高は不明である

が大型深鉢である。

口縁部直下に撚紐を斜位に押捺し、胴部から底部にかけて縄文を向きを変えて羽状に施す。底部は無文となるようである。

第30図－1は床面出土。台付き土器の底部。2は縄文を向きを変えて交互に施す。4・5は撚りの異なる縄を横位・斜位に施すもので2点は同一個体と思われる。山形小突起をもち口唇部に右上方から突き刺す様な刺突文が施される。3・6・7は撚紐が押捺され、3の口唇部にはベンガラが付着する。8・9は無文、同一個体と思われる。

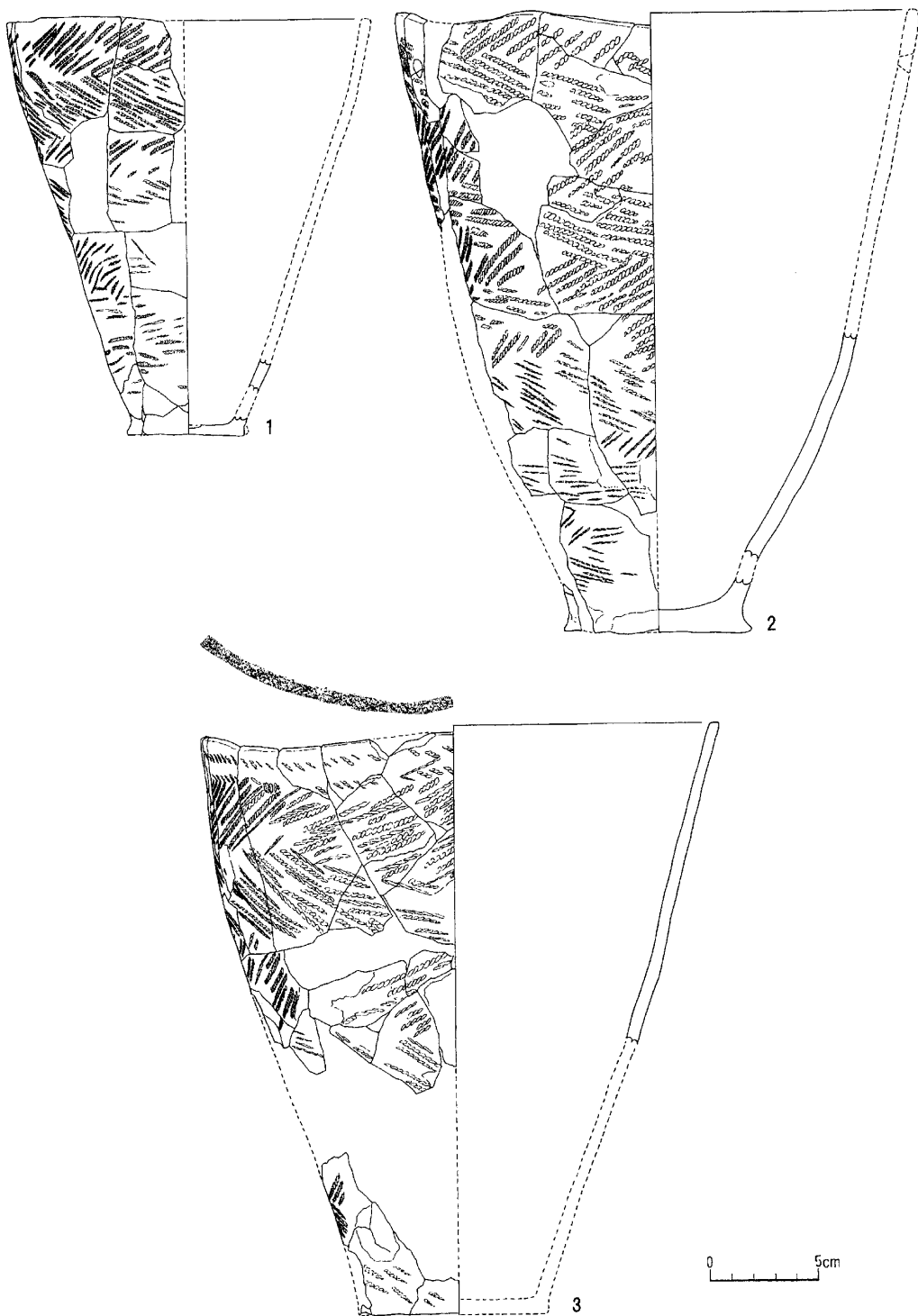
石器は第31図－1～6が床面出土。1・2は削器。3・4は微細な刃こぼれ状の使用痕のある剥片。5は表裏面から粗く打割して刃部を作出した打製石斧。表裏面には叩き痕と縦横方向の擦痕が観察される。6は方形の礫を素材とした石錘。120g。

埋土からは7・8の削器が出土。7は縦長剥片の右側縁部を入念に加工した刃部となる。8は分厚い剥片の両側を刃部とする。1～4、7・8は黒曜石製であり、他は泥岩製。

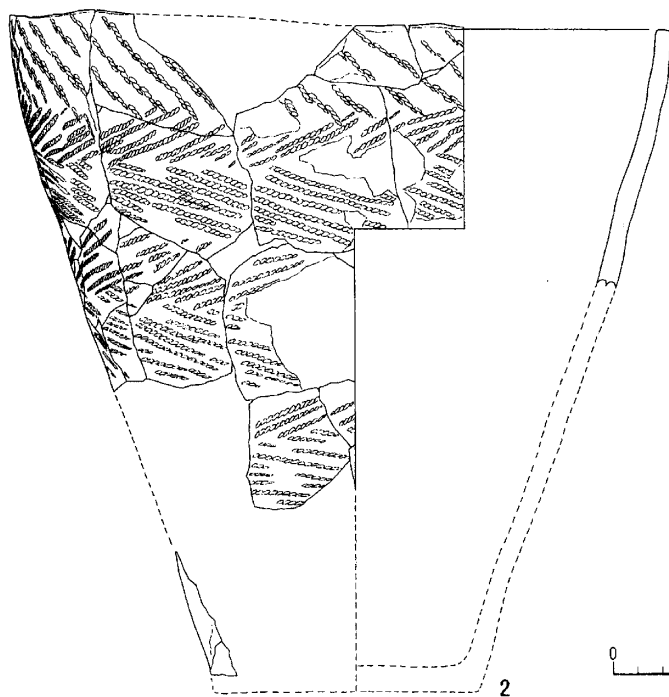
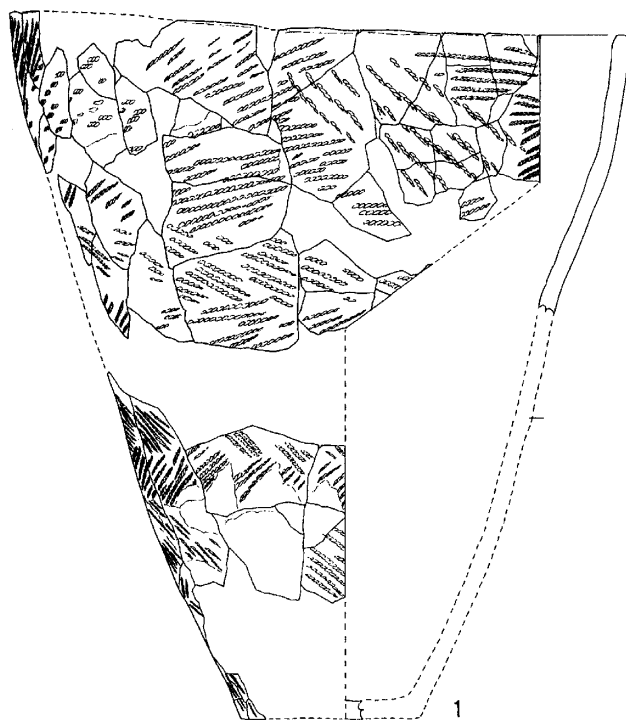
小 括

本竪穴は竪穴の形態と床面出土土器から縄文早期東鉏路Ⅲ式の時期と判断できる。

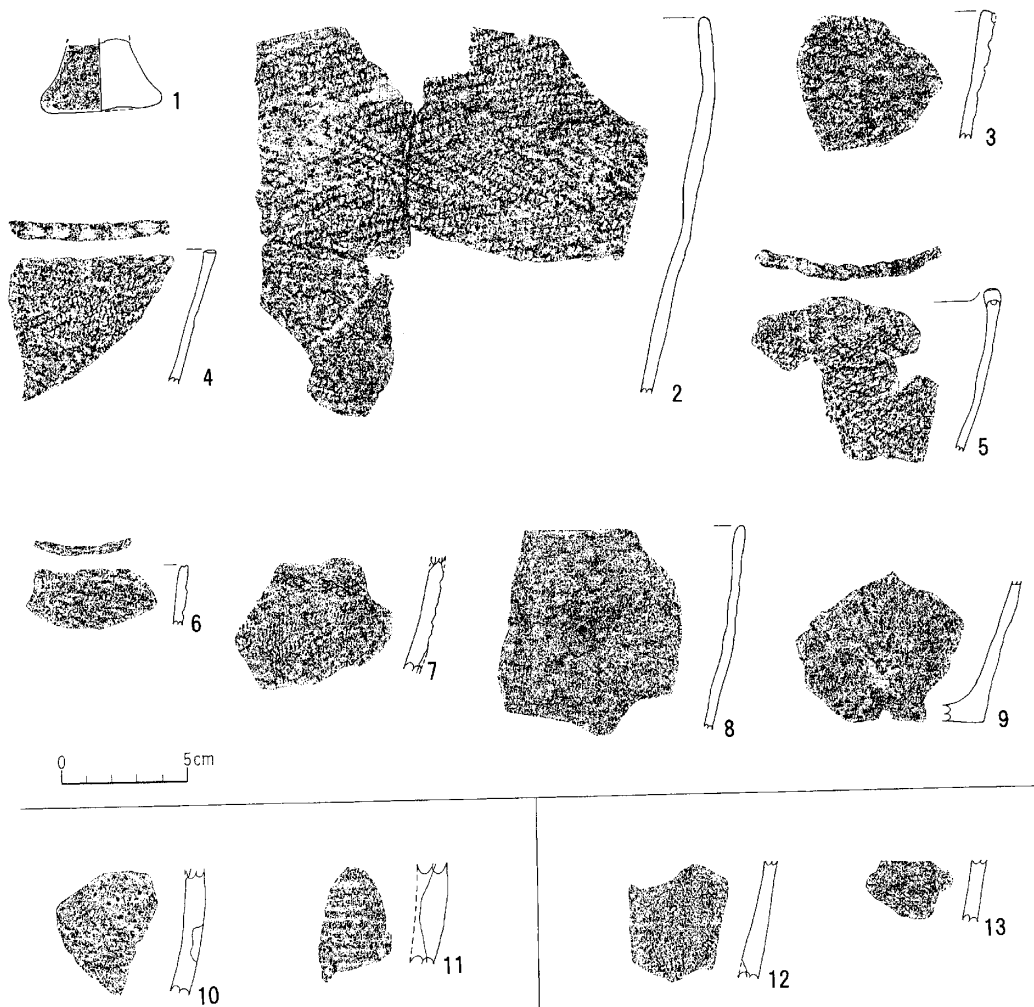
(武田 修)



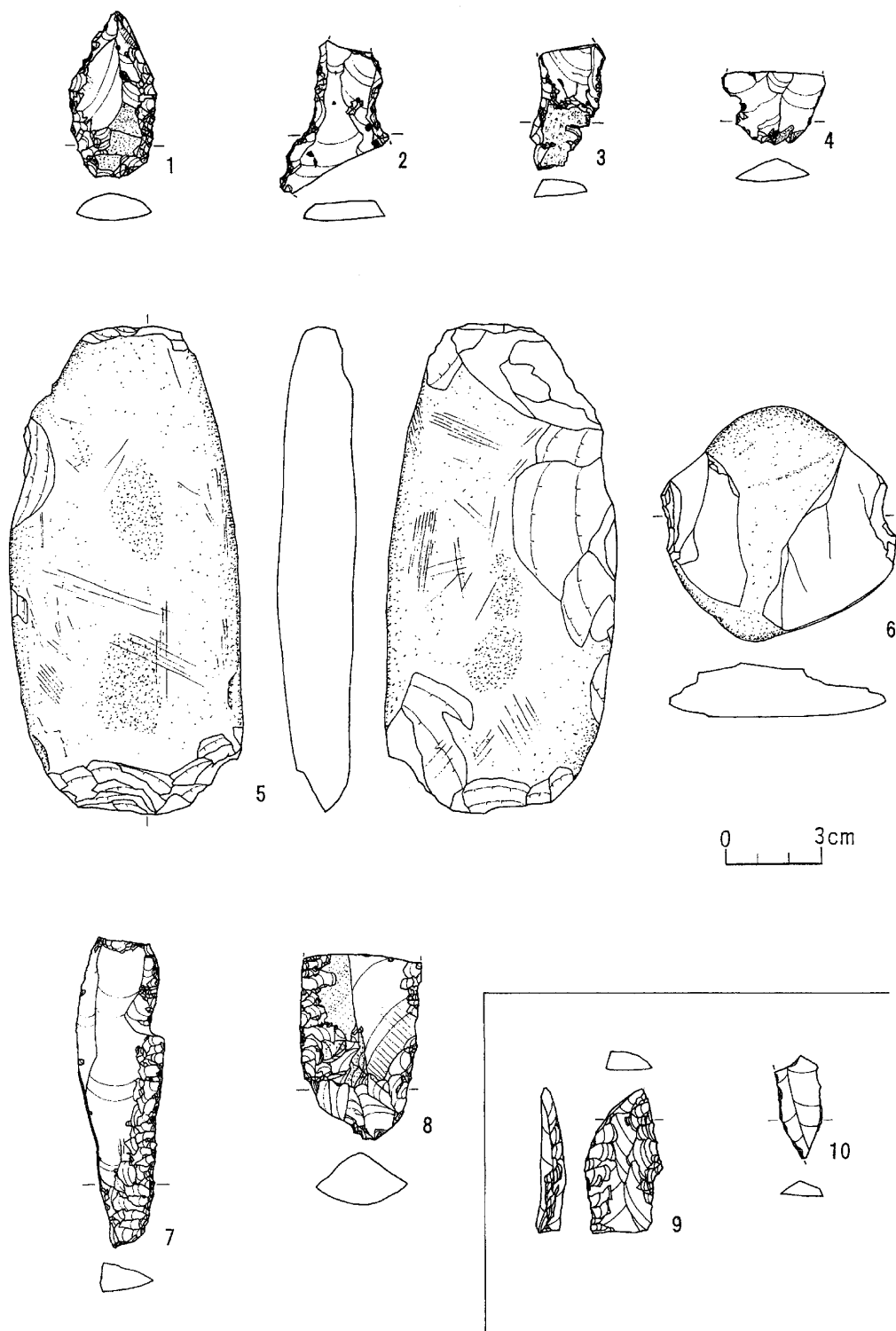
第28图 6号竖穴床面(1)取上げ番号(7·12)、埋土(2)取上げ番号(1·2)、埋土(3)·取上げ番号(11)出土土器



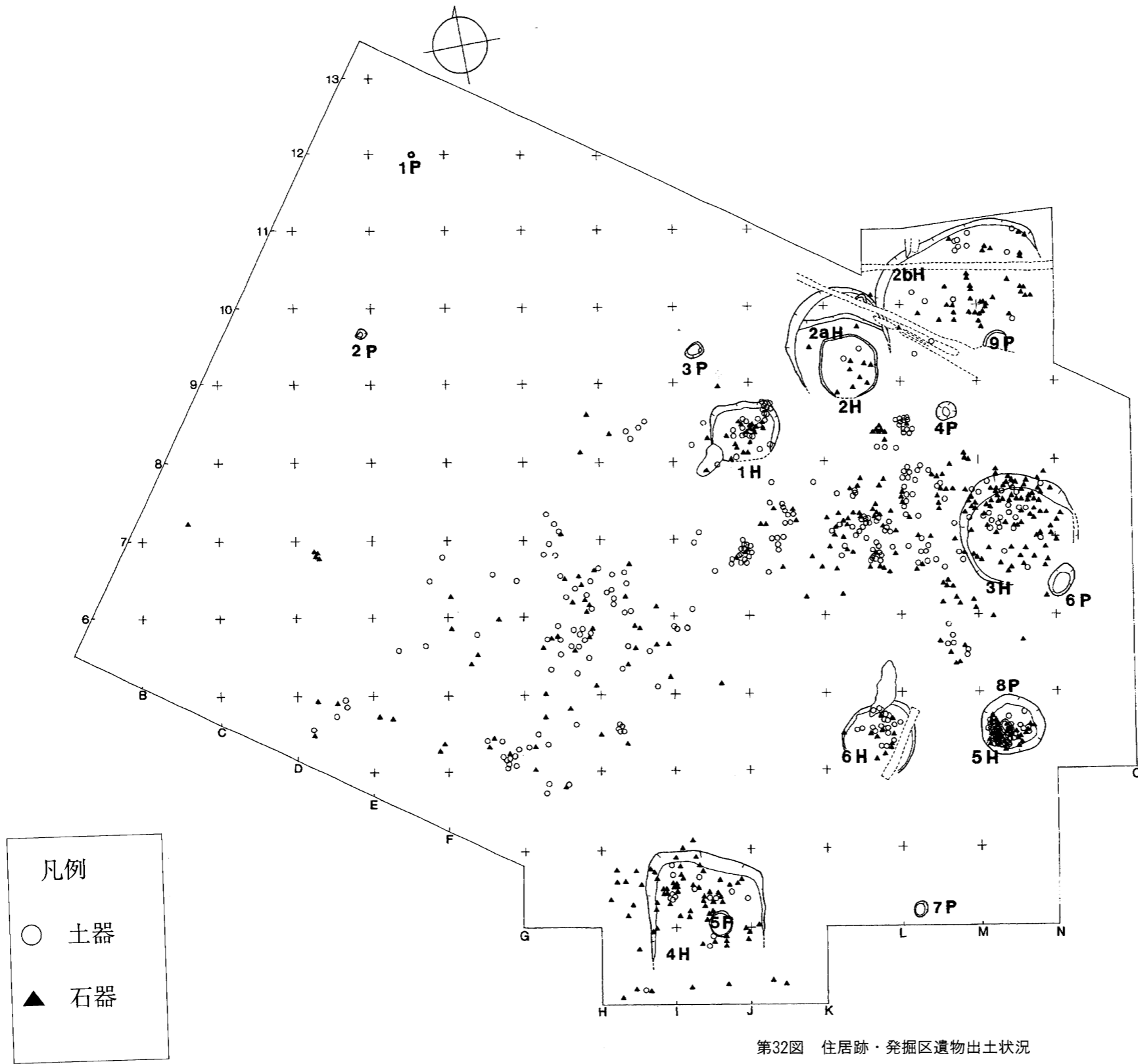
第29図 6号竪穴埋土(1)・取上げ番号(13・14)、埋土(2)・取上げ番号(8・9)出土土器



第30図 6号竪穴床面(1)・埋土(2~9)、ピット4埋土(10・11)、ピット7埋土(12・13)出土土器



第31図 6号竖穴床面(1~6)・埋土(7・8)、ピット5床面(9・10)出土石器



第三章 発掘区の遺物

発掘区の遺物分布は大まかに発掘区の中央部からやや西側に寄った標高6～7mのグループと3号竪穴の周辺である標高7～8mのグループに別れる(第32図)。竪穴床面や埋土からの遺物出土は多いものの周辺は以外に少なく2号、2a号、2b号、5号、6号竪穴周辺では全く認められない。また、標高10m以上の高い区域からも遺物は出土しておらず本遺跡の特徴を現している。

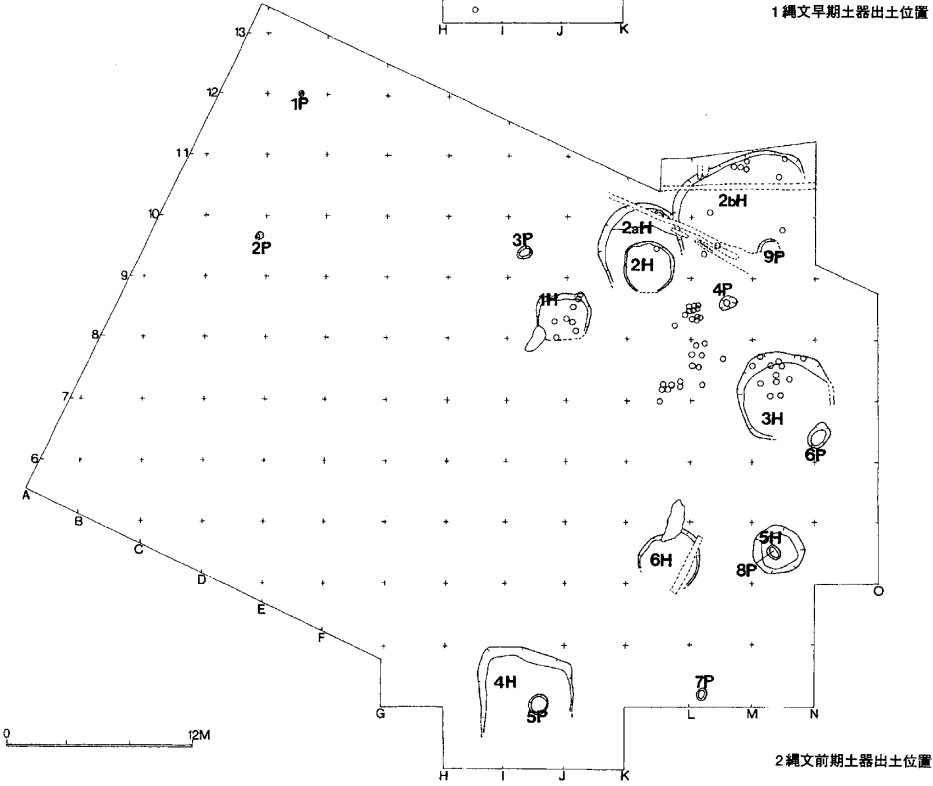
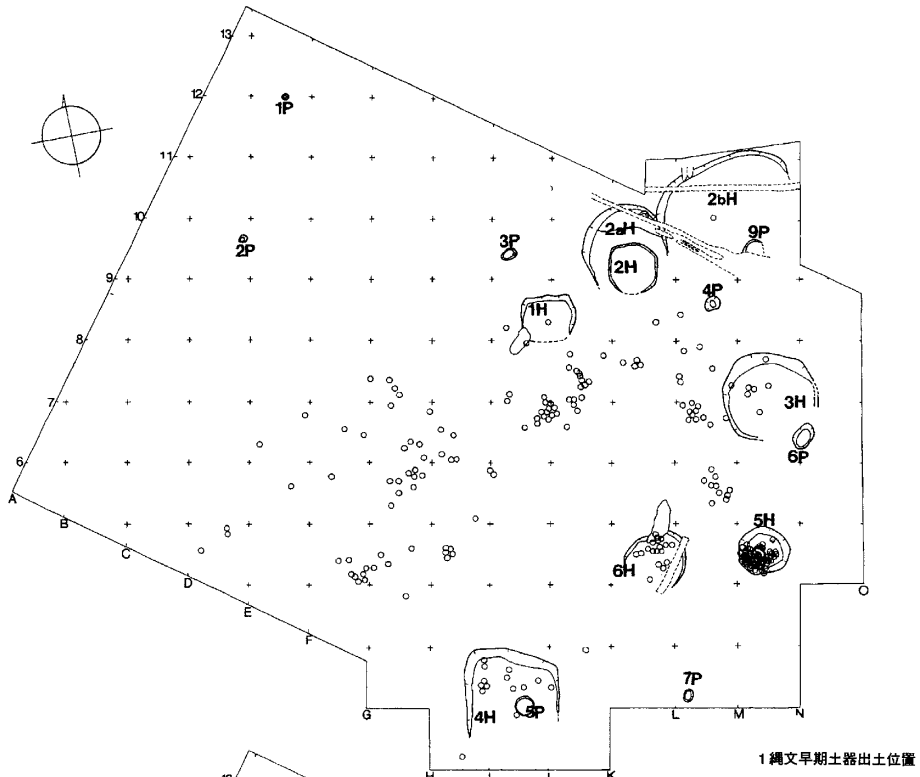
表土を含む発掘区出土の遺物の中で時期が明確になった土器は縄文早期999点、前期175点、中期43点、晩期41点、続縄文3点、擦文1点、不明49点の総計1,311点である。包含層から出土した主な遺物の分布を第33図と第34図に示した。各時期毎の出土分布状況は縄文早期が発掘区の中央部において南北方向に広がって出土する傾向があり(第33図-1)、縄文早期東釧路Ⅲ式が最も多く出土している。前期(第33図-2)・中期(第34図-1)では1号竪穴と2号竪穴の中間地点に分布し、縄文晩期は発掘区の中央部と3号竪穴周辺でややまとまって出土している(第34図-2)。

石器は土器のグループと重なる様に包含層から501点出土している。竪穴の出土傾向も同様であるが、4号竪穴ではその周辺も含め石器の出土が目立っている。石器は表土出土を含めると21,073点に及ぶ。最も多い器種は削器1,038点、ナイフ399点、石鏃319点の解体・狩猟具が多く生活具である石皿10点、砥石5点、すり石1点、くぼみ石1点と少なく本遺跡の性格をあらわしている。

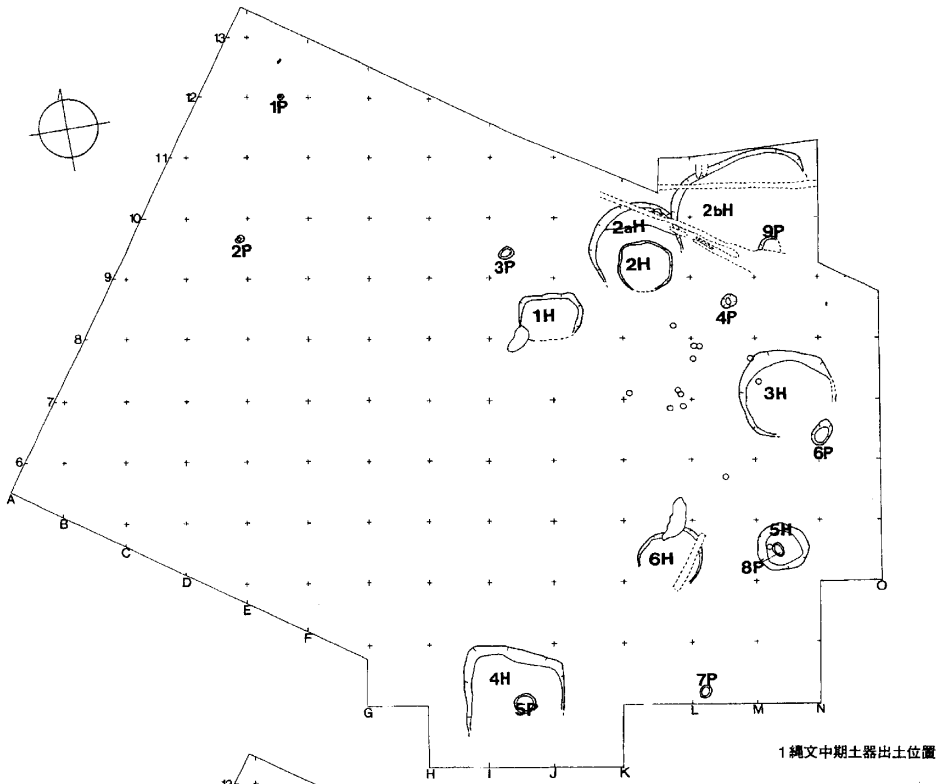
土 器 (第35図、第36図、第37図、第38図)

第35図-1は擦文土器の底部。本遺跡から唯一出土したものである。2～28は縄文晩期中葉のものである。2は撚糸文を地文として、切り出し状の口縁直下に円形刺突文が施されたもので続縄文初頭の可能性もある。2～5は中空の施文具によるもので3は楕円形、4～6は円形刺突文である。4は下方からの刺突であり、他は器壁に対してほぼ垂直に刺突されている。7～9は半截状、10は三角形の施文具により下方から刺突される。11の器面は風化するものの列点文が曲線状に施される。12は左方向から鋭く刺突されている。13～15は沈線文が施される。16～18は口唇部に刻みのあるもので16・18・20・21は無文。18の口縁直下は横撫で調整されている。19・22～24・27・28は縄文。25は横位の縄文を地文に曲線的な太い隆帯が張り出している。かなり大型な深鉢と思われる。26は縄文が施された浅鉢。29は盛り上がりある爪形文が施される。縄文晩期前葉であろう。

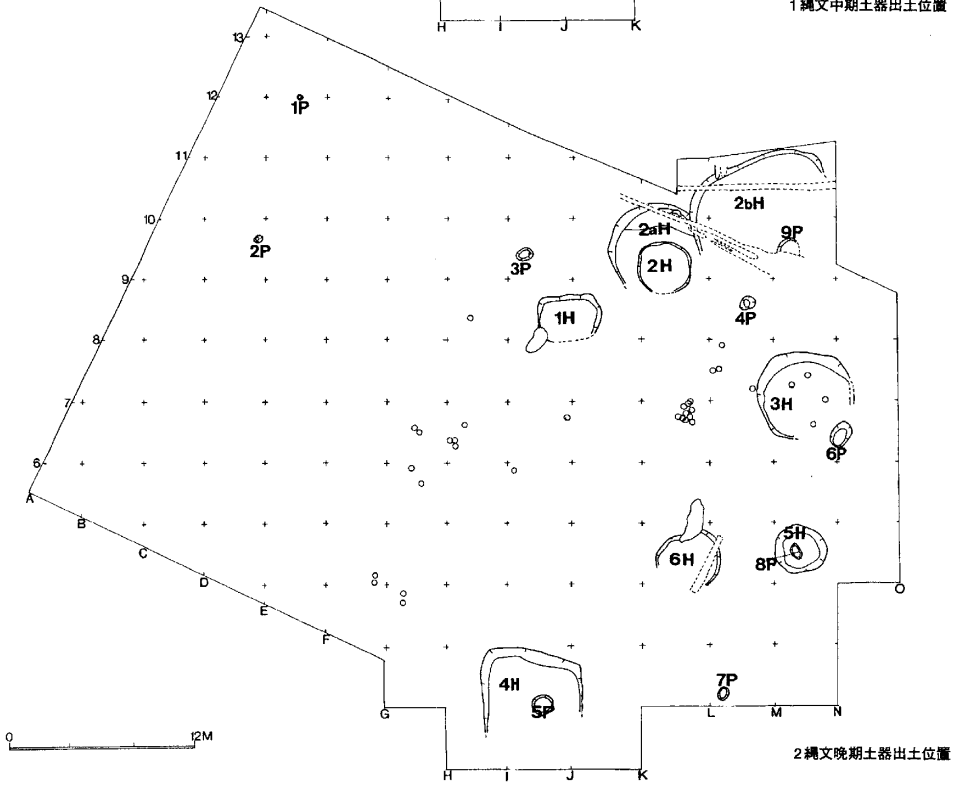
第36図-1～4は縄文中期トコロ六類。1は口唇部に小突起をもち、胎土に繊維を含む。2のみ繊維を混入しない。3は直径約5～6mm程の円形文が施される。4は器面が火熱を受け縄



第33図 早期土器・前期土器出土位置

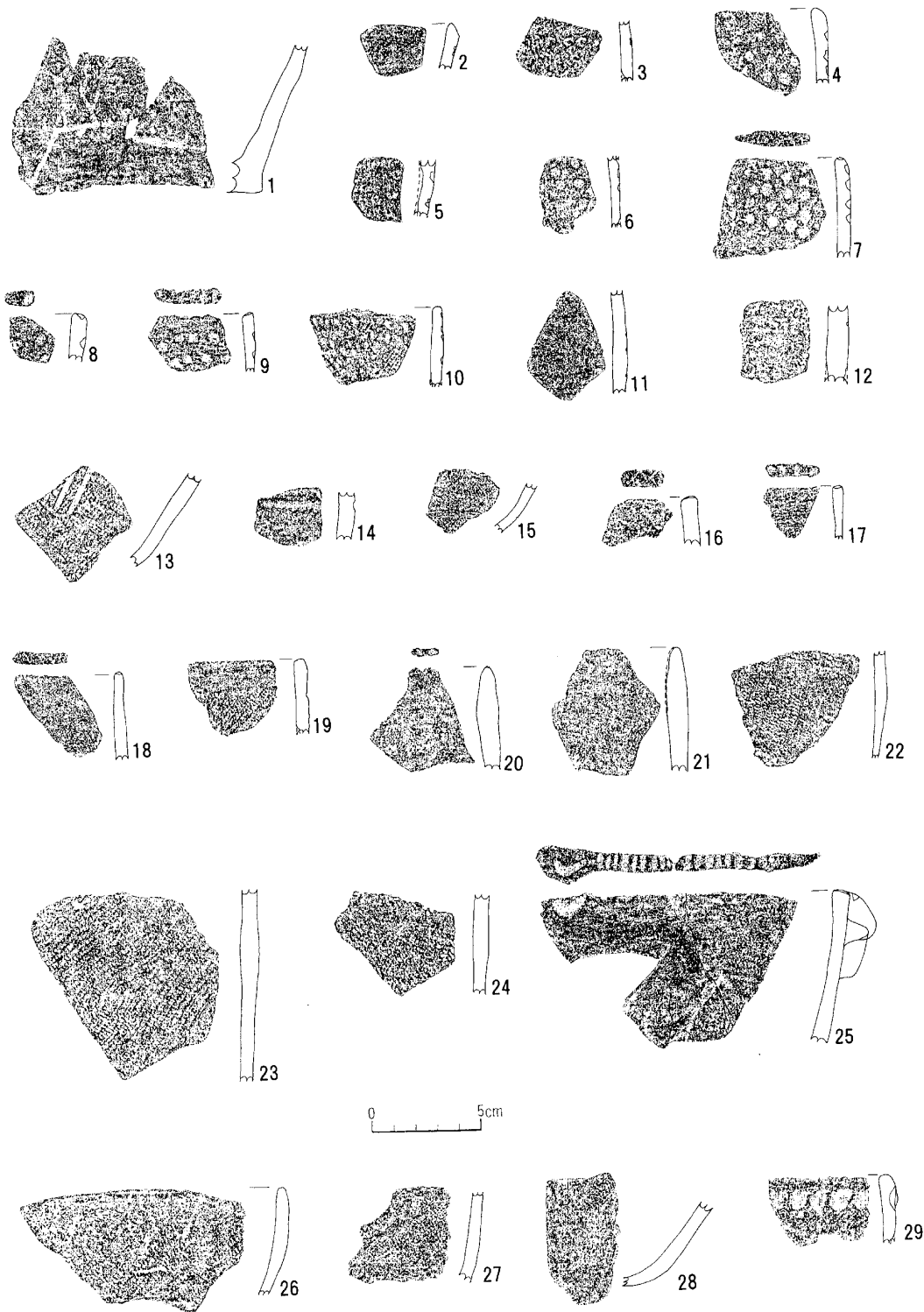


1 縄文中期土器出土位置

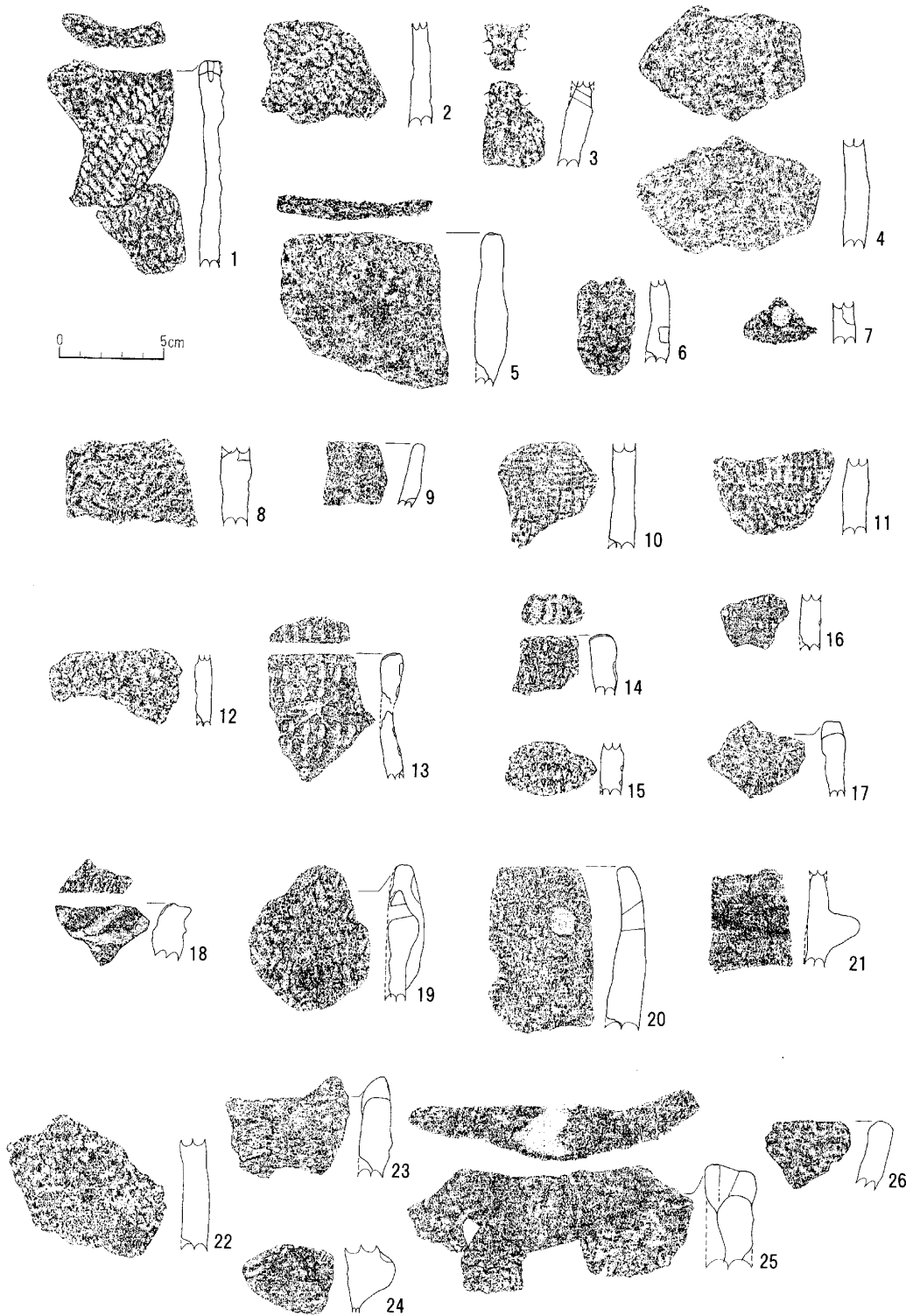


2 縄文晚期土器出土位置

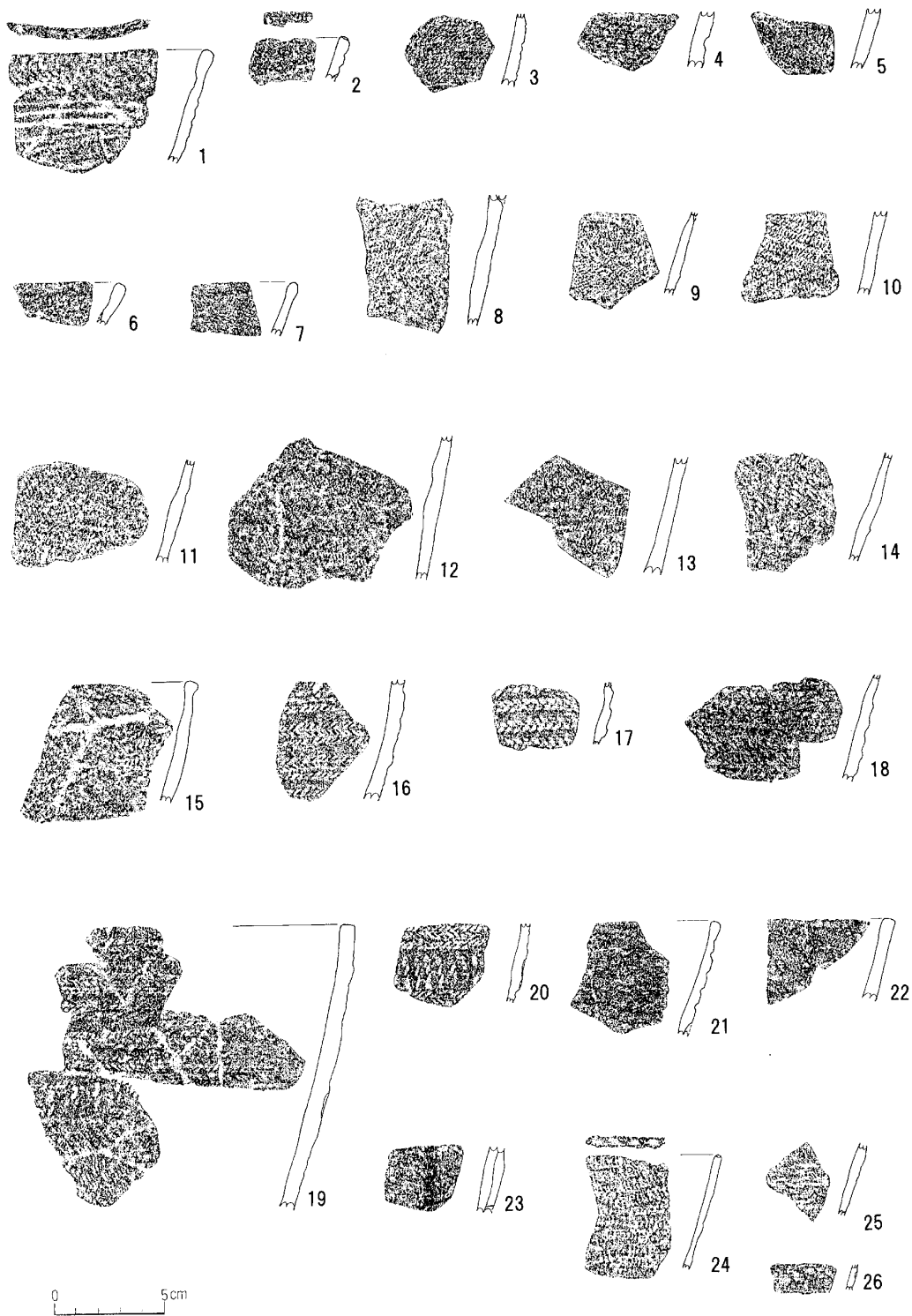
第34図 中期土器・晚期土器出土位置



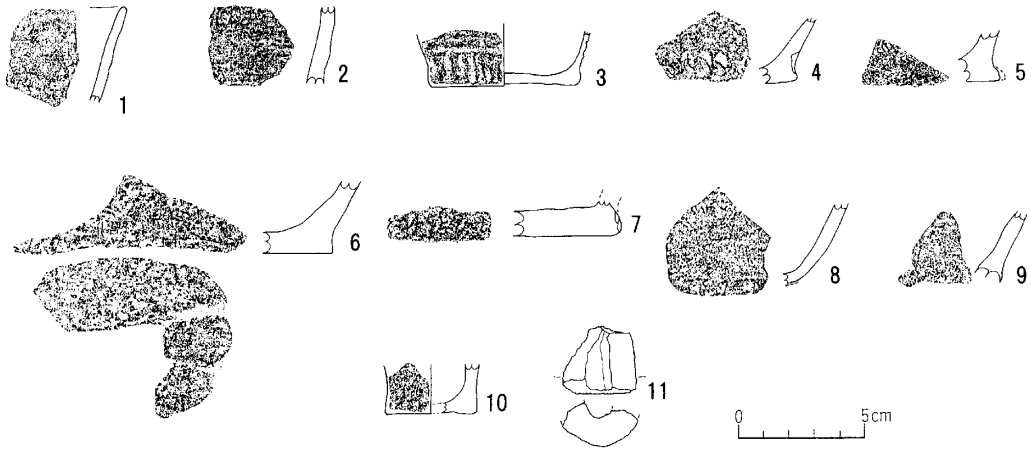
第35图 发掘区出土土器



第36图 发掘区出土土器



第37图 发掘区出土土器



第38図 発掘区出土土器・土製品

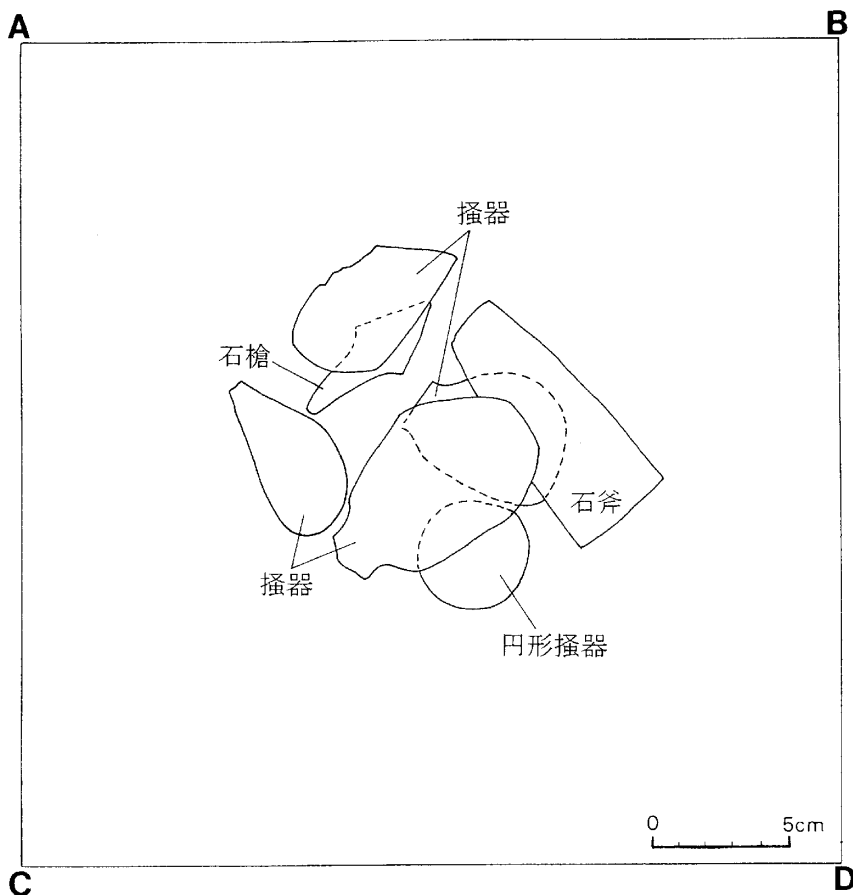
文は見られないが、内面に縄文が施される。6～17は常呂川河口遺跡第XII層出土と同様の円形文をもつものである。常呂川河口遺跡第XII層出土の土器群は方形、短冊、矢羽根状など各種の押型文が見られ、他に櫛目文、刺突文、無文が伴う。胎土は粒子が粗く小砂利を含む。年代測定では 4360 ± 60 の結果が得られている。縄文前期末葉と考えられる。6は円形文の下部に横位の浅い刺突文、8は矢羽根状の押型文が見られる。9・12は無文であるが、直径5～6mm程度の細い円形文が乱雑に施される。10・11は短冊状の押型文である。13は横位に調整された擦痕が遺る。極めて緩く外反した口縁下部に刺突文が連続し、口唇部は丸みをもつ。14は角形の口唇部と口縁部に半截状施文具による刺突が施される。15・16は櫛目文が施される。17は角形の口唇部に山形小突起をもつ。拓本図の下部に浅い「ハ」字状の刺突文が見られる。18の器壁は1.3cmと厚く、胎土に繊維を含む。口唇部内側に縦位の細い沈線文と口唇部に太く、浅い沈線文、口縁下部に斜位・横位の太く、深い沈線文が施される。管見による同一資料は無く、詳細は不明であるが、縄文前期のものと思われる。19の器面は風化が著しい。貫通した円形文があるものの小突起下部に縦横の隆帯が見られ、上部に半截状刺突文が加わる点など常呂川河口遺跡第VIII層出土の押型文と類似する。20は口縁部が内屈した無文土器。21は角形状の短かい隆帯が横位に貼付けられる。20・21は網走式と思われる。22～25は無文であり、胎土に繊維を含むものである。24は隆帯をもつ。25は口唇部に横長で幅広い台形状の突起をもち、深く鋭い切り込みが縦位に施される。器面は無文である。口縁直下に半截状の刺突が3条にわたって施される。25・26は胎土に繊維を含むもので縄文前期と思われる。

第37図は縄文早期東釧路Ⅲ式主体の土器である。1～5は撚紐の側面圧痕文のあるもので、1は斜縄文、2は口唇部に刻みが施される。6～8は斜縄文、9～15は羽状縄文が施される。

15の口縁部は僅かに肥厚し、直下に撚紐の側面圧痕文が1条みられる。16は繩の向きを交互に変えた側面圧痕文、17は組紐圧痕文が施される。18・19は組紐圧痕文と短縄文、21・22は撚紐が押捺される。23は撚りの細い原体を使用した羽状縄文を地文に縦位の隆帯が垂下する。24は口唇部に刻みをもつ絡縄体圧痕文。25は焼成が良く、撚糸文が施される。26は口縁下部に縄端圧痕文と思われる、円形文が施される。

第38図も縄文早期東釧路Ⅲ式を主体とする。1・2は無文。3～10は底部。3は撚紐の側面圧痕文下に短縄文が連続し、4・7には縄端圧痕文が施される。11は中空の円筒状を呈していたのであろう。胎土は硬質である。時期不明の土製品。

石 器 (第39図、第40図、第41図、第42図、第43図、第44図、第45図、第46図、第47図、第48図、第49図、第50図、第51図、第52図、第53図、第54図、第55図、第56図、第57図、第58図、第59図、第60図、第61図、第62図、第63図、第64図、第65図、図版18、図版19、図版20、図版21、図版22、図版23、図版24、図版25、図版26、図版27、図版28、図版29、図版30、図版31、図版32、図版33、図版34、図版35、図版36、図版37、図版38、図版39、図版40、図版41)



第39図 発掘区一括、石器出土状況

K 8 グリッドの第Ⅲ層暗黄褐色土からは第39図（図版18）に示す通り搔器を主体とした各種の石器がまとまって出土した。第40図-1～7がその石器である。1は鎌身が二等辺三角形を呈した石槍もしくはナイフと思われる。基部の下端部に両側からの抉入がある。実測図の裏面はやや平坦である。2～5は搔器。4点とも断面は刃部にかけて湾曲した特徴をもち、刃部は肉厚である。2・3は上部が抉入され、つまみとなっている。6は円形搔器。7は片刃磨製石斧。表裏面とも丁寧に研磨されており、特に裏面にはタール状の黒色粒子が付着する。1～6は黒曜石製であり、7は緑色泥岩製。

第41図-1は本遺跡から唯一出土した石刃鎌。先端部と基部は欠失するものの石刃の縁辺部に加工を施す。2～4は三角形形状の石鎌で、基部は緩く内湾する。5は五角形状を呈し、基部は内湾する。6～20は二等辺三角形の鎌身をもち、7を除く基部は内湾する。16～18は細身に極めて小型である。18は部分的に原石面を残し、19は断面が厚い。21～23は柳葉形の形態をもち、21は表裏の縁辺部に加工を施す。24～35は基部がすぼまる傾向をもつもので、30～36は長身鎌である。全て黒曜石製。

第42図-1～8も基部がすぼまる長身鎌である。9は基部が細長く作出される。10～42は尖頭部が三角形形状の有茎石鎌であるが、10～17の茎部は小さく、18～42の茎部は広い。全て黒曜石製である。

第43図-1～6も茎部は広い三角形形状の有茎石鎌。7～19は尖頭部が二等辺三角形形状の石鎌で茎部が小さいもの。20は菱形の石鎌。21～35は尖頭部が二等辺三角形形状の石鎌であるが茎部は広いものである。全て黒曜石製である。

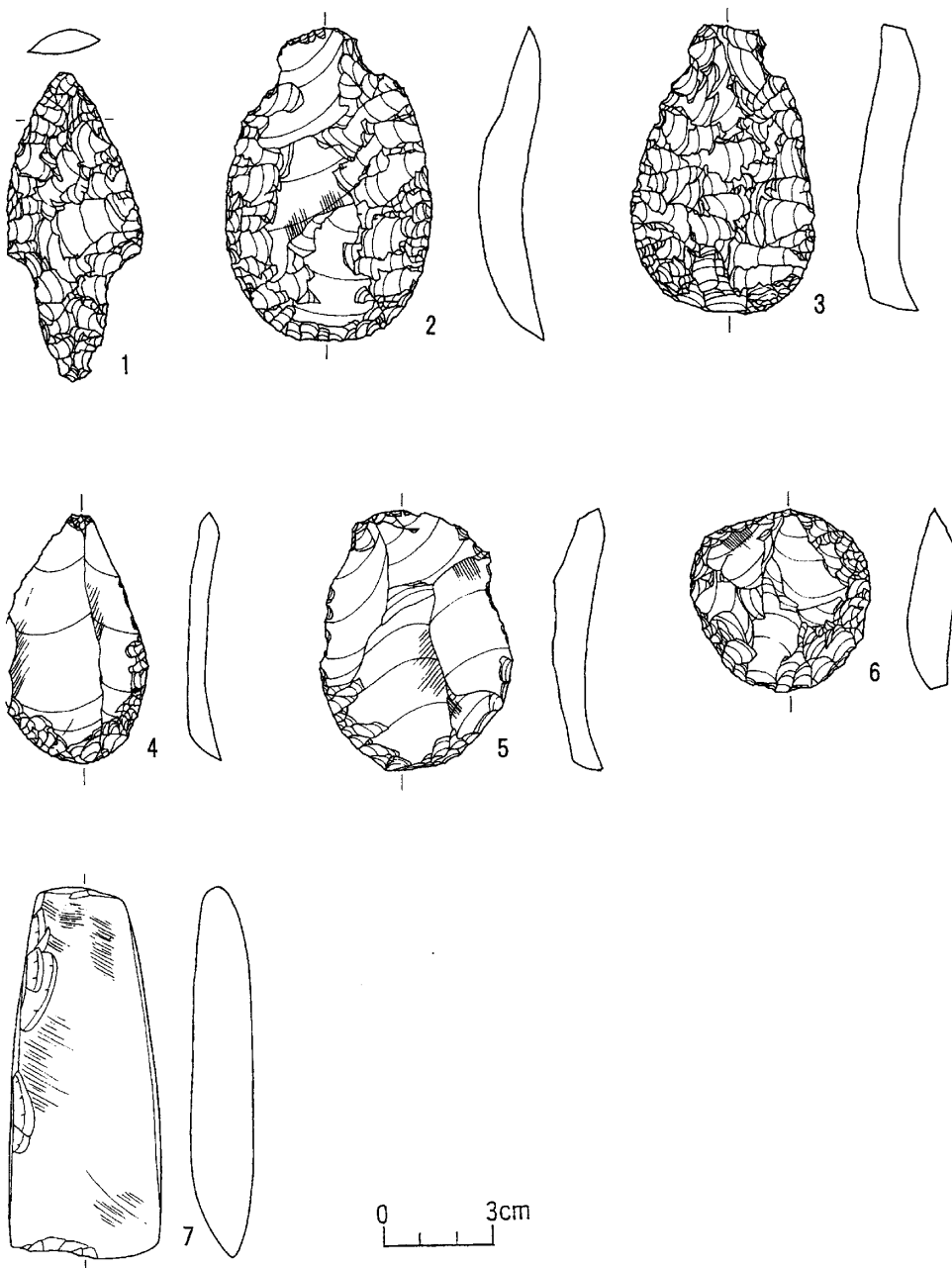
第44図-1・2は二等辺三角形形状の有茎石鎌。3～6は菱形の石鎌であるが4・5はアグ状の張り出しをもつ。7～14は五角形状の石鎌である。15～30は鎌身が丸みをもった小型の柳葉形石鎌。31は薄い縦長剥片の縁辺部に微細な刃こぼれ状の加工が施される。全て黒曜石製である。

第45図-1～9は石槍。1～7は尖頭部が二等辺三角形を呈し、6を除き基部が幅広い石槍。8・9は明瞭な茎部のつくりがみられない。10～13は上部に抉入をもつ両面加工ナイフ。14・15は柄部を作出した両面加工ナイフ。16～19・21は小型両面加工ナイフ。20は片面加工ナイフ。全て黒曜石製である。

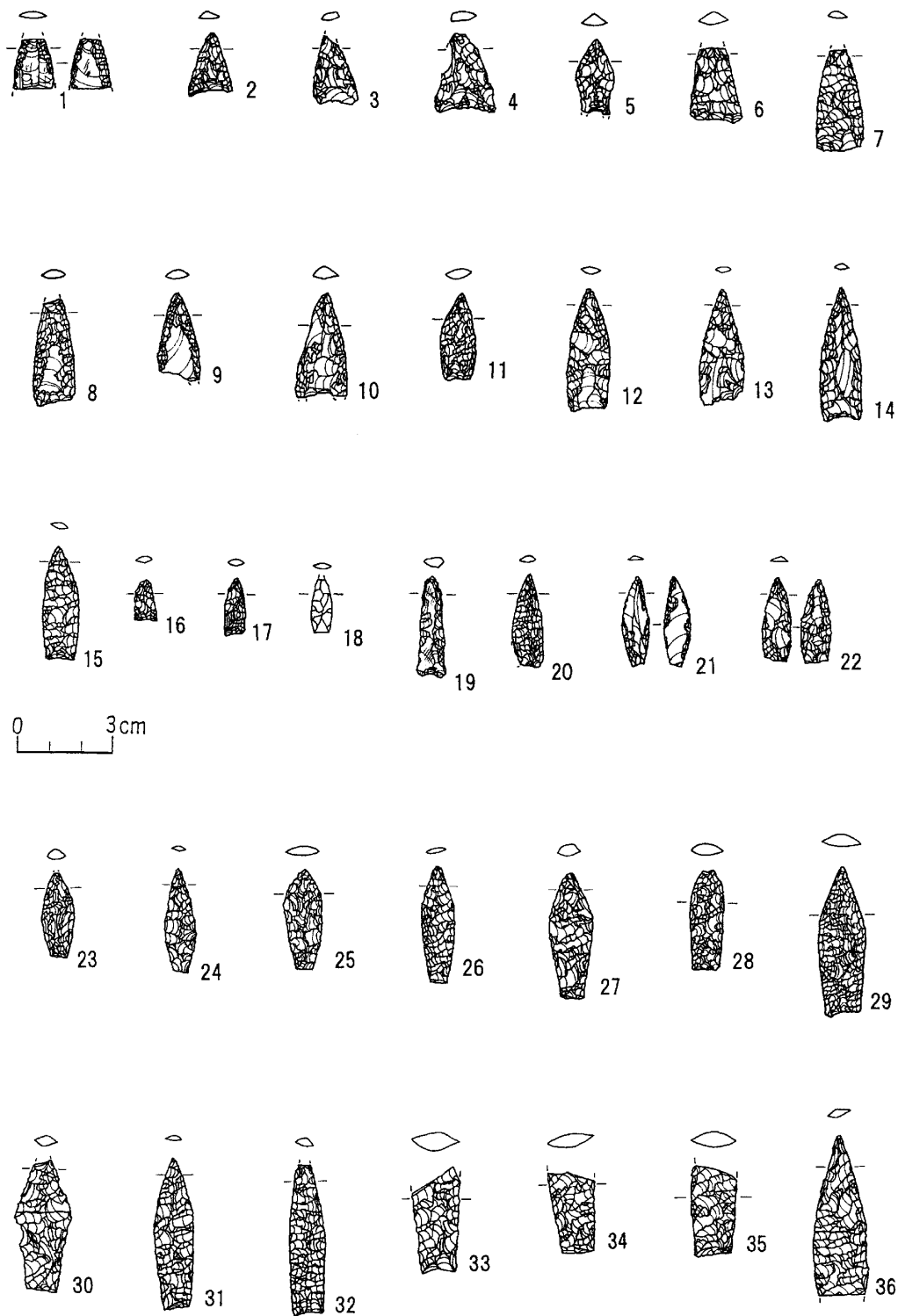
第46図-1～5は小型両面加工ナイフ。6～20は大型両面加工ナイフであるが、13～20の裏面は比較的平坦である。全て黒曜石製。

第47図-1～13は片面加工ナイフ。1・3・13は主要剥離面側の柄部を入念に調整している。1・6・9では縦方向を基調とした使用痕が観察され、形態上からも刺突具としての機能がある。14は左側縁、15は右側縁に刃部をつもつ小型の削器。16・17はいずれも両端部が破損する。大型両面加工ナイフであろう。8は頁岩製であり、他は黒曜石製である。

第48図は石匙である。1～8は幅広く、10～23は断面三角形、24は蒲鉾形の断面である。石



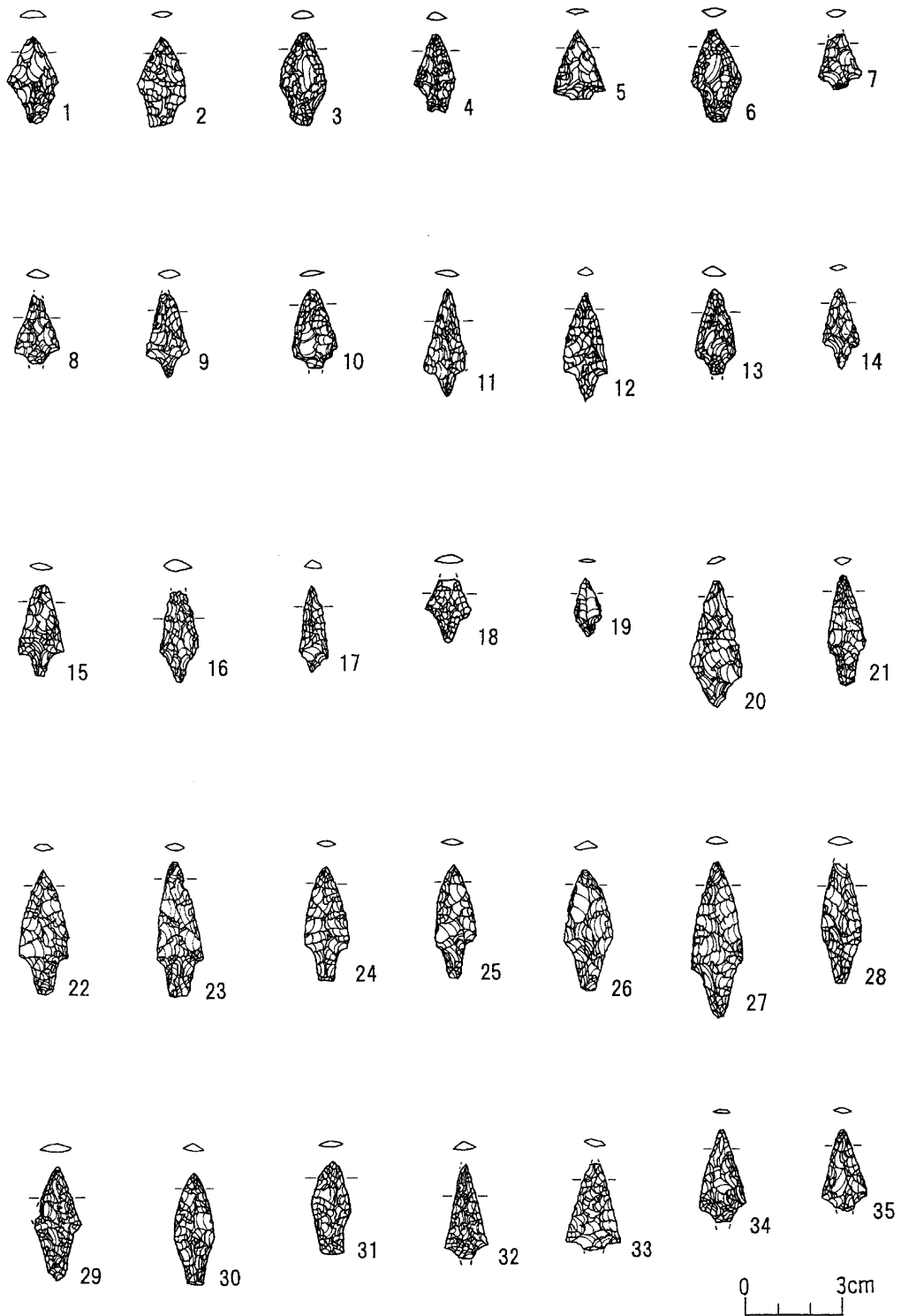
第40图 发掘区一括出土石器



第41图 发掘区出土石器



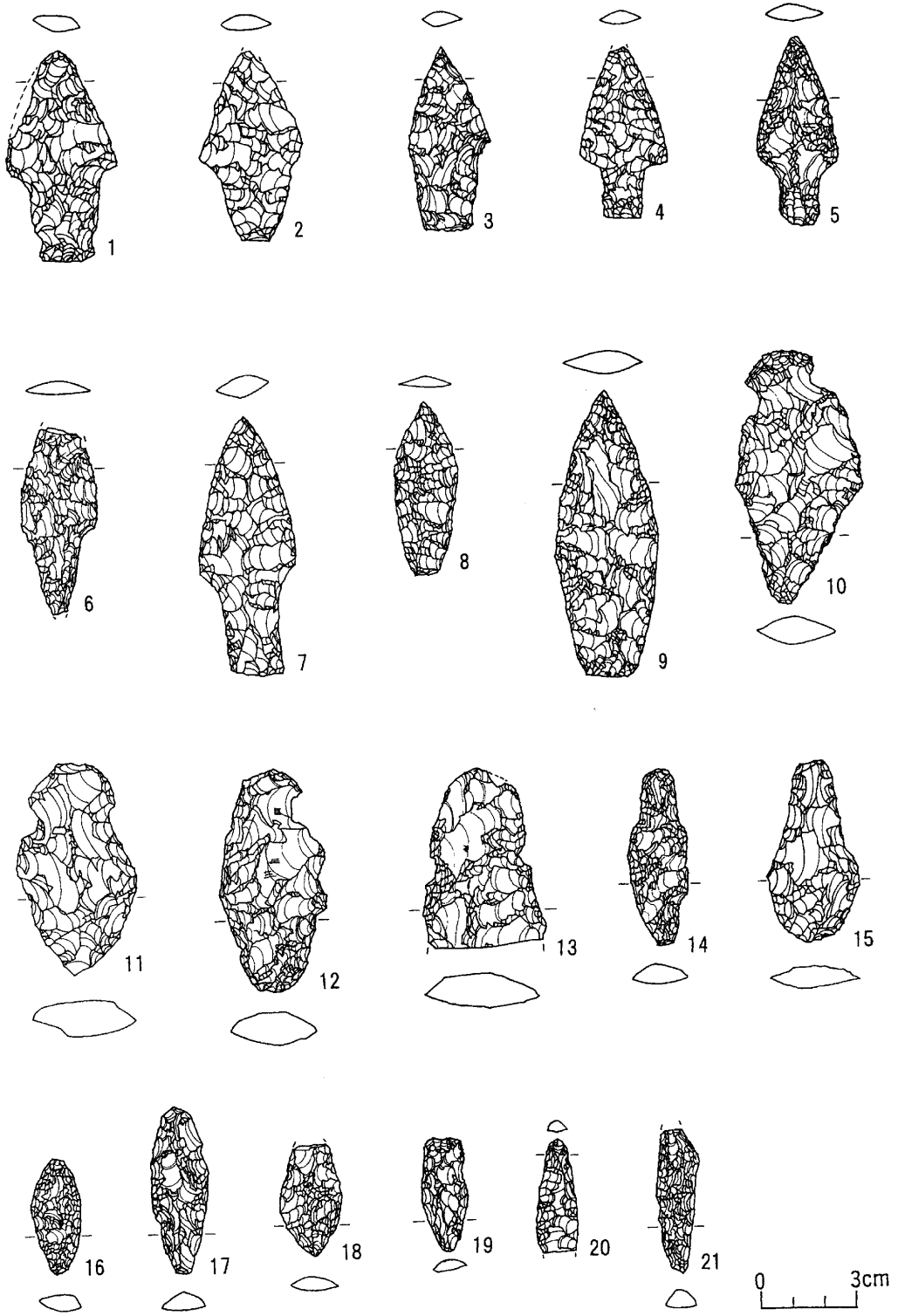
第42图 发掘区出土石器



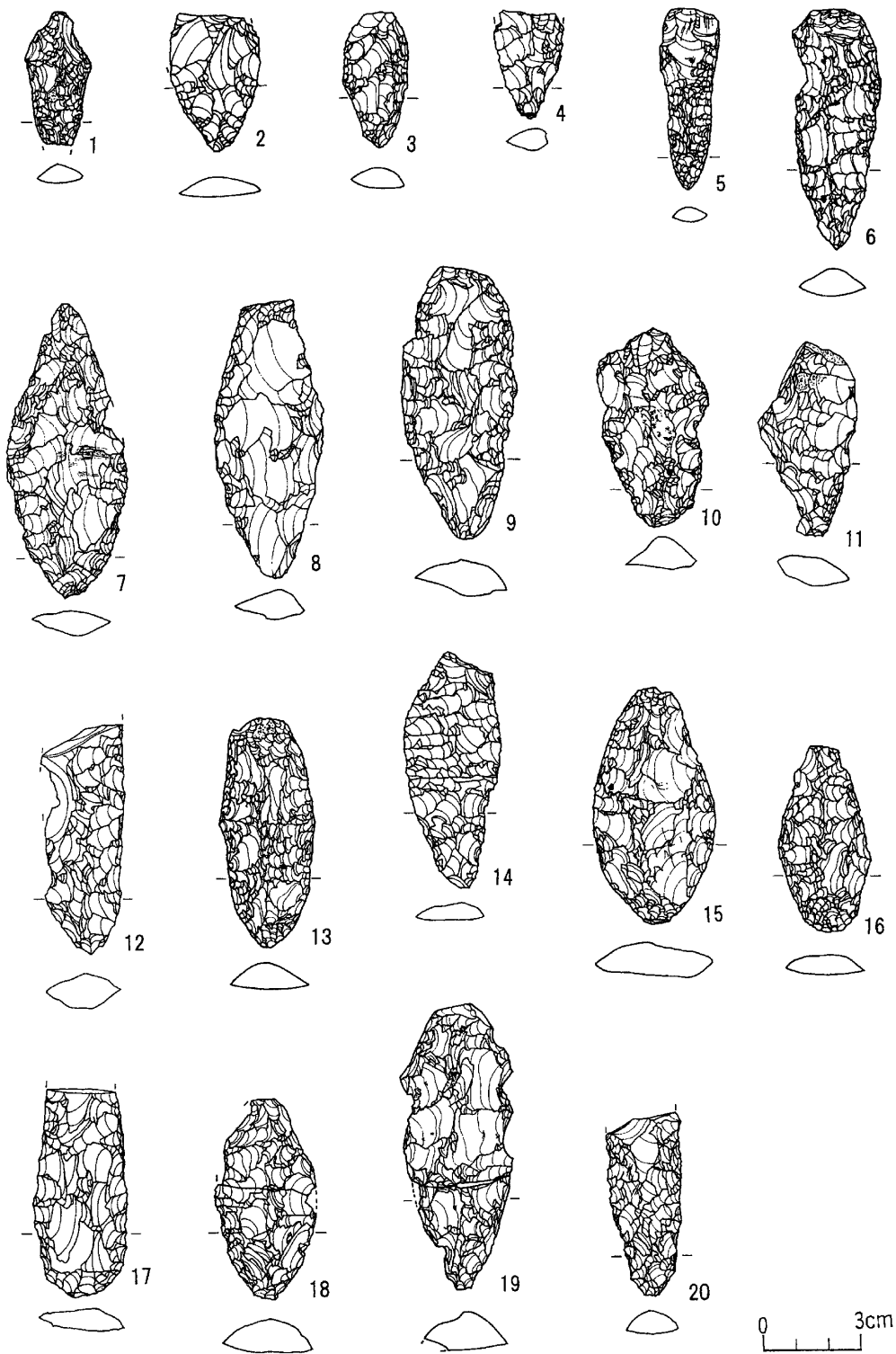
第43图 发掘区出土石器



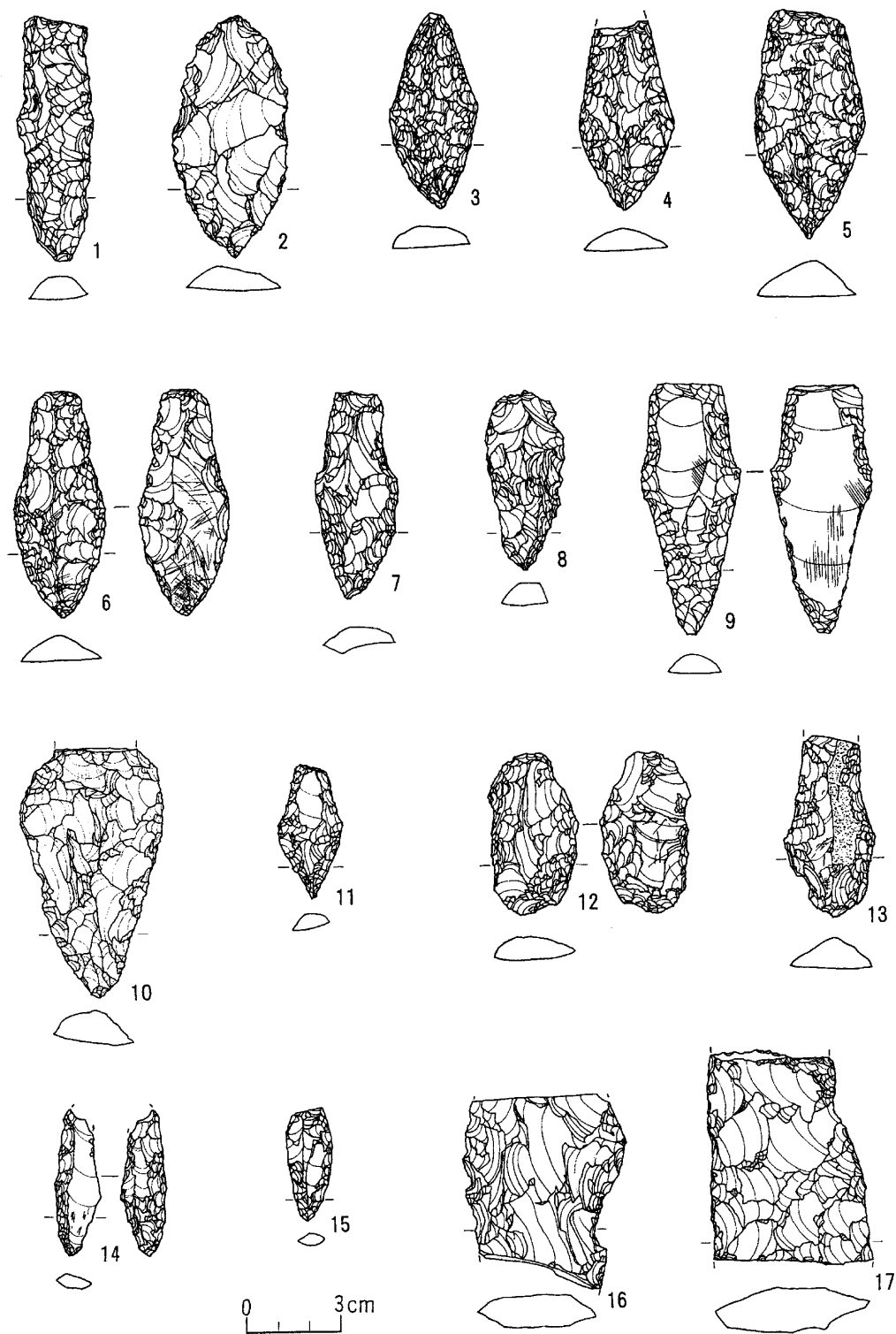
第44图 发掘区出土石器



第45图 発掘区出土石器



第46图 発掘区出土石器



第47图 発掘区出土石器

質は1・3・5・9・10は黒曜石製。4・6・8・12・15～21・24は硬質頁岩製。7・22・23は頁岩製。11は泥岩製。13・14はメノウ製。

第49図－1・2も石匙。3～6も破損するが石匙と思われる。7は両面加工ナイフ。8は削器。1・5・6は頁岩製。7はメノウ製。その他は全て黒曜石製。

第50図は縦長剥片を素材とし、両側縁に刃部をもつ削器。全て黒曜石製。

第51図－1～7は幅広の剥片を素材とした片面加工の削器。8～13は先端部が鋭角となる片面加工の削器。14・15は裏面の側縁部が急斜な刃部である。16・17は両面加工ナイフの先端部。3～5は玄武岩製であり他は黒曜石製。

第52図は肉厚で急斜な刃部をもつ搔器であり、1・2・4は分銅形を呈する。全て黒曜石製。

第53図も急斜な刃部をもつ搔器であるが、12～16は薄い。全て黒曜石製。

第54図－1～7は石錐。1は横長剥片、2～7は縦長剥片を素材とする。7は厚い刃部をもつ搔器であるが、上部と右下端部に錐状の刃部を作出した複合石器。8～30は薄い縦長剥片に1箇所から数箇所の挟入のある異形（挟入）石器。

第55図－1～11は石刃。12・13は残核。14は棒状原石。2・3は頁岩製、他は全て黒曜石製である。

第56図－1～11は彫器。1・2は石刃を素材とし、斜め向きに剥離される。1は右側縁部にも主要剥離側に傾斜した垂直方向の彫刃面を作出し、2は交叉刃型であり左側縁部が斜め向きに剥離され、古い彫刃面が残る。3・5・6は両面加工ナイフに彫刃面を作出したもので3の刃部は裏面に傾斜し、5は古い彫刃面が残る。6は交叉刃型でほぼ垂直方向に剥離され、右側縁部では刃部が表面に傾斜する。4は急斜な左側縁の加工部を切って彫刃面を作出したもので、主要剥離面側では縦方向の使用痕がみられる。7～10は片面加工ナイフに彫刃面を作出したもので、7・8は交叉刃型であり、先端部には微細な剥離がみられる。10は両側縁が急斜な加工であり、裏面には原石面が残る。11は搔器に彫刃面を作出している。すべて黒曜石製である。12～14は片面加工ナイフ。12の主要剥離面側の先端部には縦方向の使用痕が中央部まで遺る。13は先端部が鋭角となる。14は横長剥片を素材とし、打瘤部を調整している。全て黒曜石製。

第57図は16点とも全面研磨の片刃磨製石斧。2・5は擦り切り手法、8は両縁辺が敲打調整されている。1・4・6～8は青色片岩製、2・10・13・15は緑色泥岩製であり他は泥岩製である。

第58図－1・2は両刃磨製石斧。2は表裏面とも斜め上方から丁寧に研磨されている。2点とも青色片岩製。3は両側縁部が敲打調整された片刃磨製石斧。泥岩製。4は両側縁部が敲打調整された磨製石斧の柄部。緑色片岩製。5～7は楕円状の自然礫の端部を刃部とした磨製石斧。8も自然礫であるが刃部は打製である。5～8は泥岩製。

第59図－1は大型の磨製石斧。ほぼ中央部から折れており、上部は石錘となっている。しかし、刃部側の表面は風化したくすんだ色調であるが、石錘は明るい色調を呈している。石斧が

廃棄後に異なる者により再利用されたものと推測される。2は両面研磨の砥石であるが、表面には幅約1cm前後の深い溝がある。火熱を受けている。3は凹石。表裏面に細い溝をもつ。1は斑岩製、2・3は砂岩製。

第60図-1～3はたたき石。1は下端部の右縁辺部、2・3は下端部に使用痕がある。4は擦石。5は扁平礫の表裏面、6は楕円状礫の全周に縦横・斜めの刻線が無数に施される。1・3～6は泥岩製、2は安山岩製。

第61図-1～4も全面に無数の刻線が施される。2は研磨後の刻線である。第59図-5・6及びこれらの刻線は石器表面よりも新しいものである。耕作機械によるキズとも考えられるが、他の大型礫にはこのような刻線があるものは無く、耕作機械により全面に刻線が残されることはあり得ないと判断できる。人為的な刻線と考える方が妥当であろう。とすればこの石器は遺棄後に再利用されたものと考えられる。5は扁平礫の長軸面に打ち搔きをもつ石錘。6・7は石鋸。砂岩を素材として、両側から研磨を施し刃部としている。8は表裏面が研磨されている。磨石であろう。軽石製。

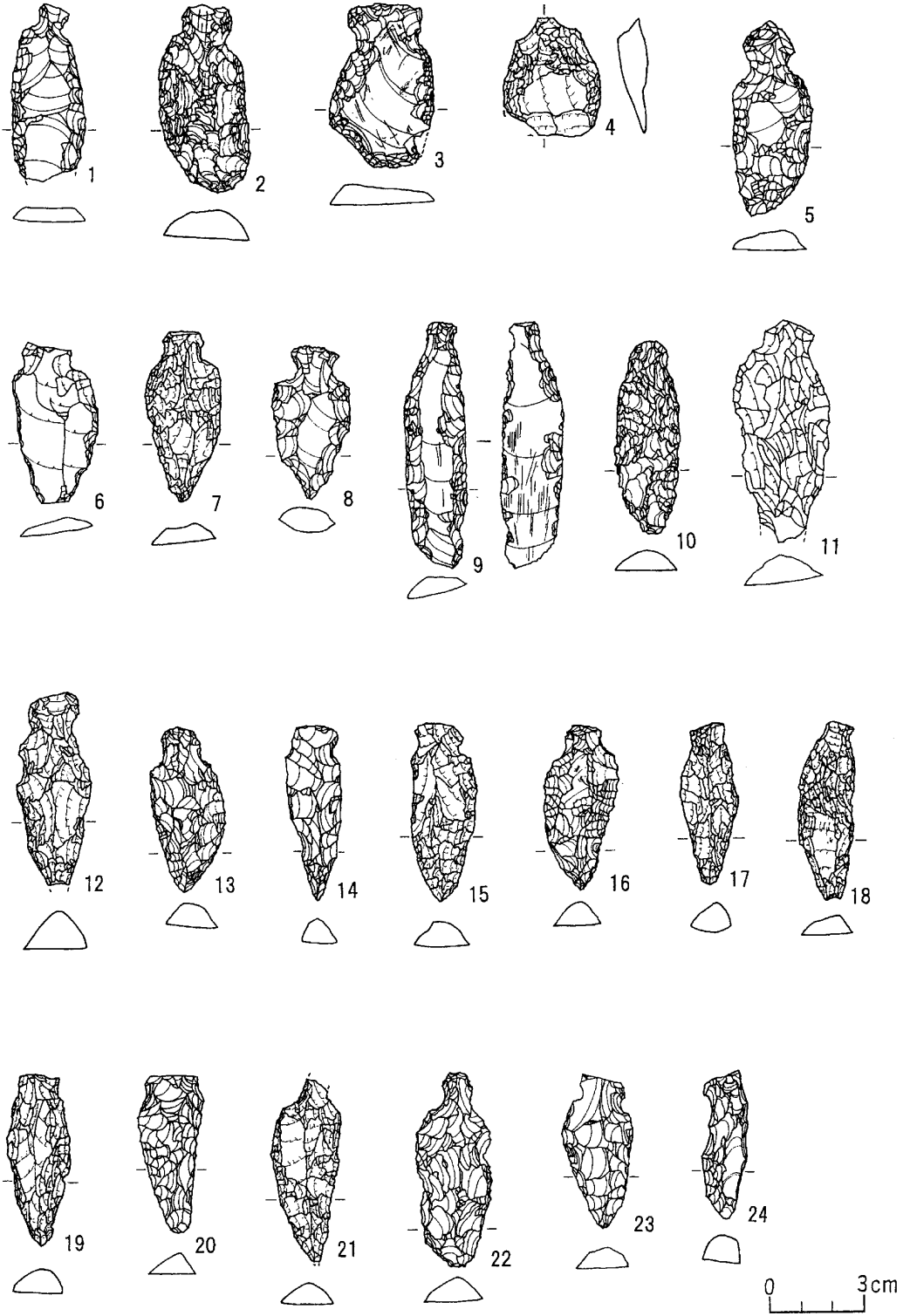
第62図-1は表面の中央部を中心に研磨されたもので、石皿か台石と思われる。2は両面研磨の砥石。表面に使用痕が横位に遺る。2点とも砂岩製。

第63図-1は砥石。表裏面に小さな敲打痕が認められる。2も砥石。裏面もごく一部が研磨されており、側面に小さな敲打痕が認められる。3は石皿。4は両面研磨された石皿か砥石であろう。3は赤色チャート製、他は砂岩製である。

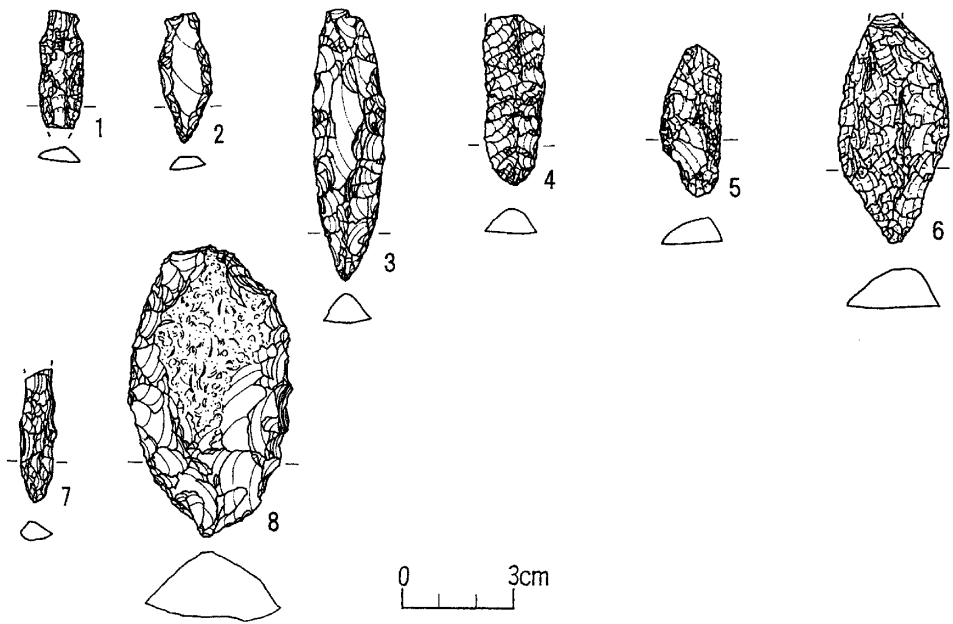
第64図-1は両面研磨の砥石。2・3は片面研磨の砥石。3点とも砂岩製。

第65図-1は両面研磨の石皿。2～4は両面研磨の砥石。2は表面に縦横の溝が見られる。4点とも砂岩製。

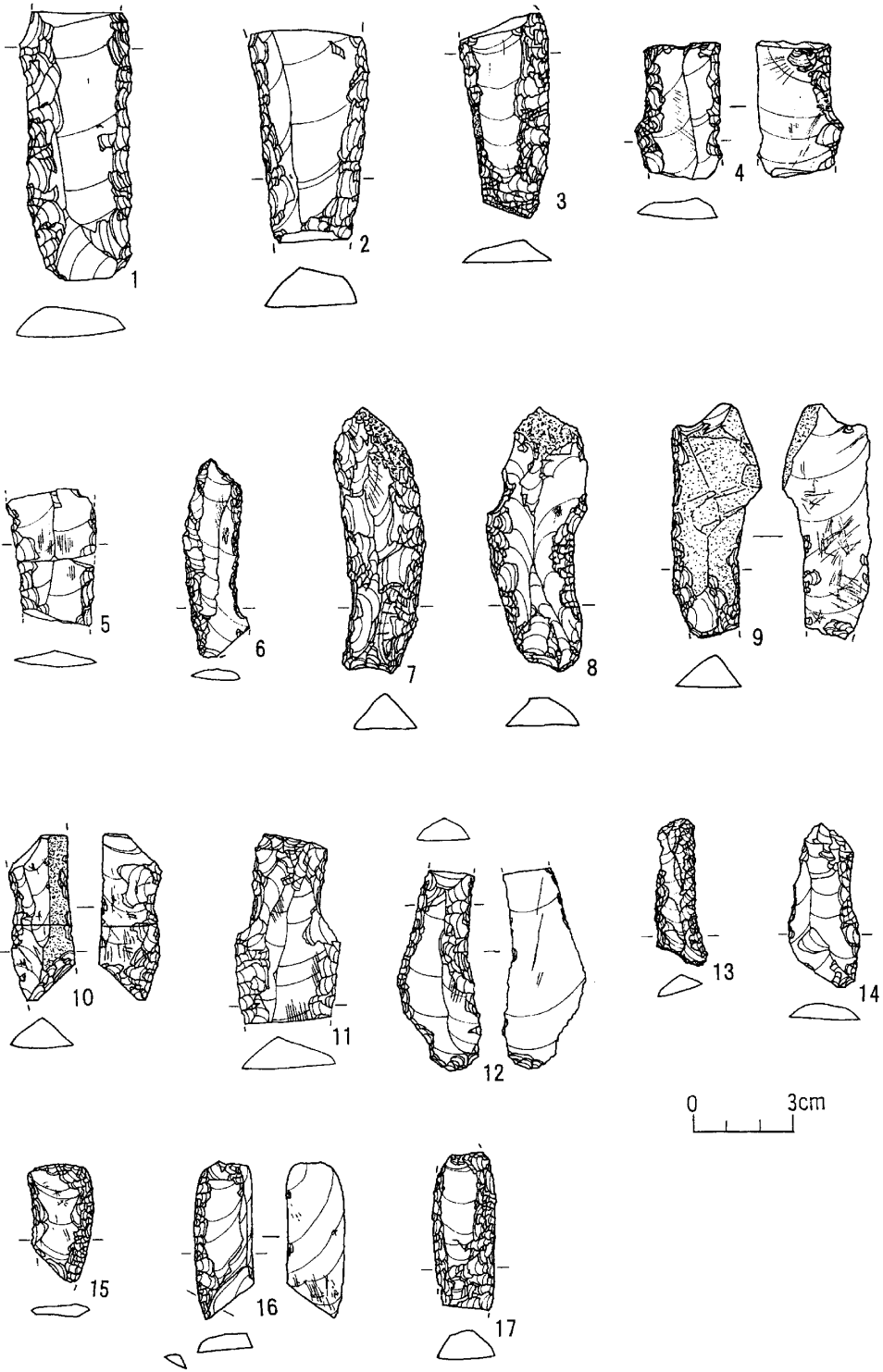
(武田 修)



第48图 发掘区出土石器



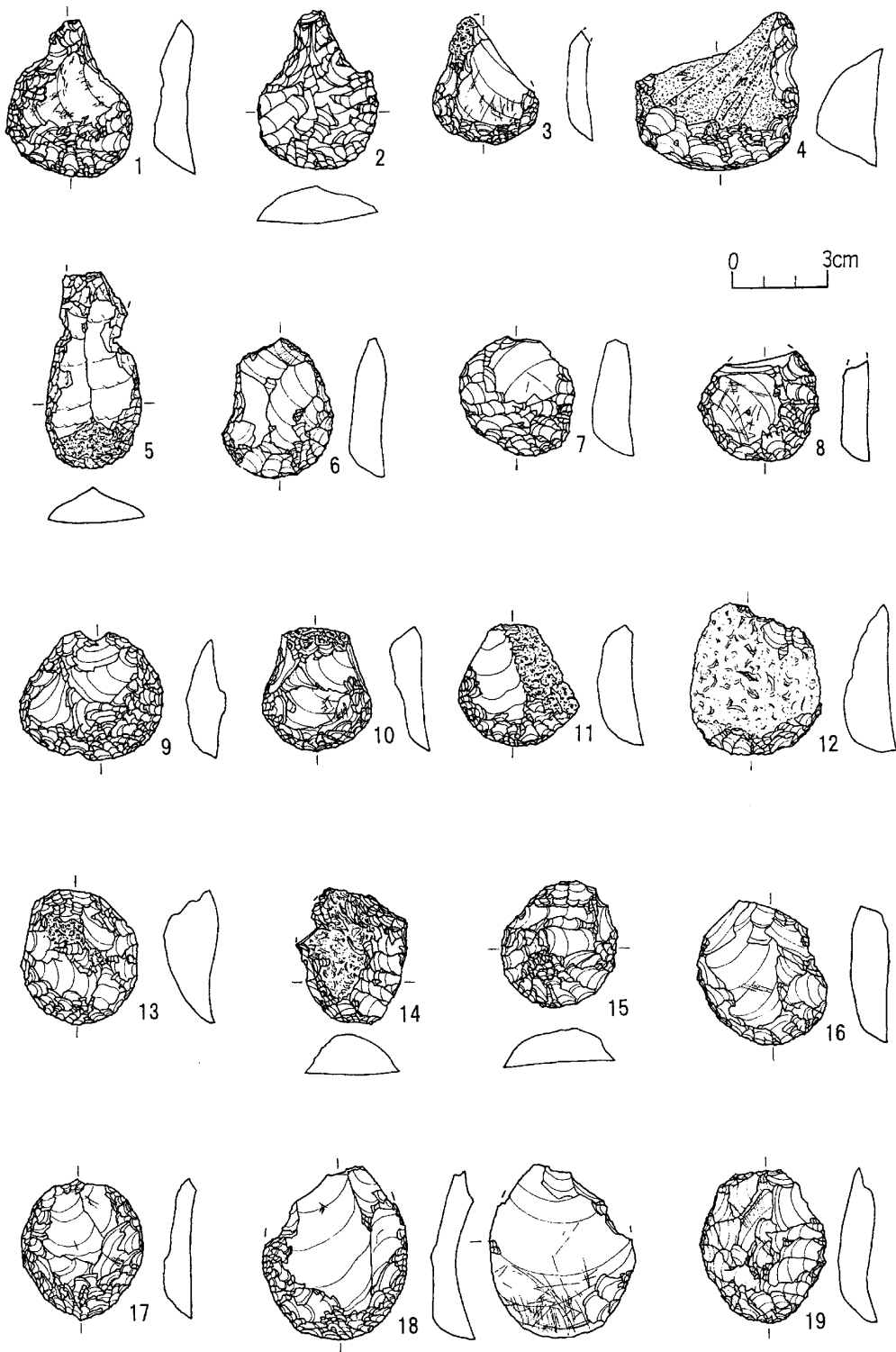
第49图 发掘区出土石器



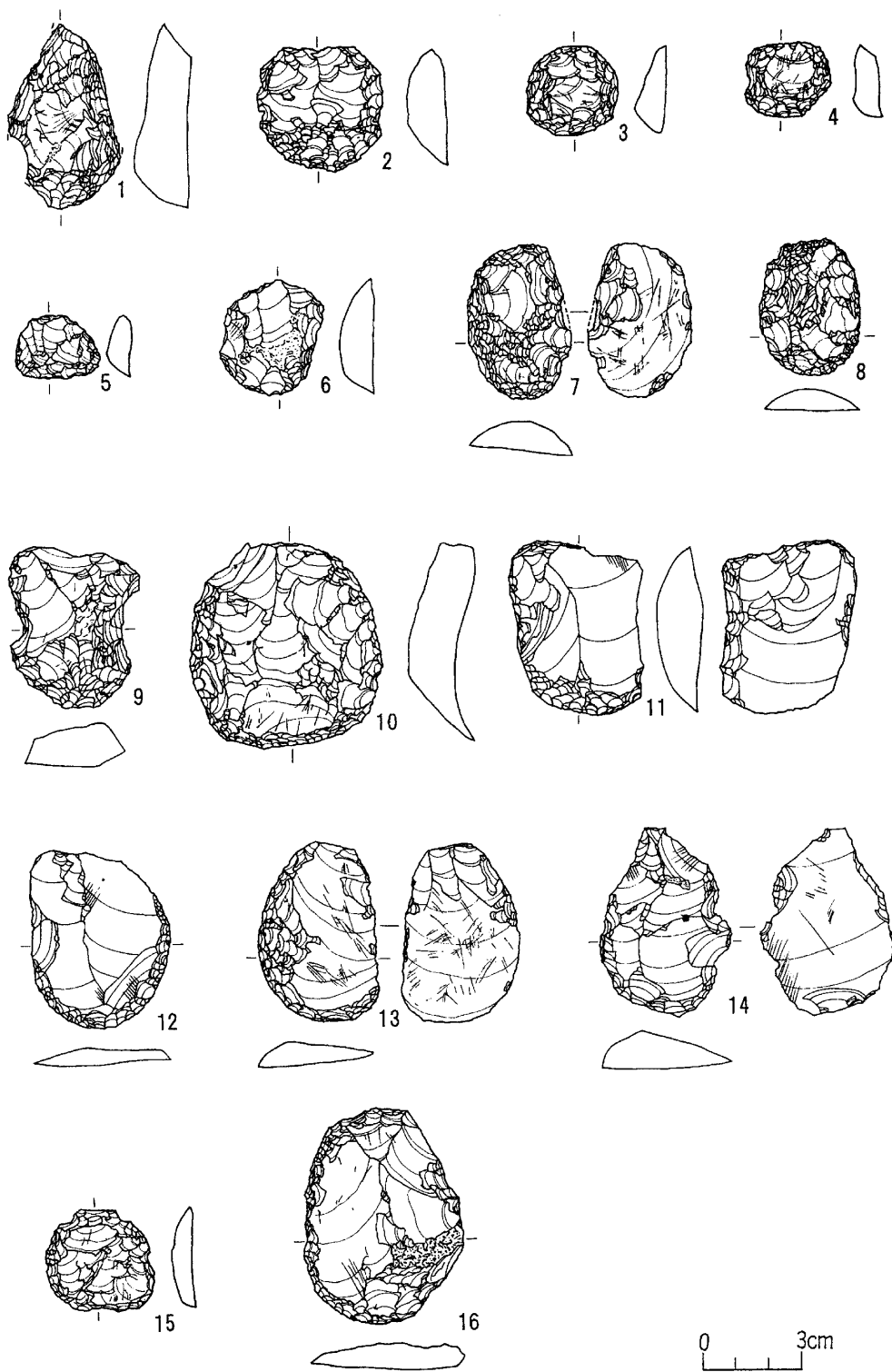
第50图 发掘区出土石器



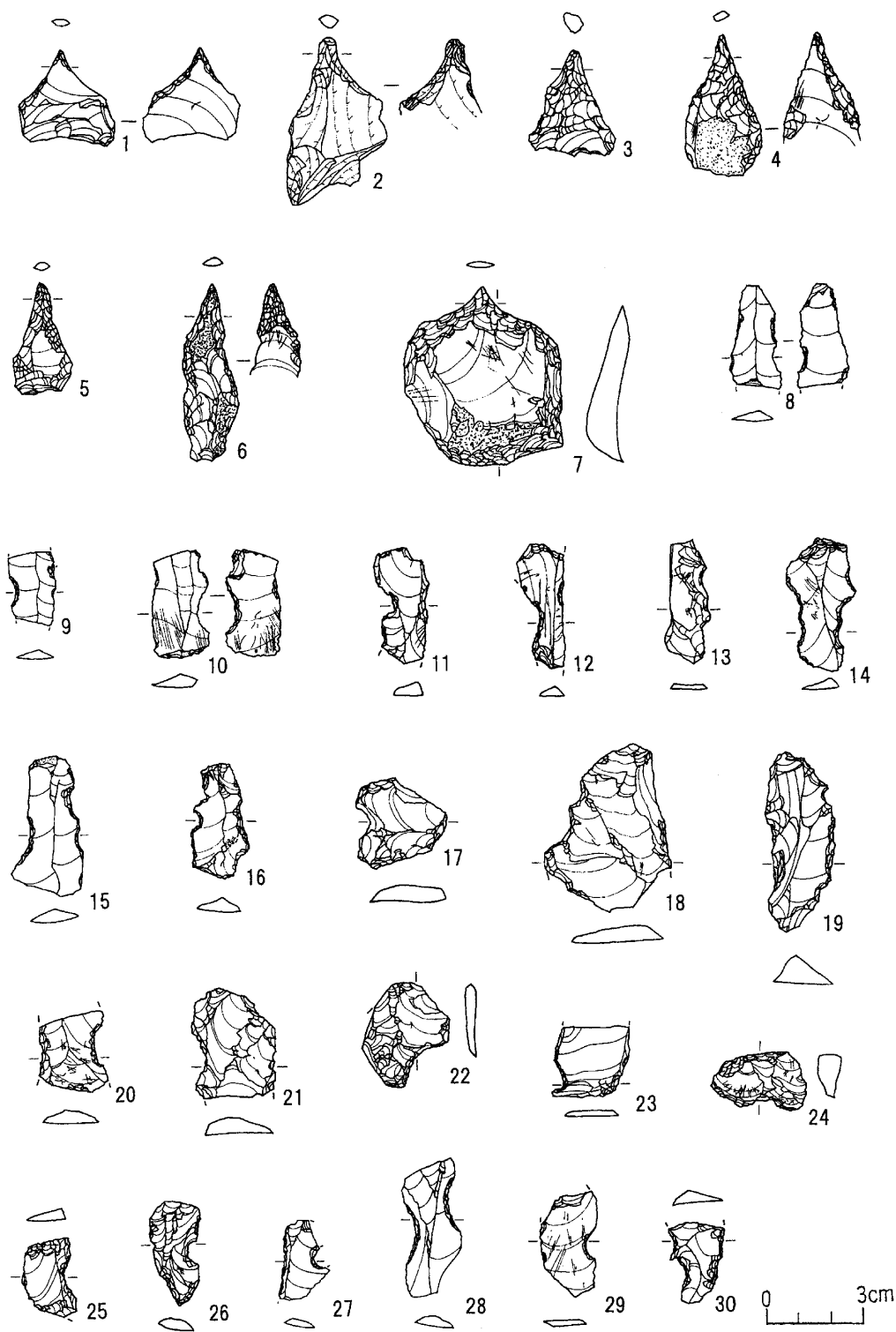
第51图 发掘区出土石器



第52图 尧掘区出土石器



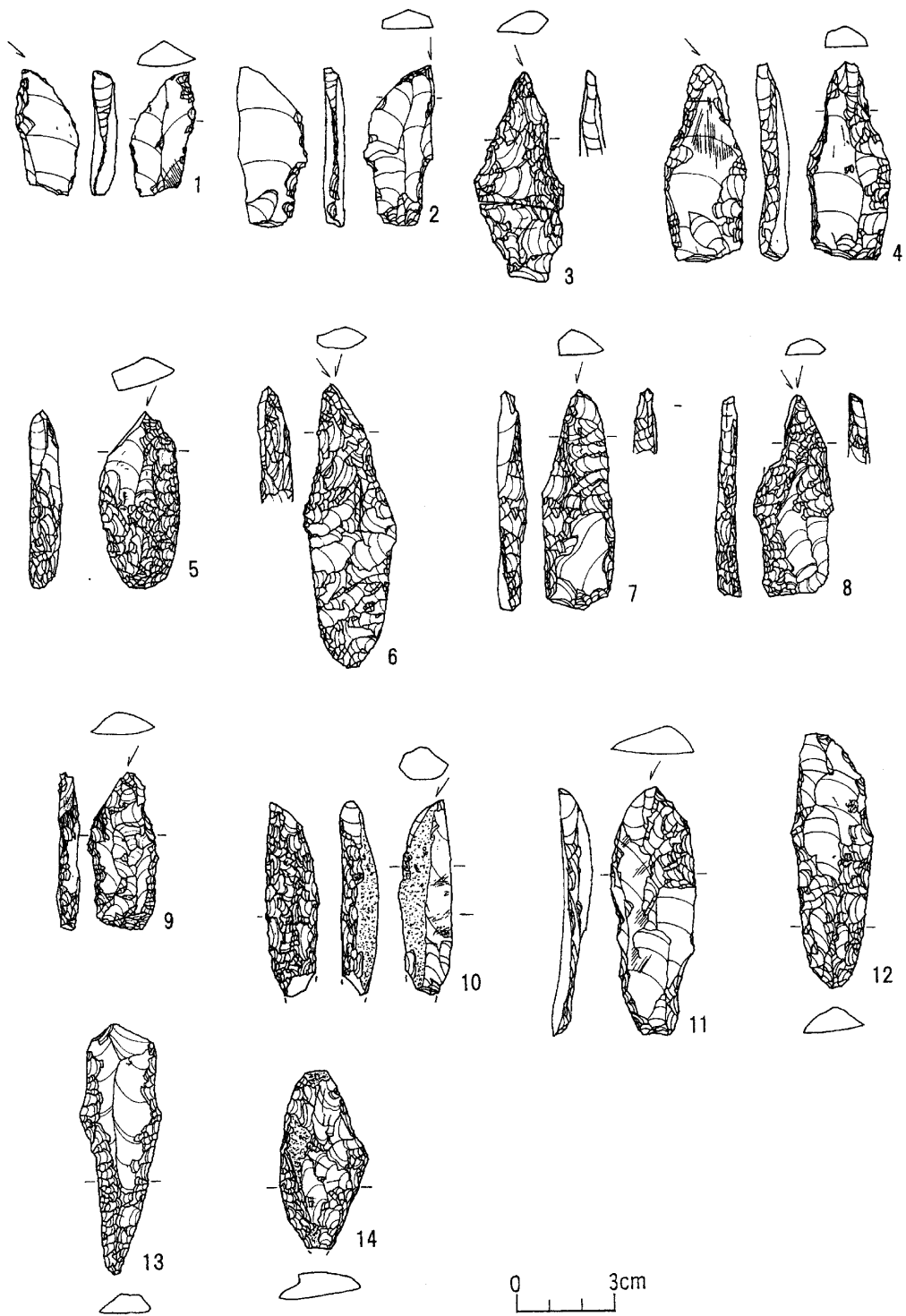
第53图 发掘区出土石器



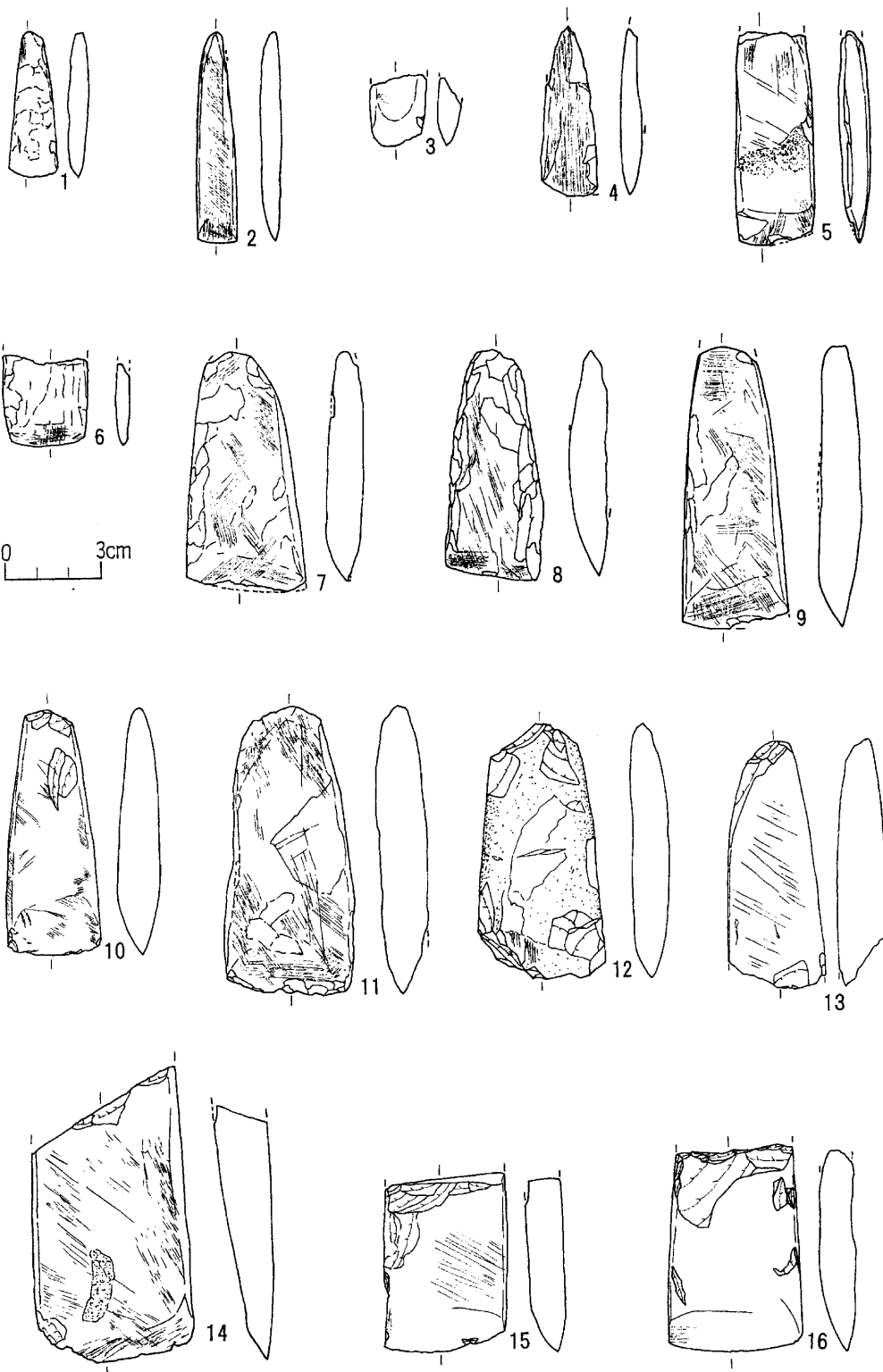
第54图 发掘区出土石器



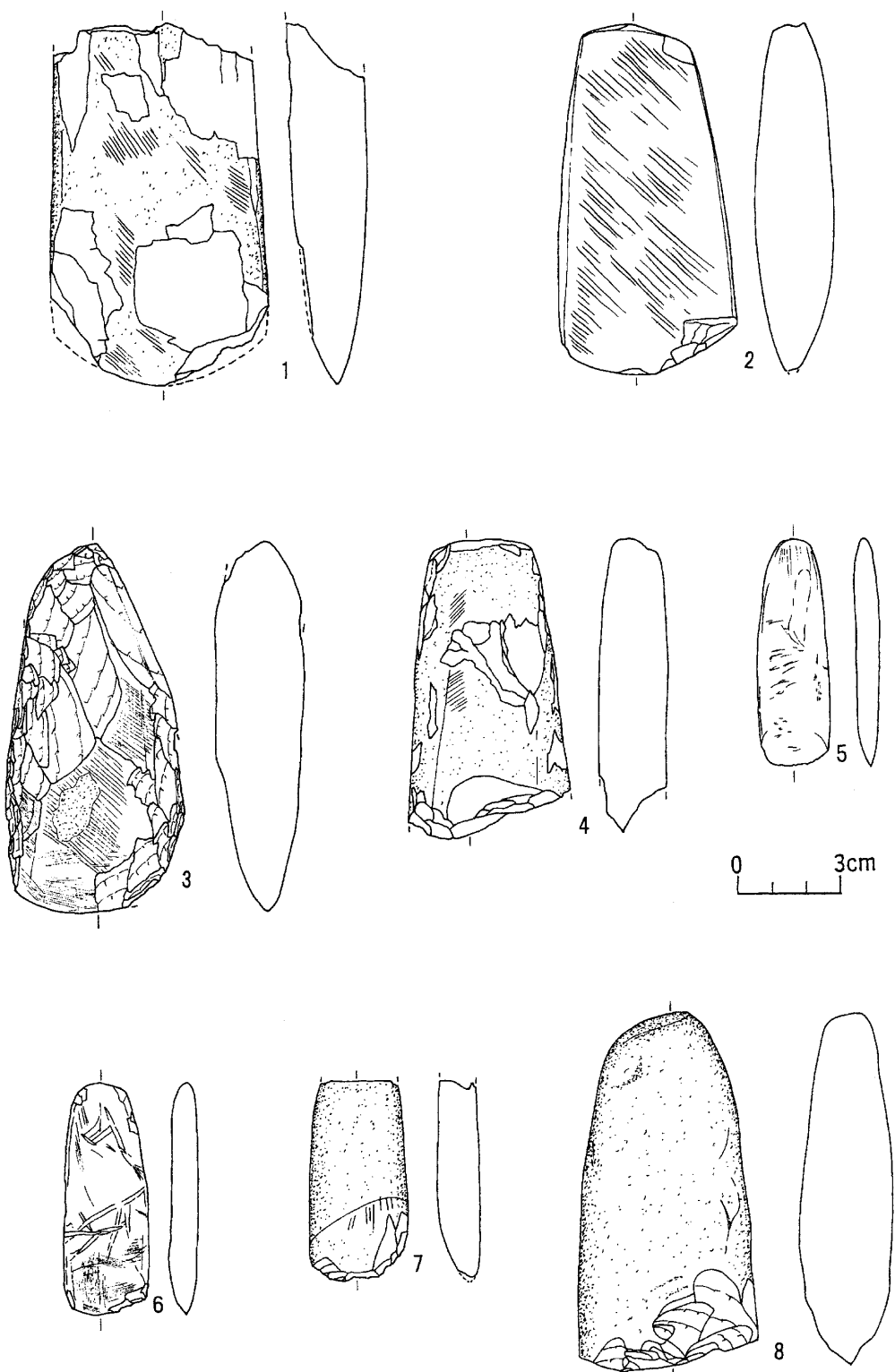
第55图 发掘区出土石器



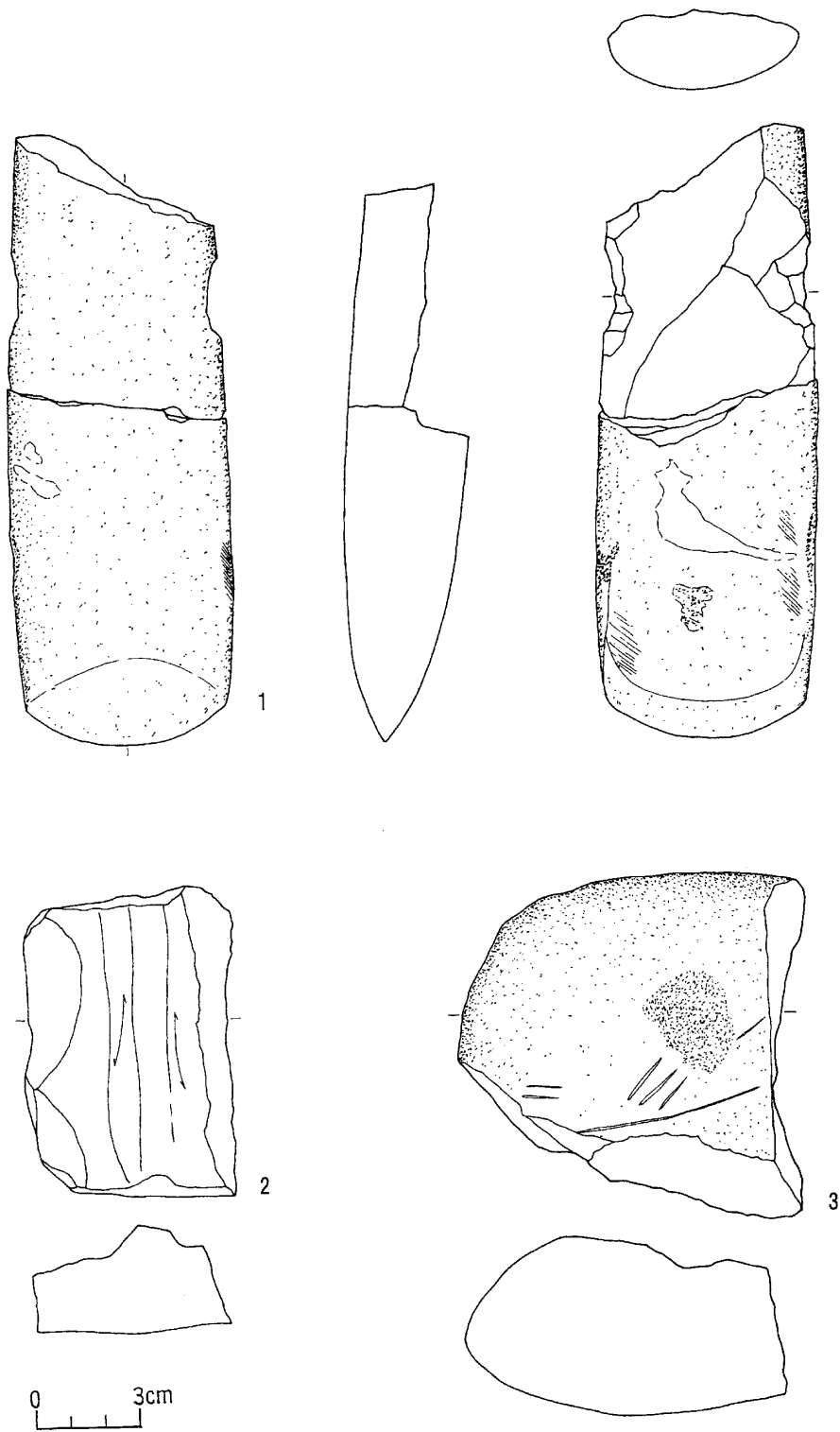
第56图 発掘区出土石器



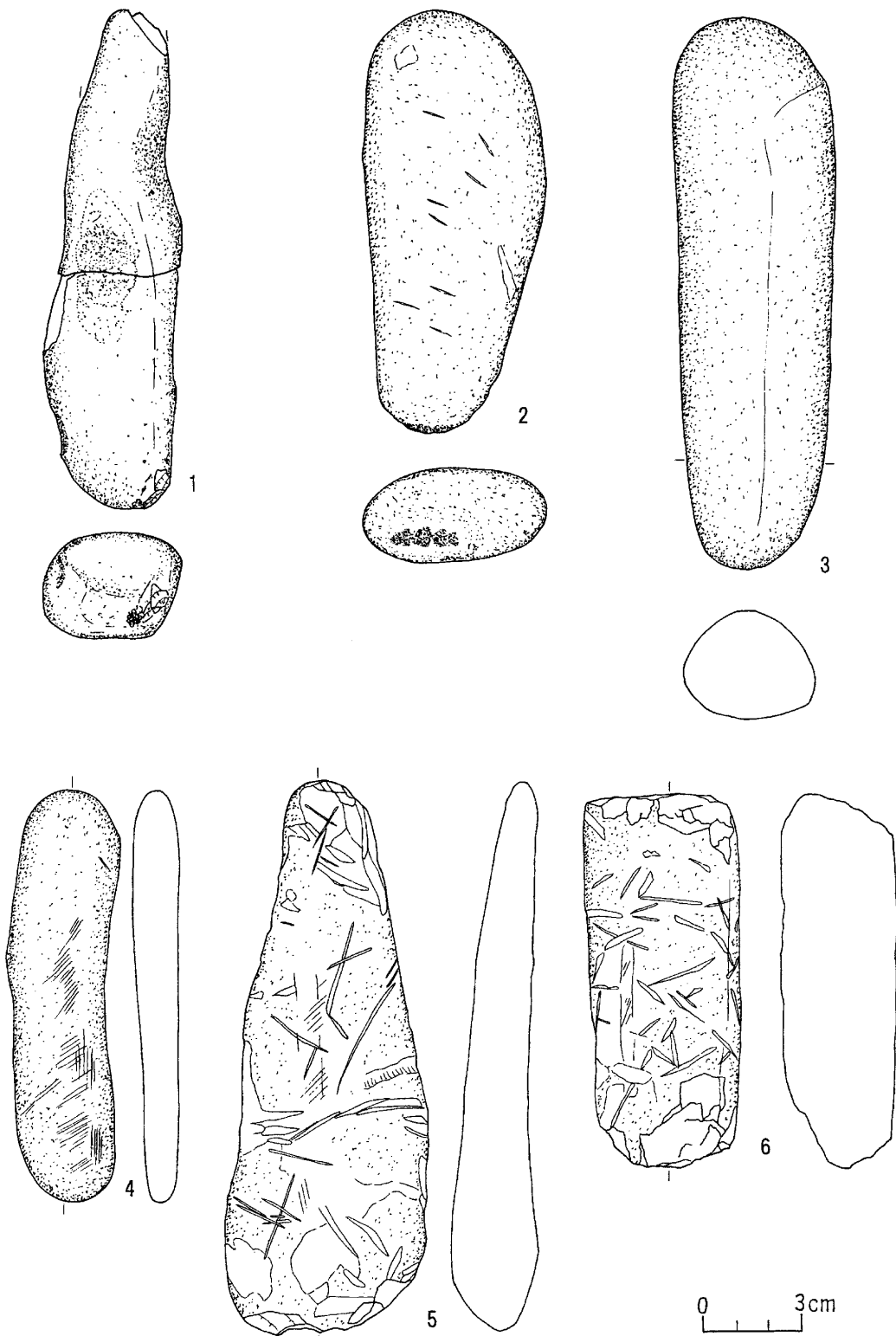
第57图 发掘区出土石器



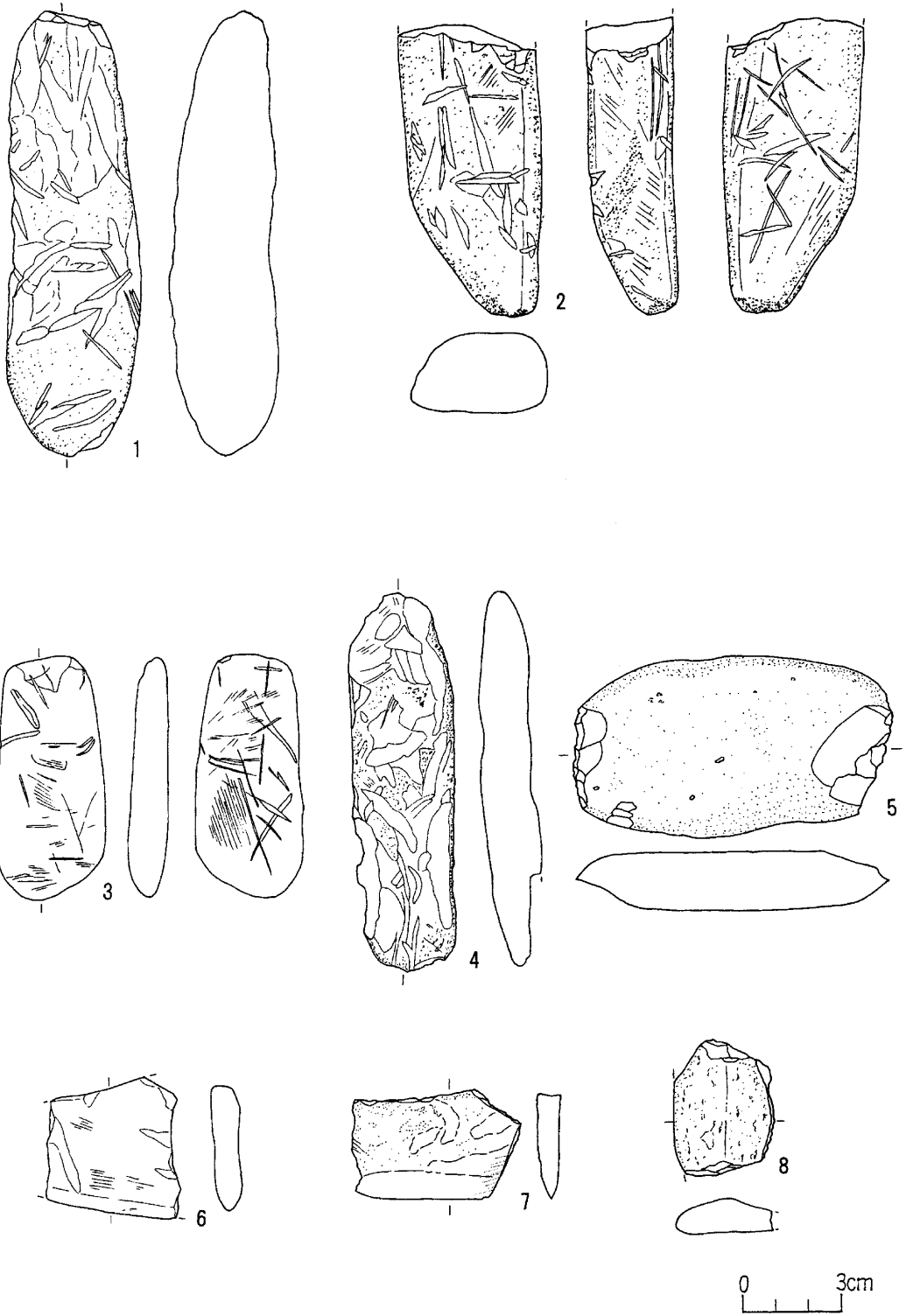
第58图 発掘区出土石器



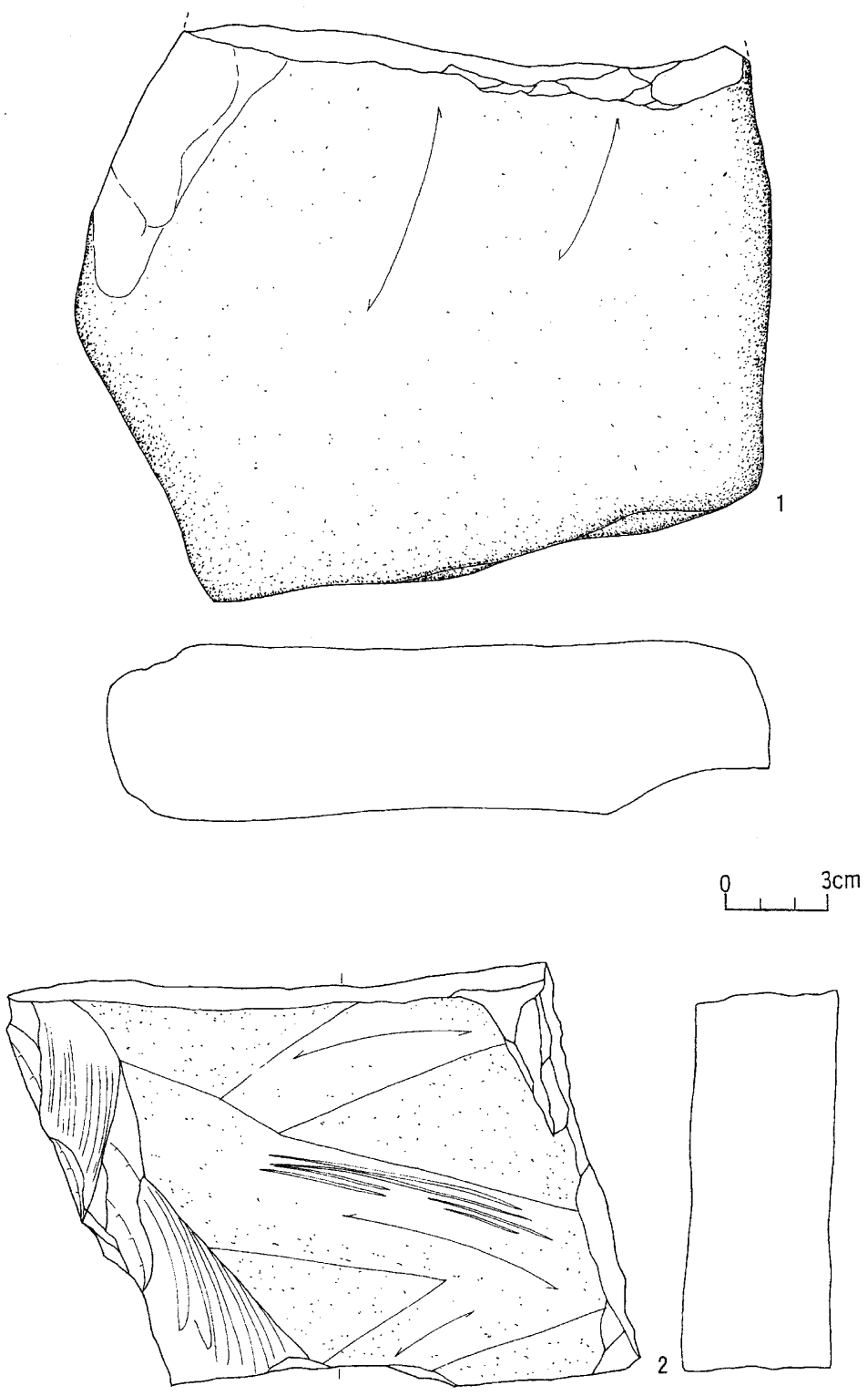
第59图 发掘区出土石器



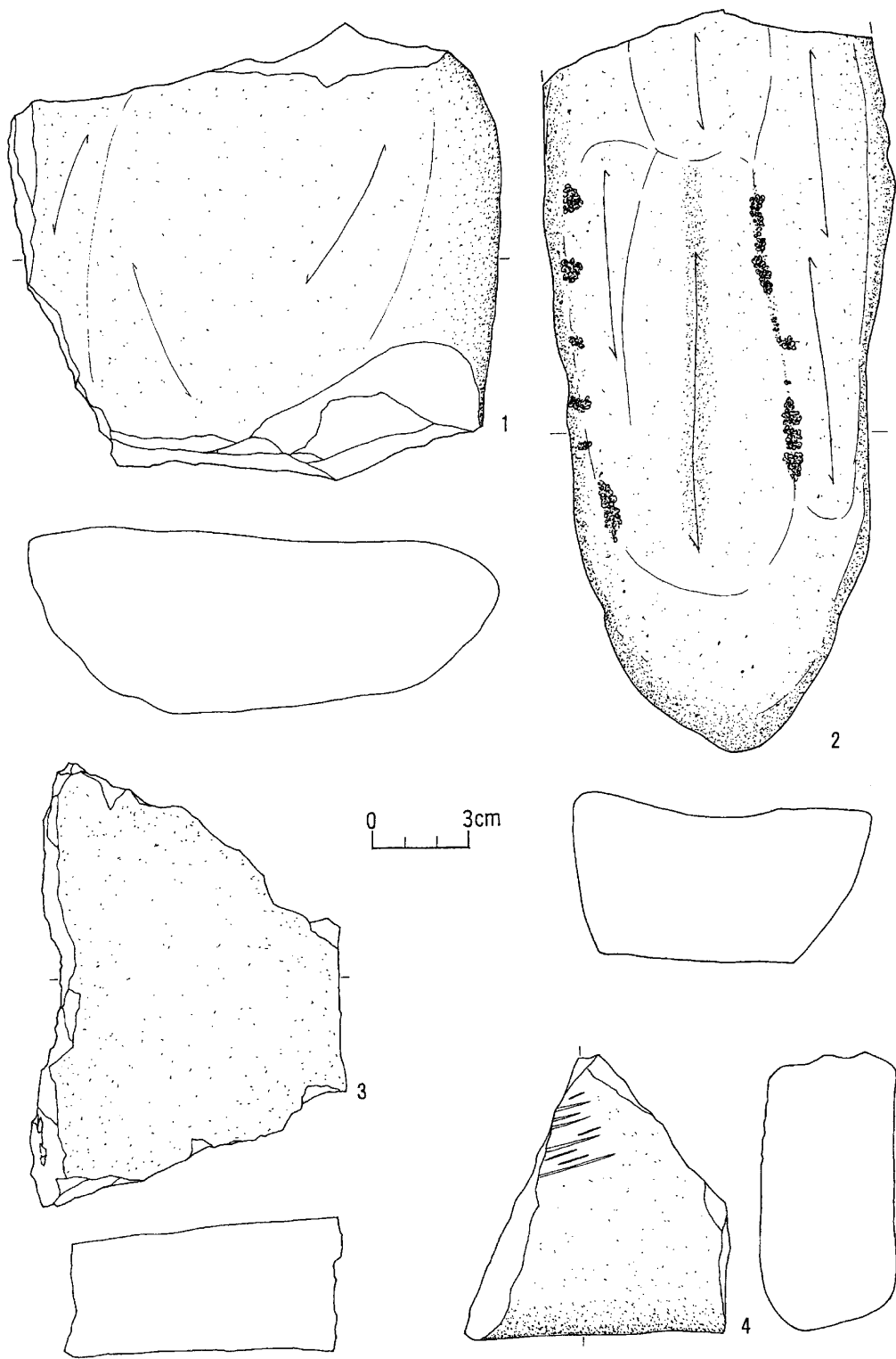
第60图 発掘区出土石器



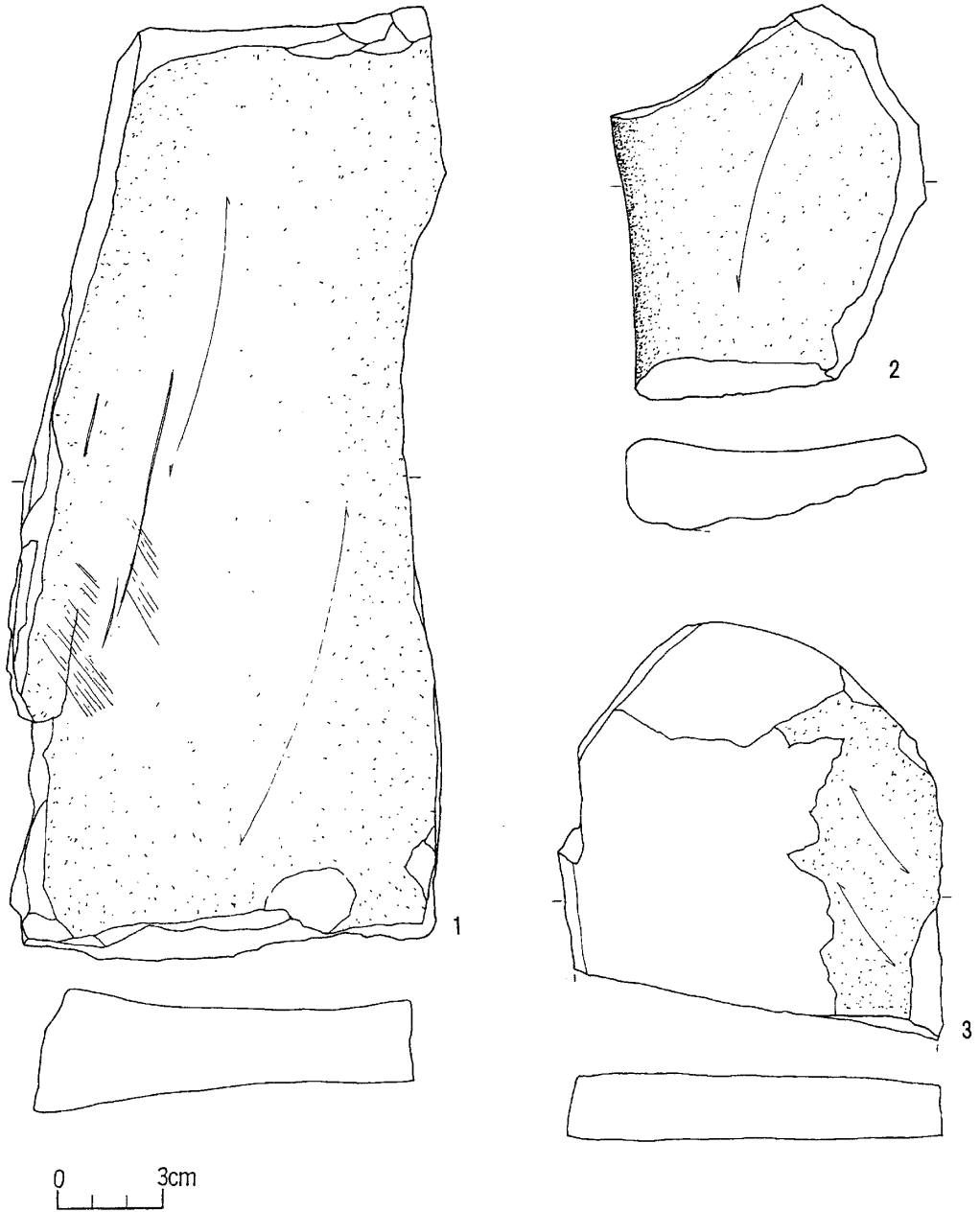
第61图 发掘区出土石器



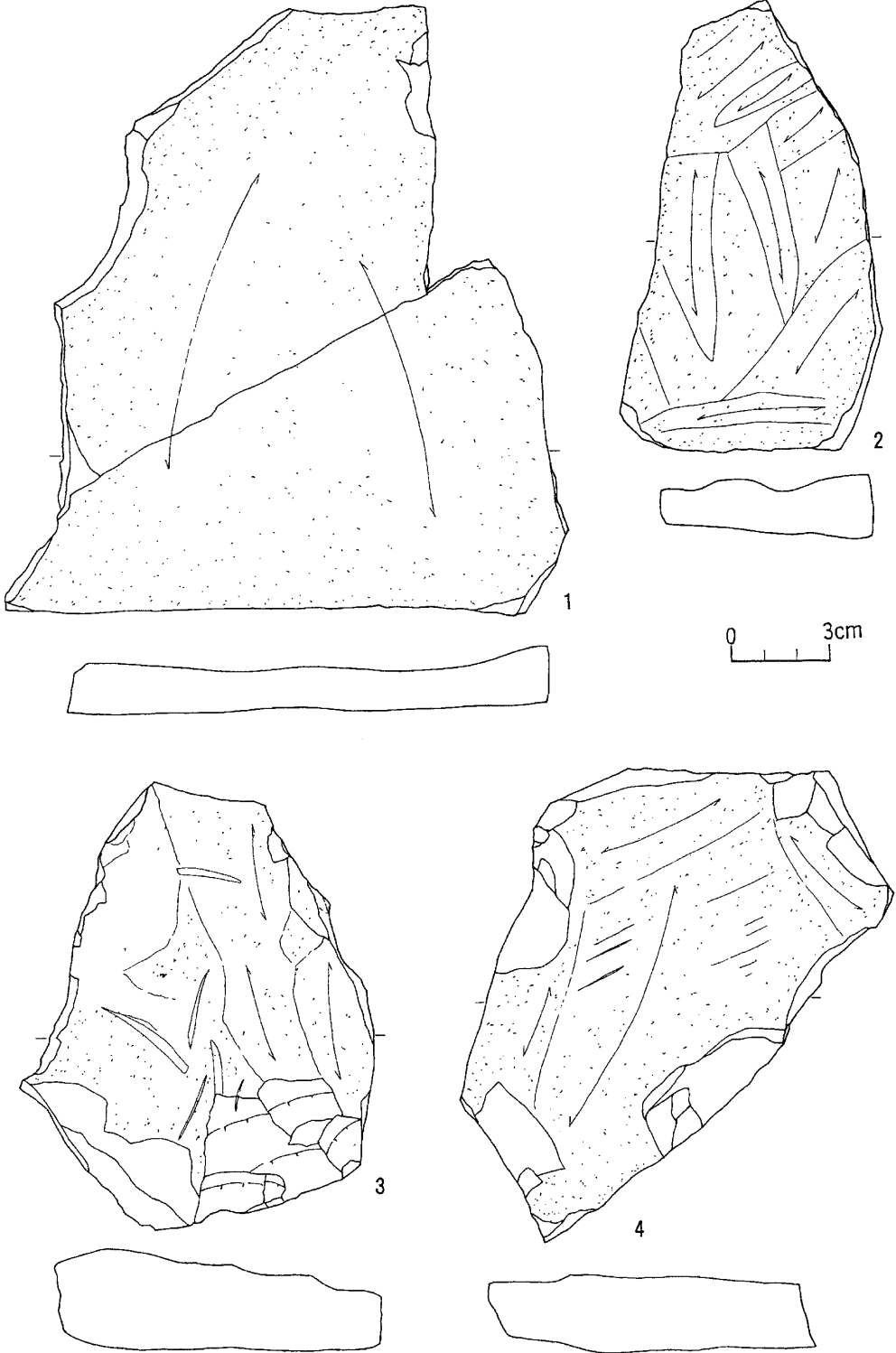
第62图 発掘区出土石器



第63图 发掘区出土石器



第64図 発掘区出土石器



第65图 发掘区出土石器

第IV章 ま と め

本遺跡は岐阜台地の南側斜面に位置する。包蔵地範囲確認調査の段階では出土遺物は少なかったが、調査を進めると表土中に定形的な石器が多く含まれていた。このため表土約30cmの層厚のうち10cmをスコップによる排土を行い、下位から手ぐわにより掘り下げることとした。遺物は土器2,070点、石器21,073点出土している。

本遺跡で検出した遺構は堅穴8軒、ピット9基である。時期を確定できるのは縄文早期東釧路Ⅲ式の4号、5号、6号の3軒。縄文前期末葉の押型文の2b号の1軒である。残る1号、2号、2a号、3号は時期不明であるが、1号は形態上の特徴、3号は1点であるが床面から土器が出土しているため縄文早期の可能性が高い。床面にステージ状の段差をもつ2a号は縄文中期の可能性がある。これらの堅穴は南面する急斜面を避け、その下方部の標高9～10mか標高5～7mの緩い面に構築されている。

包含層からは土器・石器等が出土している。土器は縄文早期が最も多く、この遺跡が早期主体であることを裏付けている。黒曜石の産地分析では4号、5号、6号出土の石器は置戸産が優位を占めている様である。

常呂町の所在遺跡の中で縄文早期の遺跡は岐阜第3遺跡、TK17遺跡、トコロ貝塚など常呂川やオホーツク海側を望む台地縁辺部にあるものが知られているが、本遺跡は南面する台地斜面に構築される例である。近接するTK54遺跡も早期の遺物が表採されており、第2図-2に示すとおり本遺跡は常呂湖から入り込む入り江に位置し、これらの遺跡は生業の場として利用されたのだろう。本遺跡出土の縄文早期の堅穴である4号堅穴は規模が直径約8mの大型で炉跡をもつものに対し5、6号などの規模は直径約3～4mと小型であり、炉跡をもたない。小型の住居は定住的な住居ではなく仮小屋等の施設と考えられる。しかし、今回調査された面積は1,200㎡の狭い区域である。堅穴の分布状況、地形の様子から縄文早期の小型堅穴はさらに調査区域の東側、大型堅穴は南側に存在する可能性が高い。

東釧路式では5点の完形品が出土した6号堅穴の土器が注目される。常呂町ではこれまでこの時期の土器は石刃鎌を伴ったトコロ14類土器が出土したトコロ貝塚、TK17遺跡の例があるだけであり、土器が伴うのは本住居が初めてとなる。この土器の器形は深鉢を呈し、上面観は隅丸方形と円形である。口縁部は平縁であり、底部は「く」字状に張り出すものとそうでないものがある。胴部文様は5点とも羽状を呈するが、第28図-1と第29図-2は縄の太さは異なるが同一原体を方向を変えて交互に施し、羽状としたもの。第28図-2は胴上部と下部では縄の太さが異なる。第28図-3は附加状縄文をもつものである。第29図-1は胴上部が同一原体を羽状に施すものの下部は異なる原体を交互に羽状に施す。口縁下部の無文部に多条の縄を用

いた撚紐を斜位に施した第29図-1・2と、横位に施した第28図-3がある。3点とも意識して無文部に撚紐が押捺されている。これらの土器は羽状縄文の施文を基本とした土器といえる。また、堅穴の床面から出土した無文土器はこの堅穴に伴うと思われる。

石器の大部分も縄文早期と思われるが、特に第41図-1の石刃鏃、同25~36、第25図-6の柳葉形を呈した長身鏃、第55図の石刃、第56図1~11の彫器、第18図-6、第20図-10、第61図-6・7の石鋸はこの時期の所産である。

遺構では3号堅穴から出土した第18図-7の刻線石器がある。用途は不明であるが装身具の可能性もある。また、5号堅穴から出土した第26図の石錘は扁平ではなく、ぶ厚い礫の端部を打ち欠いた独特のものである。

縄文前期末葉の平底押型文土器の堅穴も初めての発見である。この時期の遺構としては栄浦第一遺跡、常呂川河口遺跡で発見されているが、いずれも標高約3~4mの低地にあり、複数の石囲み炉をもつことから、住居とは考えられず屋外の作業場的な機能があったものと推測される。本遺跡発見の堅穴は直径約9mの大型であり、詳細な形態は不明であるが不整形を呈すると思われる。縄文前期の堅穴は概して大型が多いが、平底押型文もまた形態を含めて同様なのであろう。

本遺跡は主に縄文早期東釧路Ⅲ式、前期末葉の平底押型文（常呂川河口押型文Ⅱ群）の段階に利用され続縄文、擦文期ではほとんど利用されず、同一の岐阜台地であって北側と南側では時期によって占地が異なることが明らかとなった。

（武田 修）

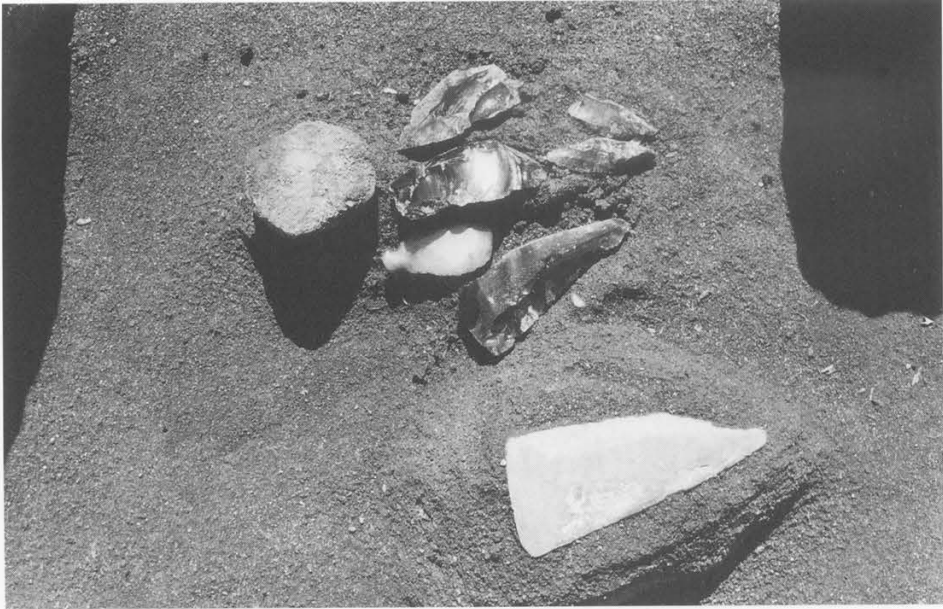
版 图



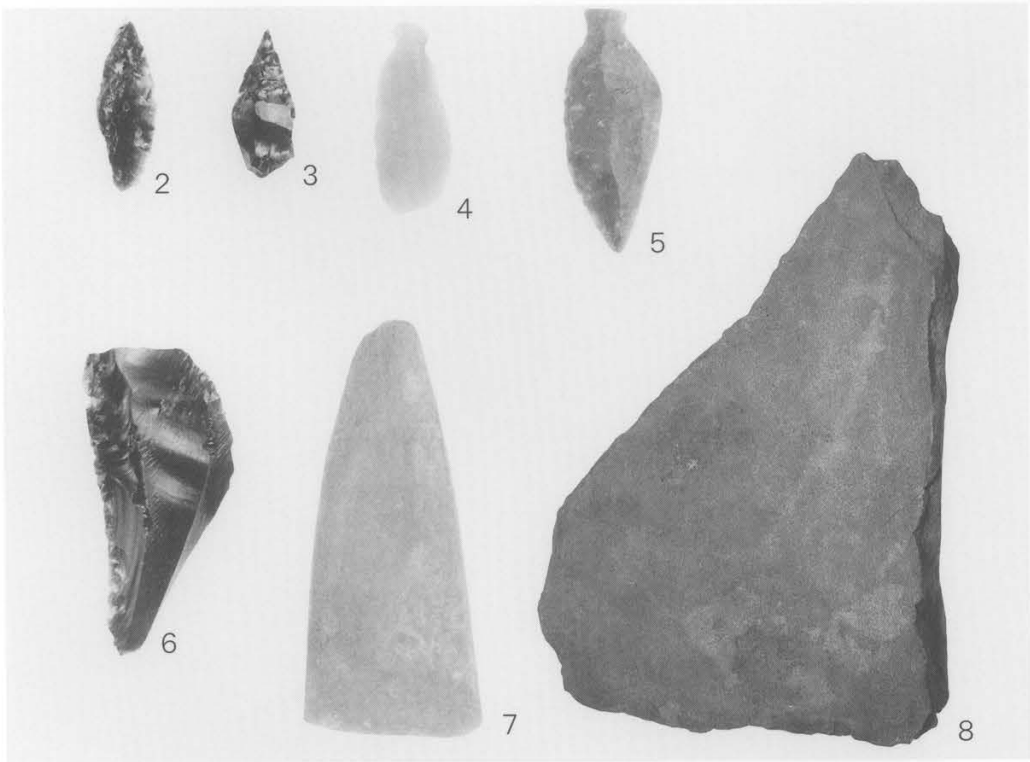
1. 1号竖穴遺物出土状况



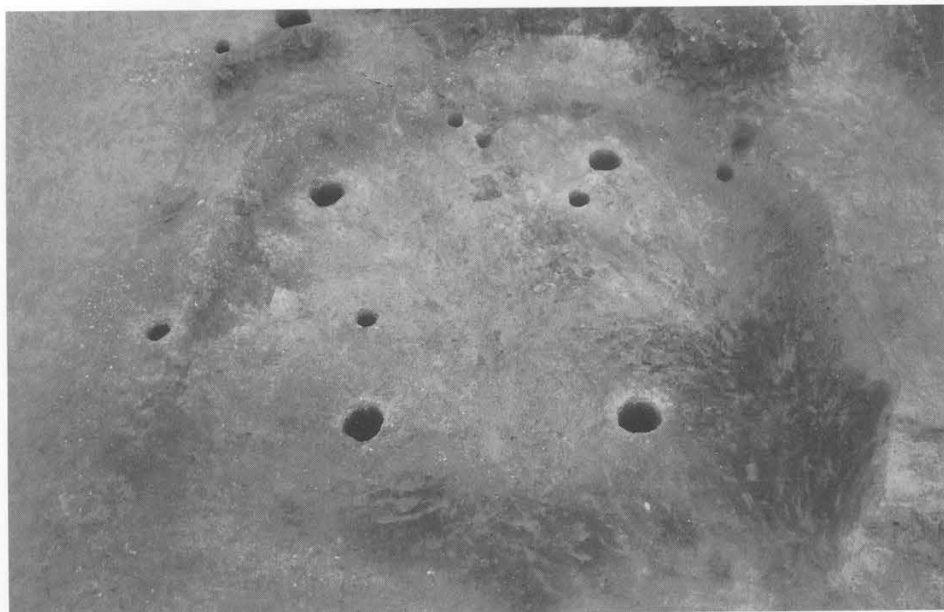
2. 1号竖穴



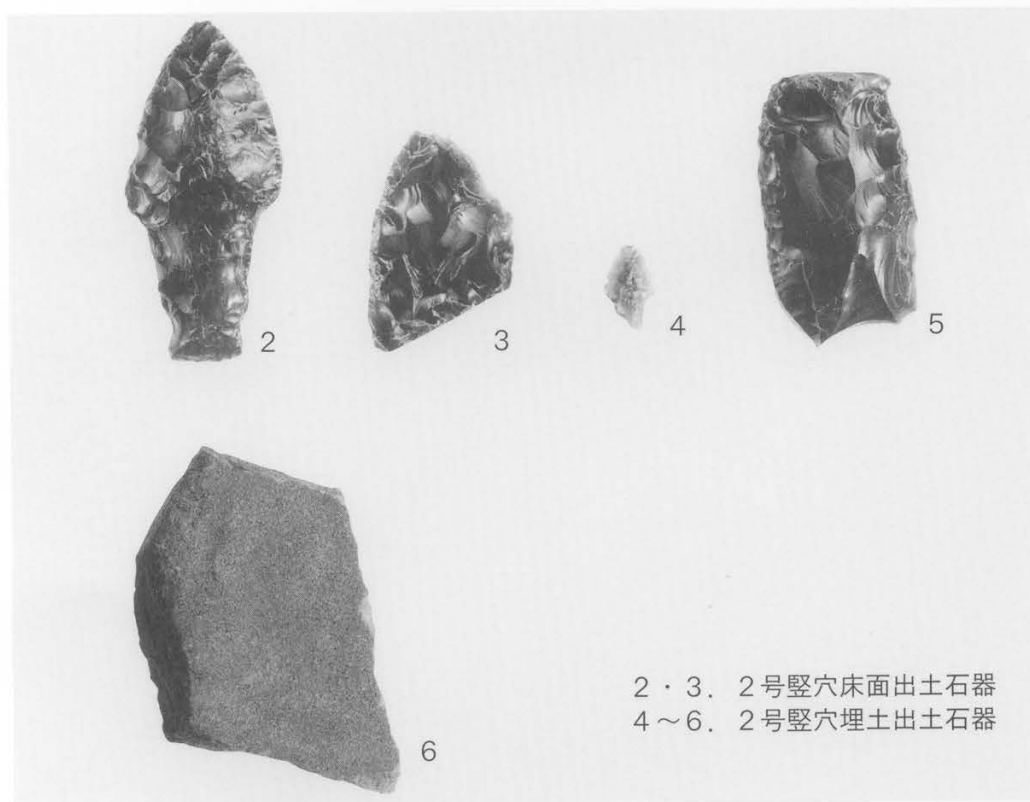
1. 1号竖穴床面石器出土状况



2~4·6·7. 1号竖穴床面出土石器
5·8. 1号竖穴埋土出土石器



1. 2号竖穴



2·3. 2号竖穴床面出土石器
4~6. 2号竖穴埋土出土石器



1. 2号·2a号竖穴



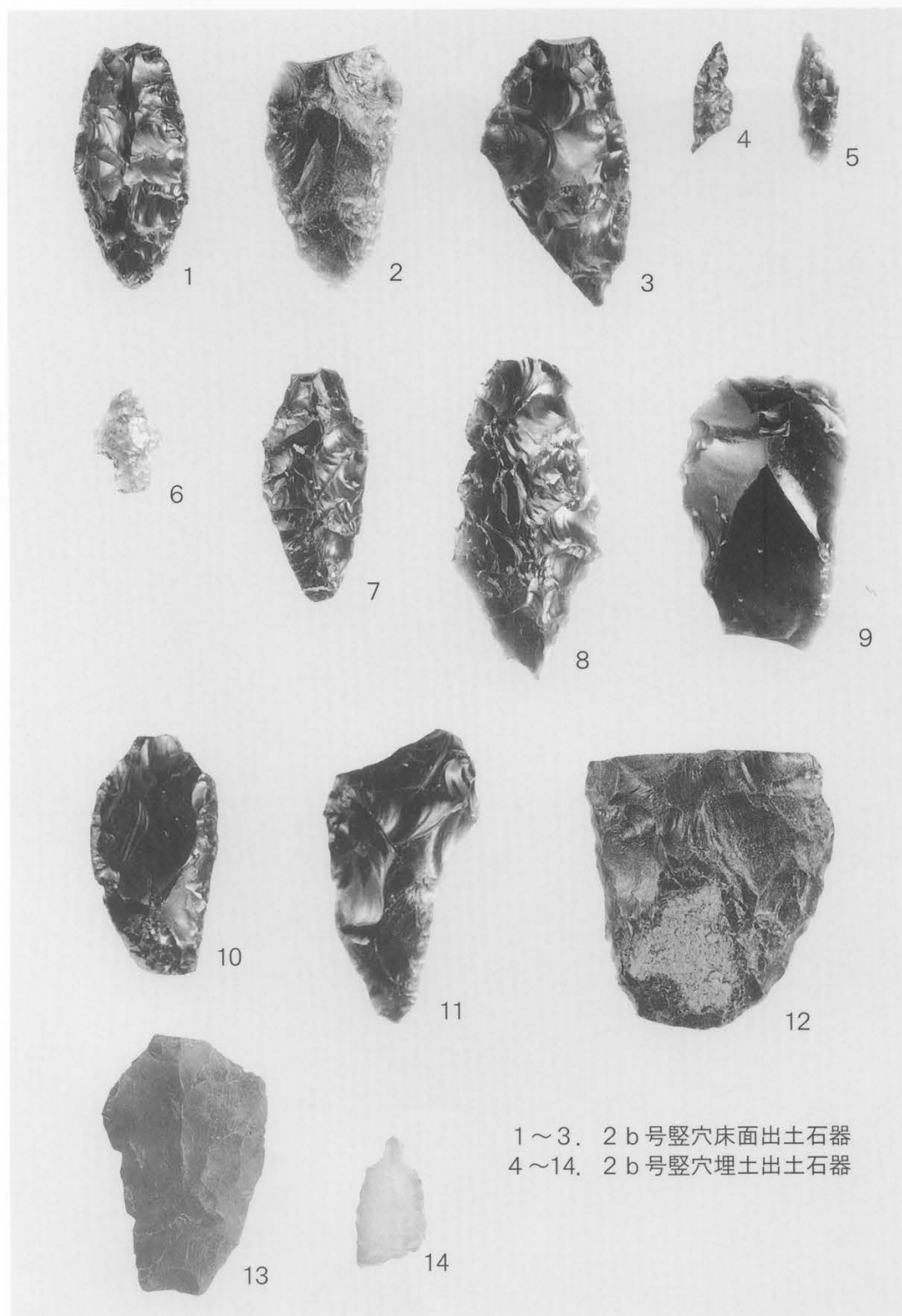
2. 2a号竖穴炭化材検出状況



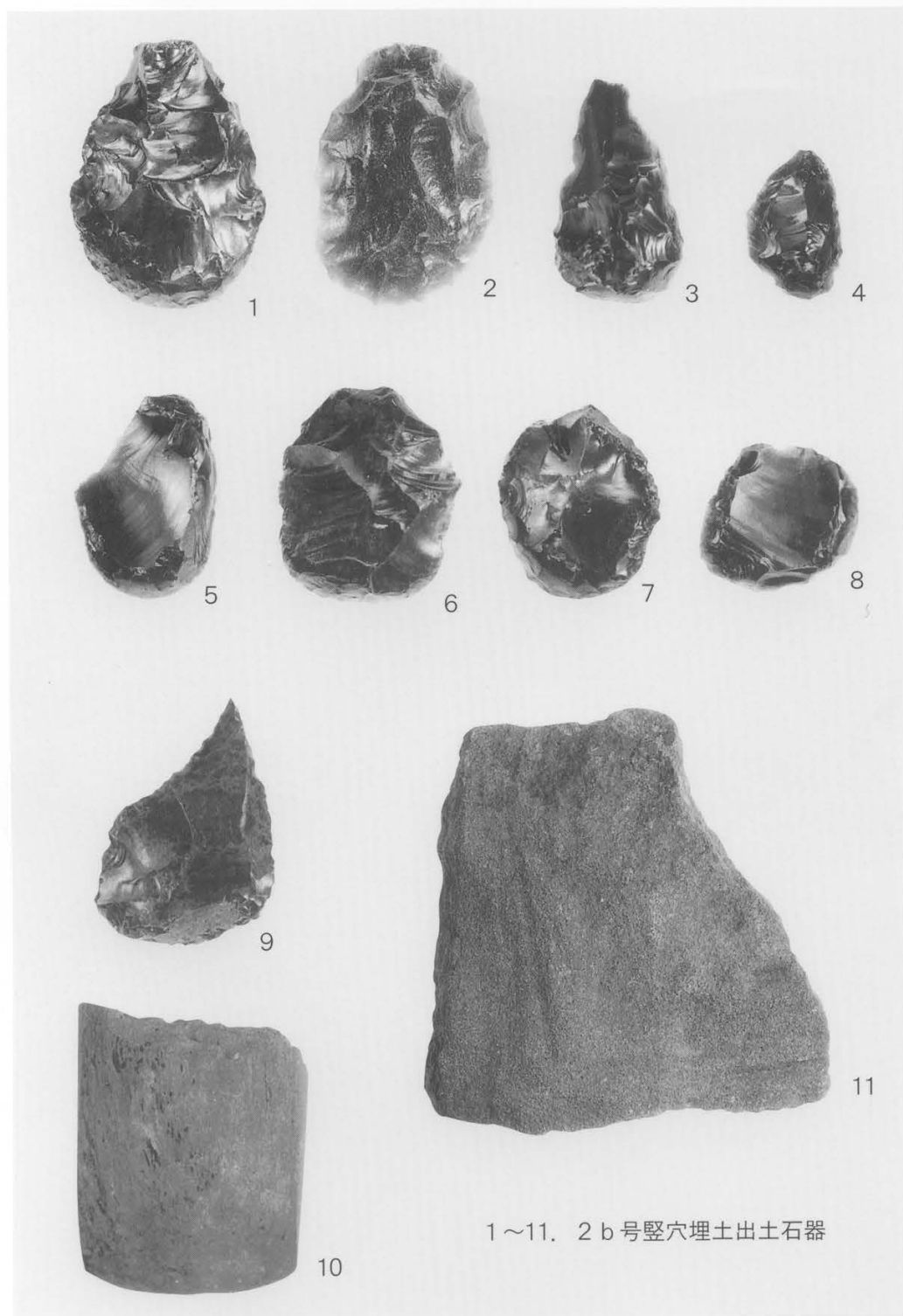
1. 2 a号竖穴床面出土石器
2·3. 2 a号竖穴埋土出土石器



4. 2 b号竖穴



1~3. 2 b号竖穴床面出土石器
4~14. 2 b号竖穴埋土出土石器



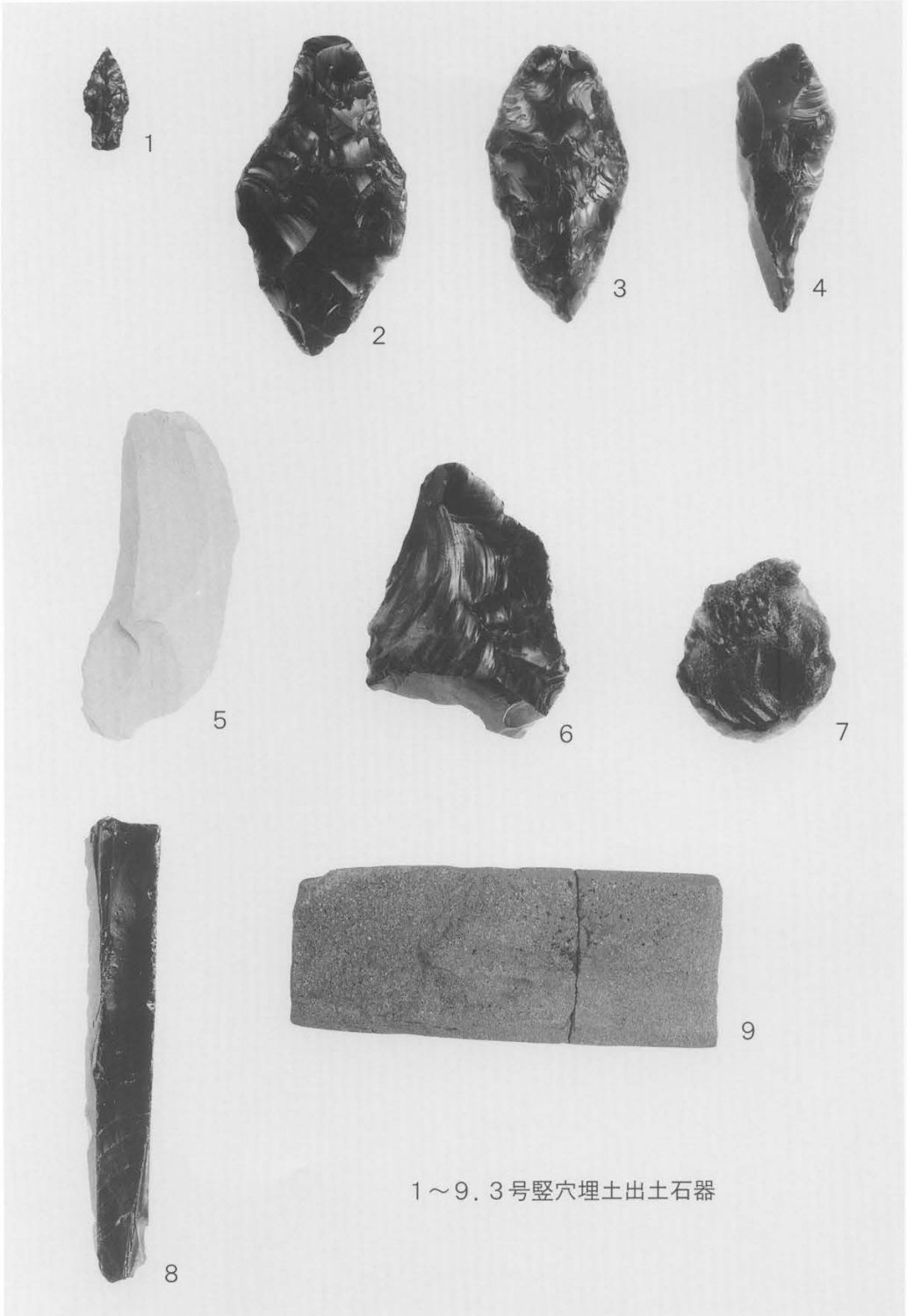
1~11. 2b号竖穴埋土出土石器



1. 3号竖穴



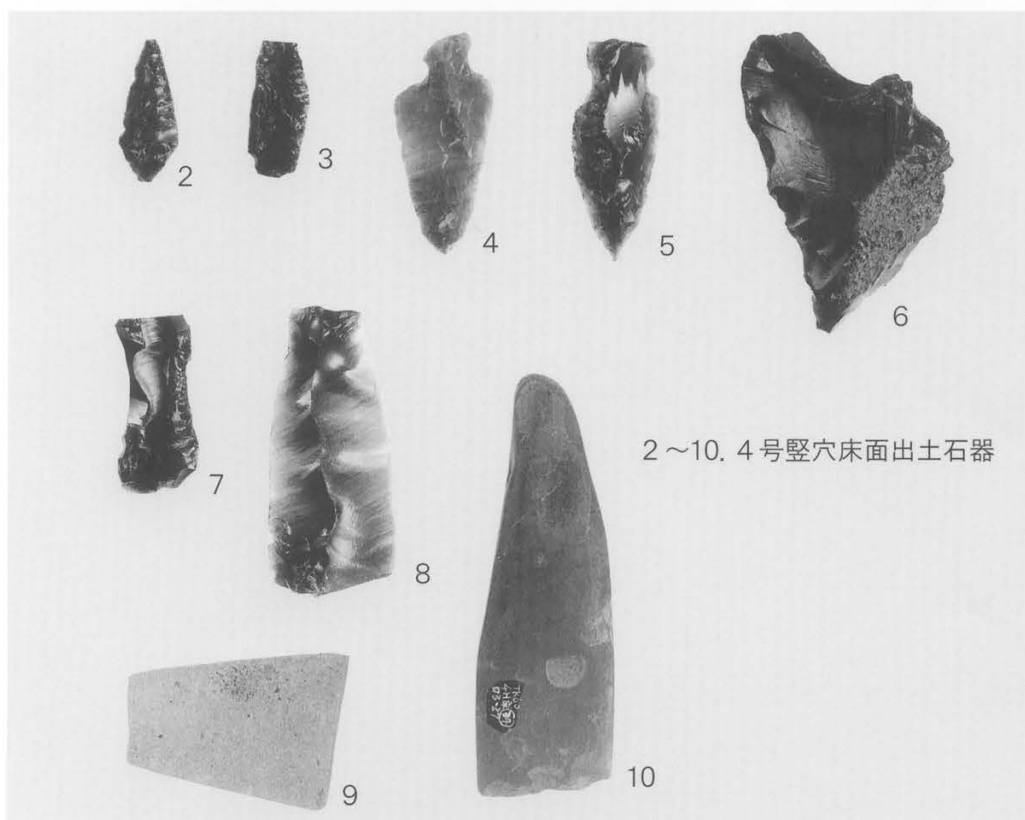
2. 3号竖穴埋土石器出土状况



1~9. 3号竖穴埋土出土石器



1. 4号竖穴



2~10. 4号竖穴床面出土石器



1



2



3



4



5



6



7



8

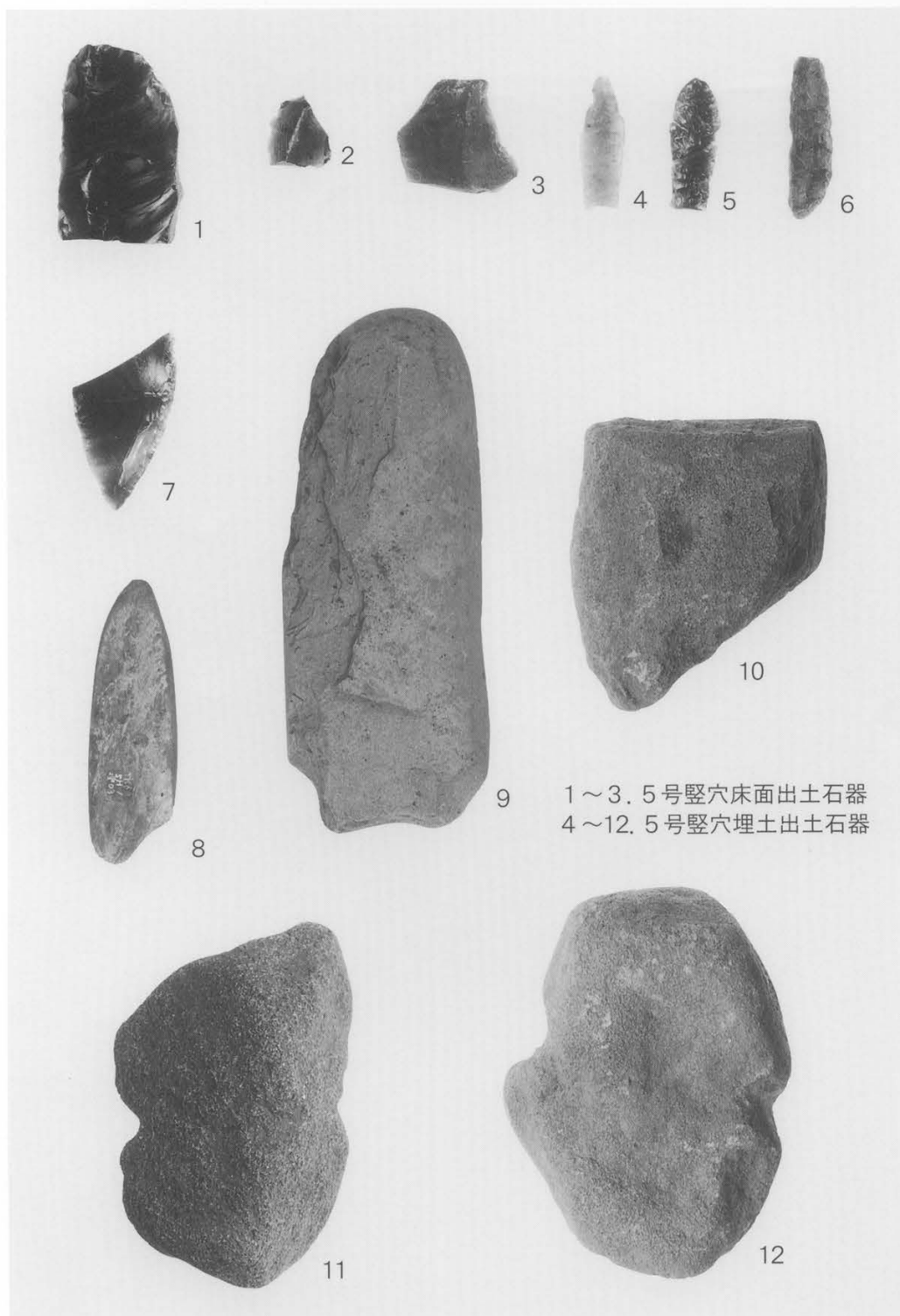
1~4. 4号竖穴床面出土石器
5~8. 4号竖穴埋土出土石器



1. 5号竖穴遺物出土状况

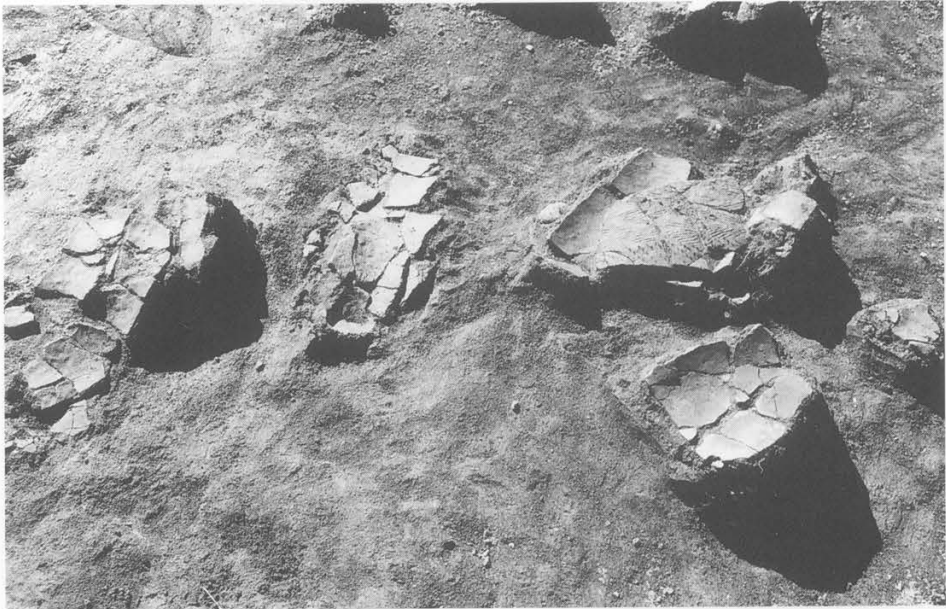


2. 5号竖穴





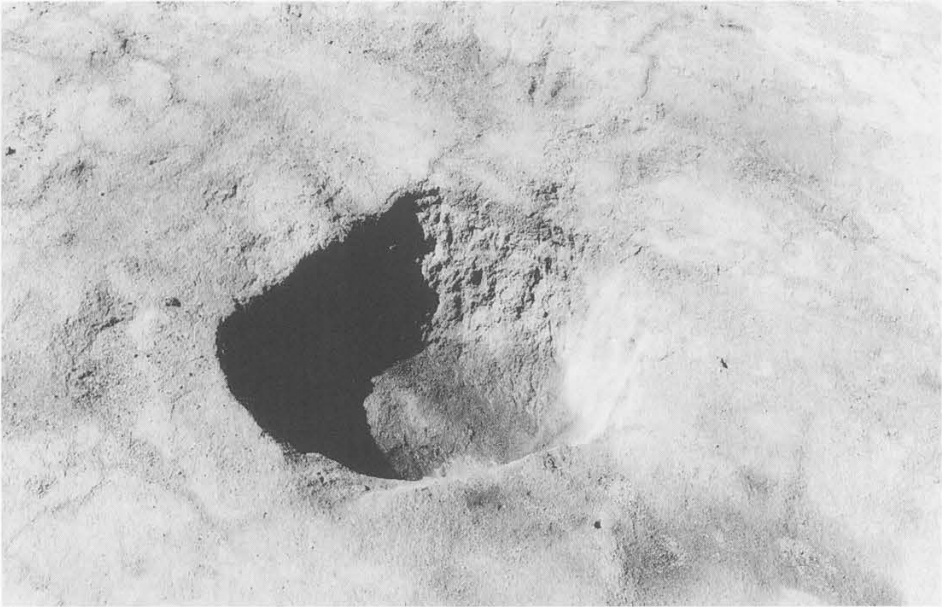
1. 6号竖穴



2. 6号竖穴床面土器出土状况



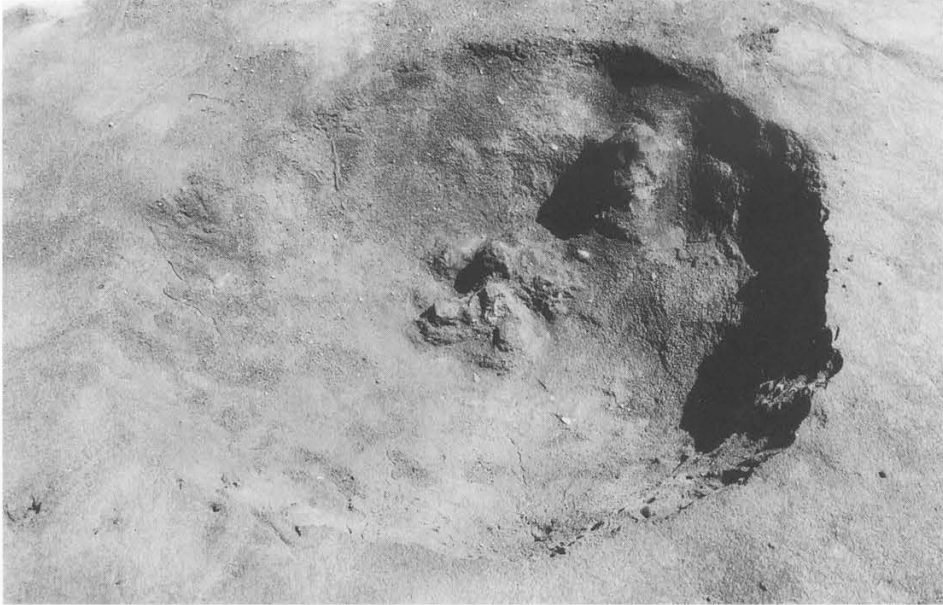
1. 6号竖穴床面出土土器
2~5. 6号竖穴埋土出土土器



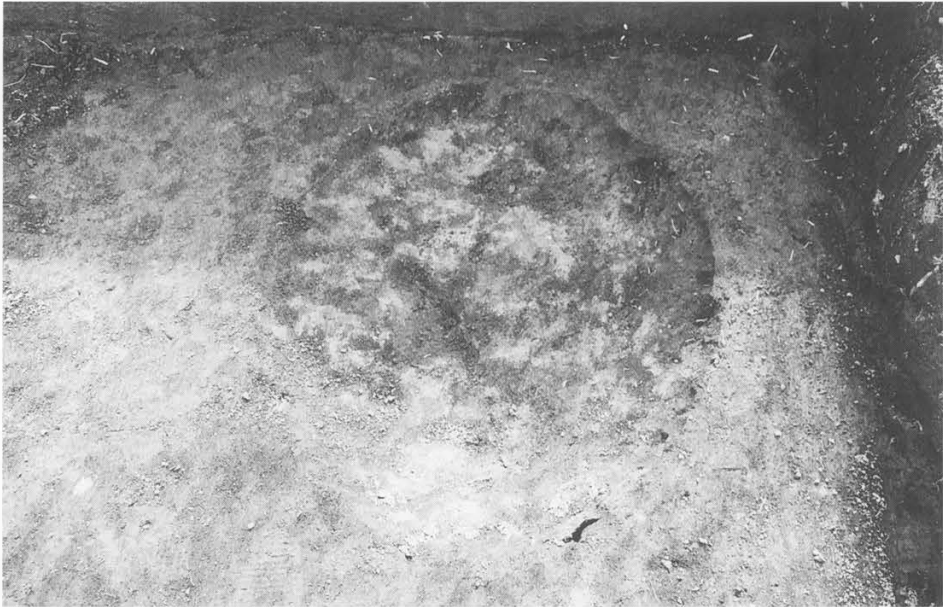
1. ピット 2



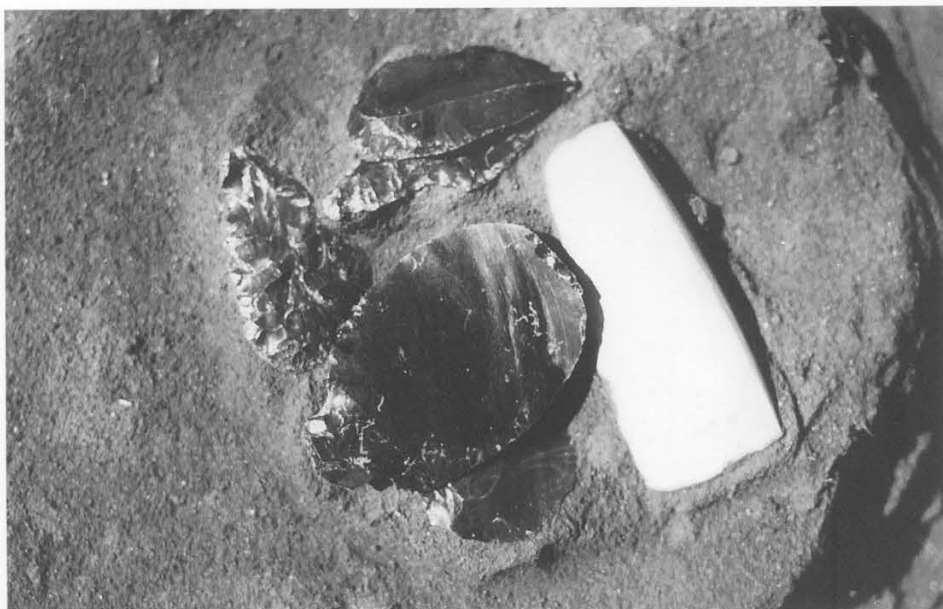
2. ピット 3



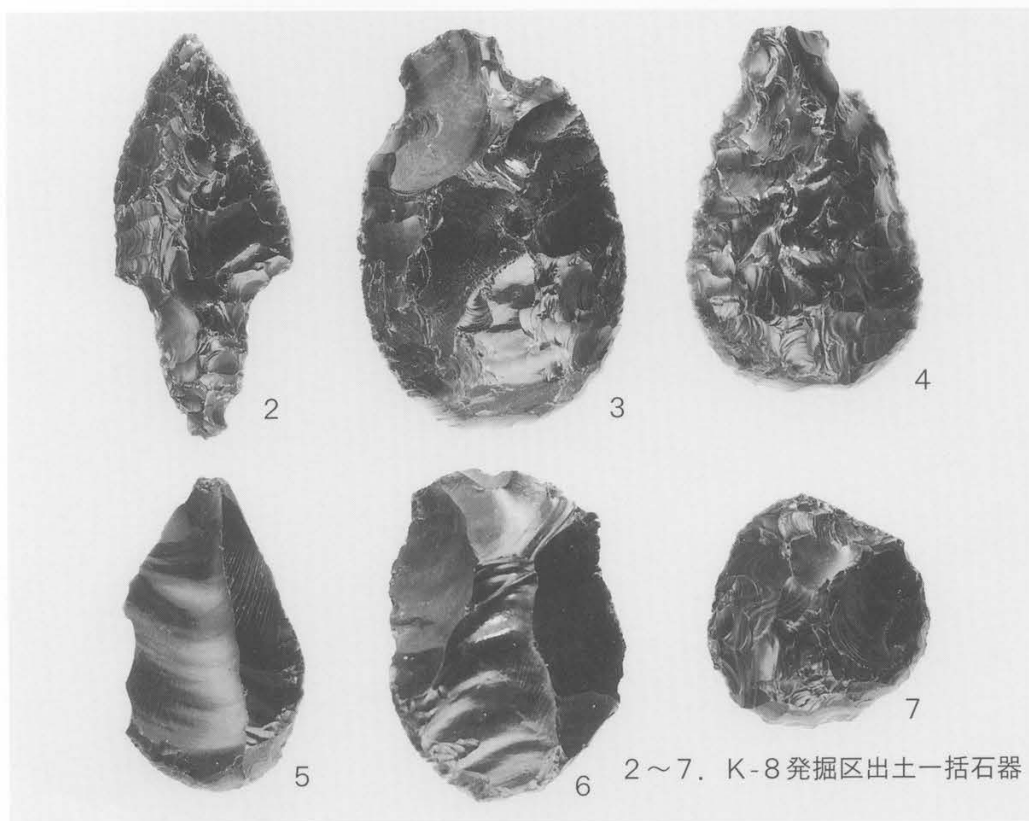
1. ピット4



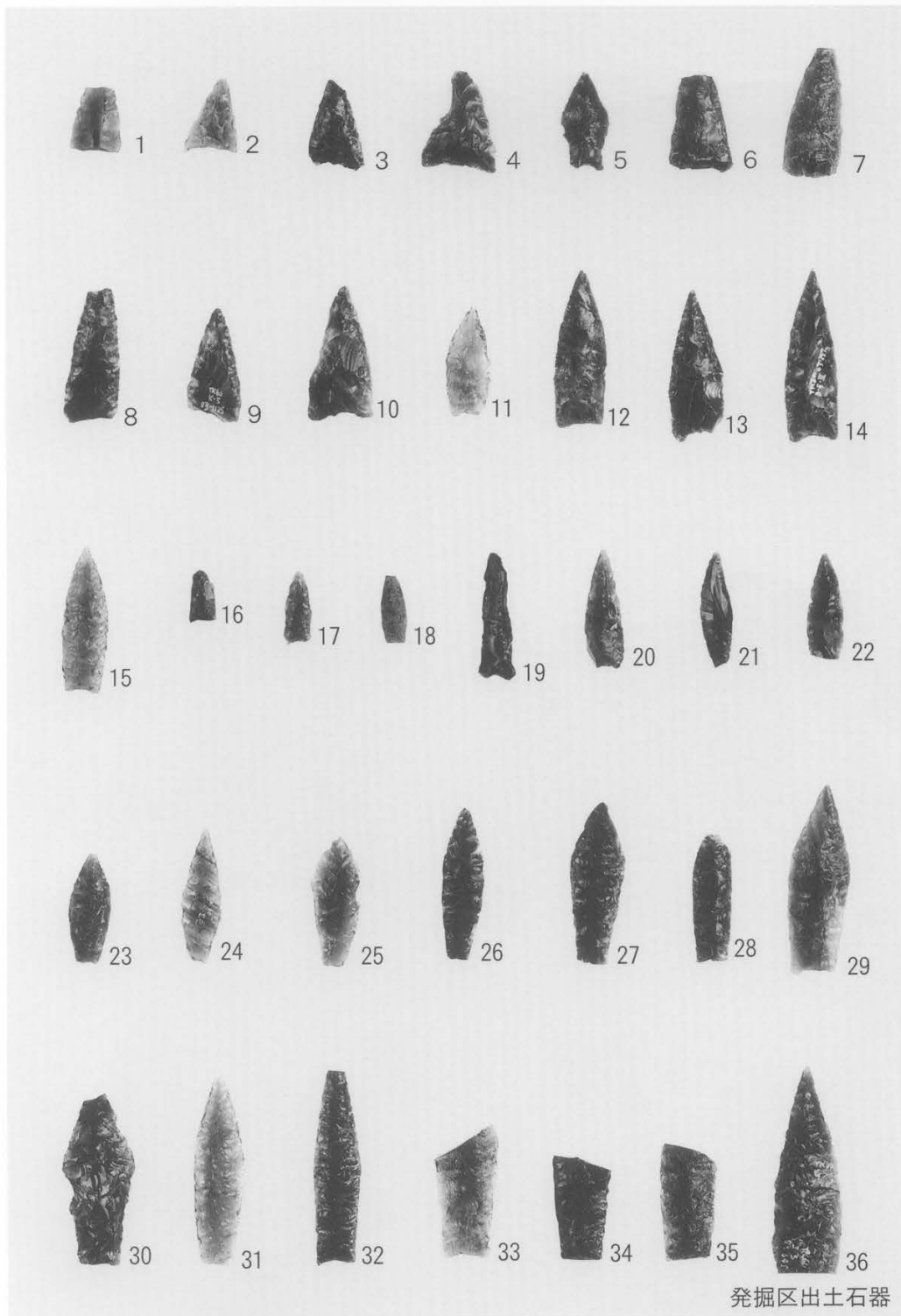
2. ピット7

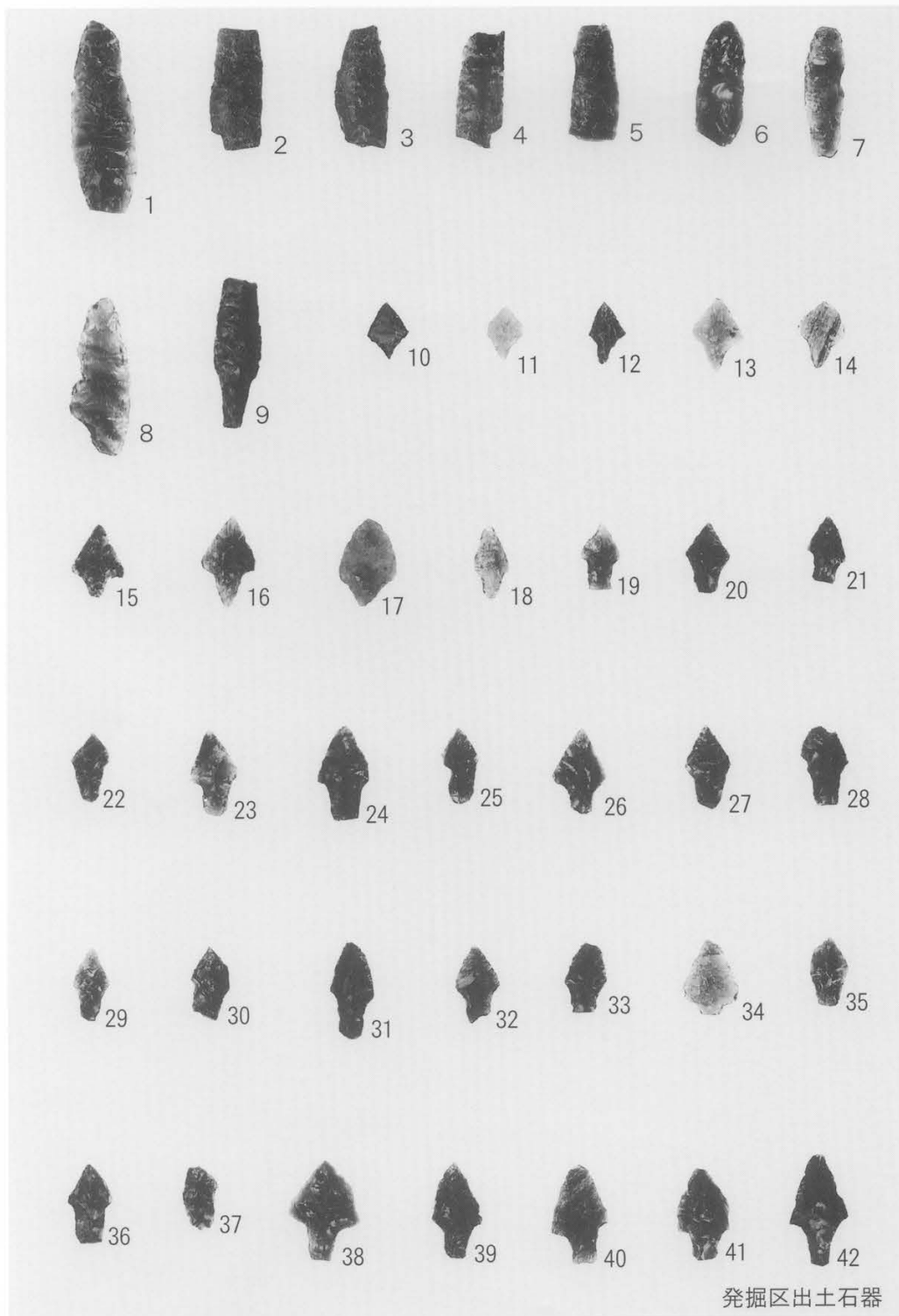


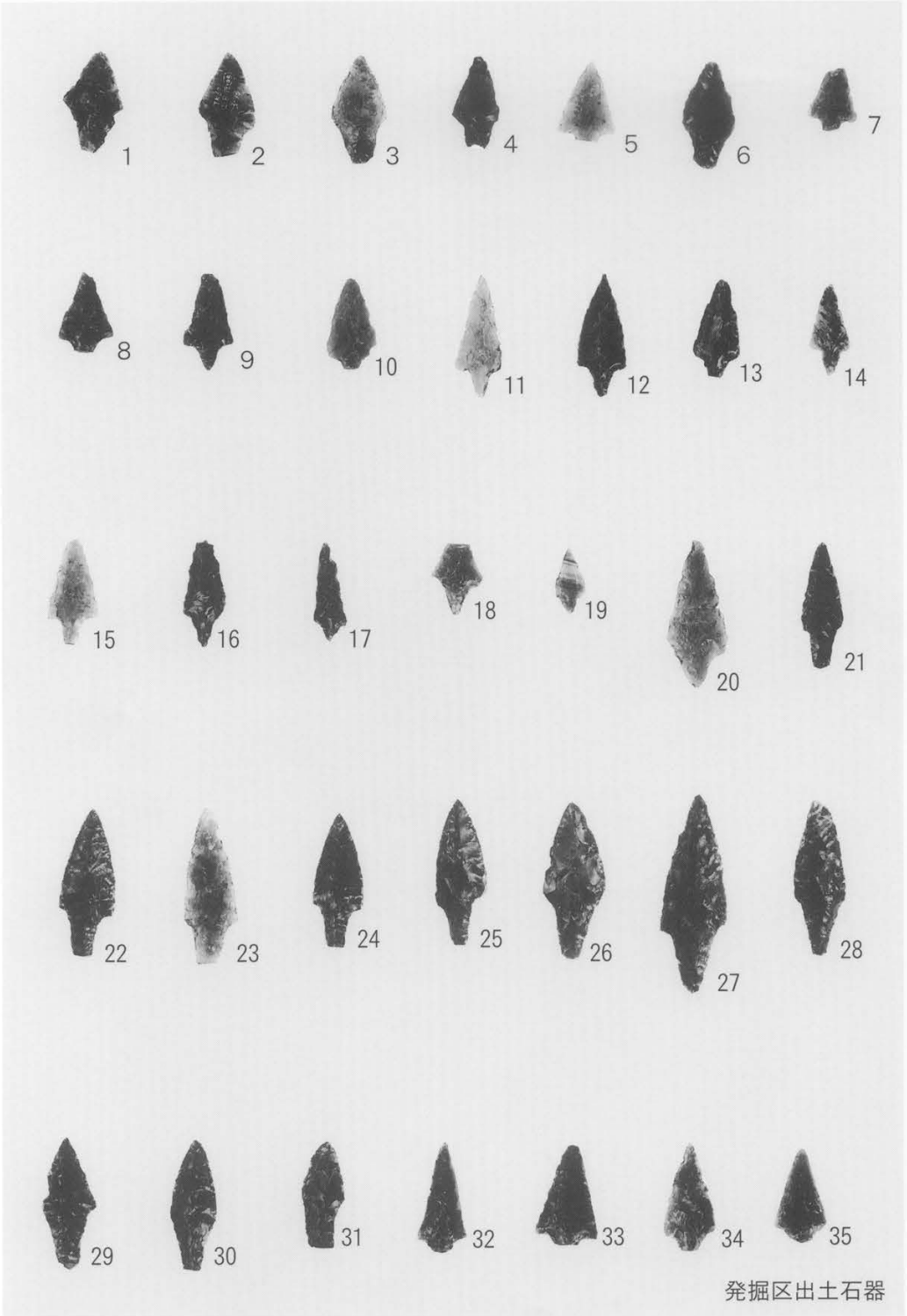
1. K-8 発掘区一括石器出土状況



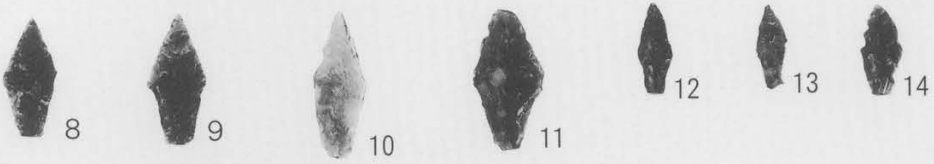
2~7. K-8 発掘区出土一括石器



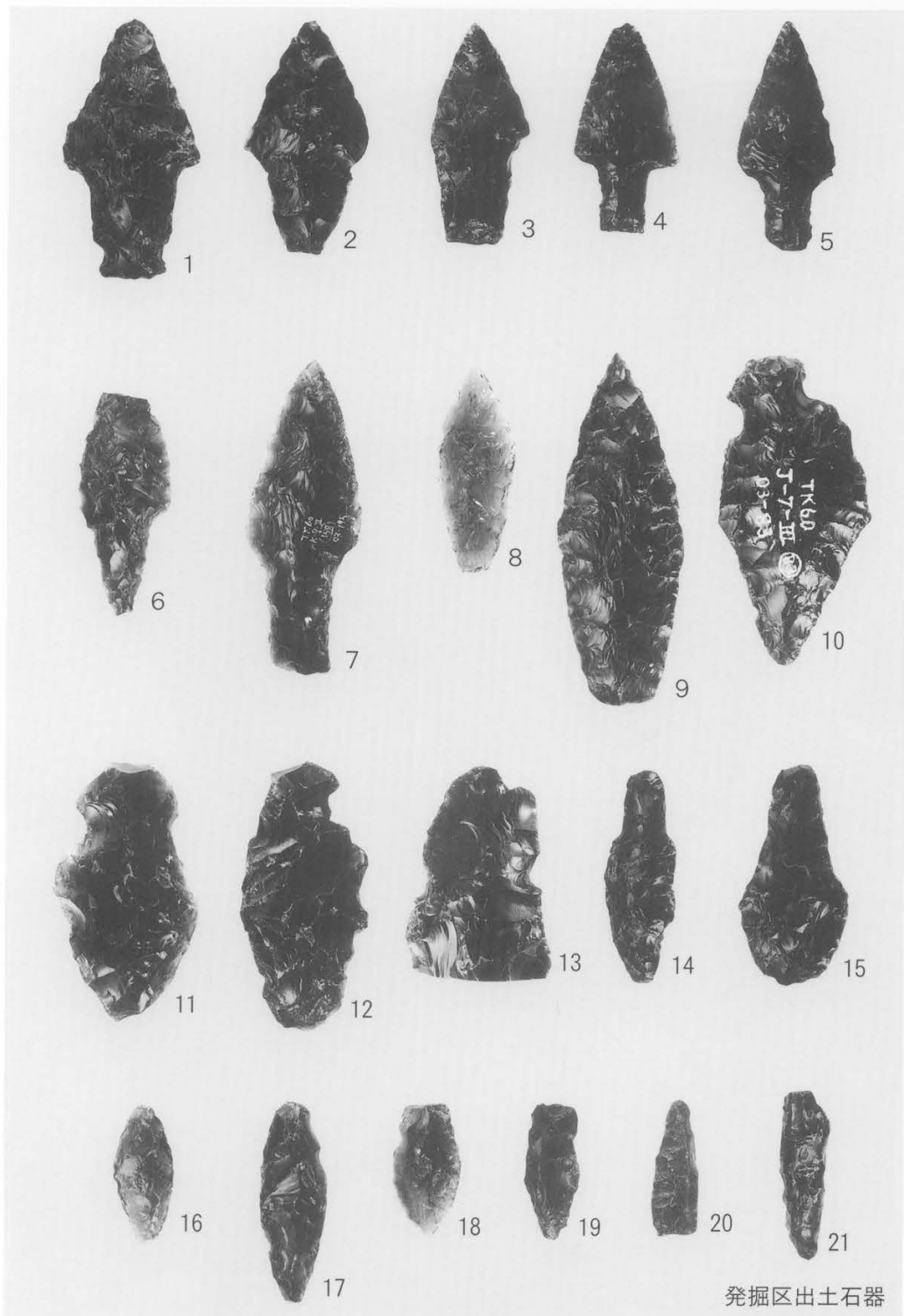




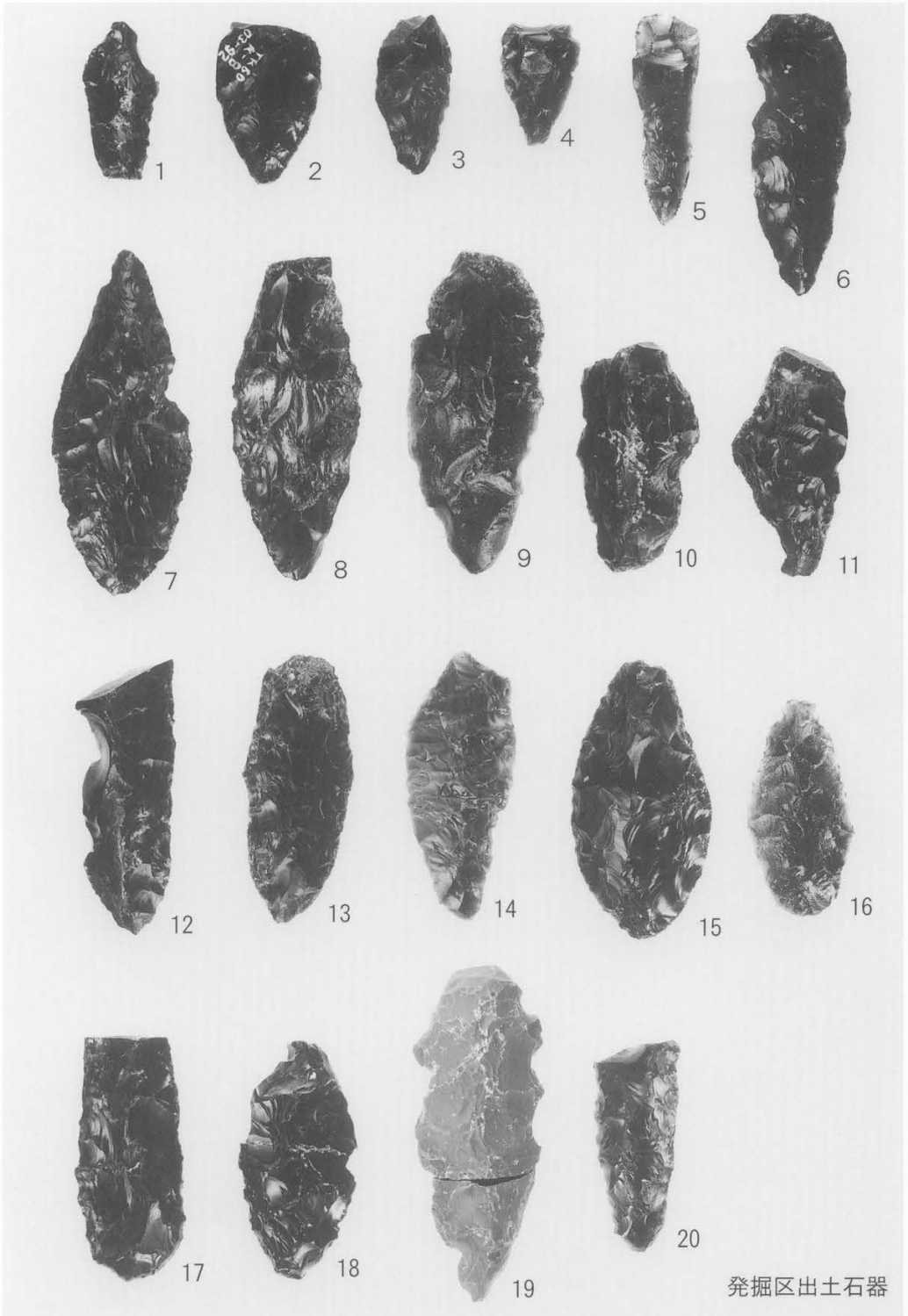
发掘区出土石器



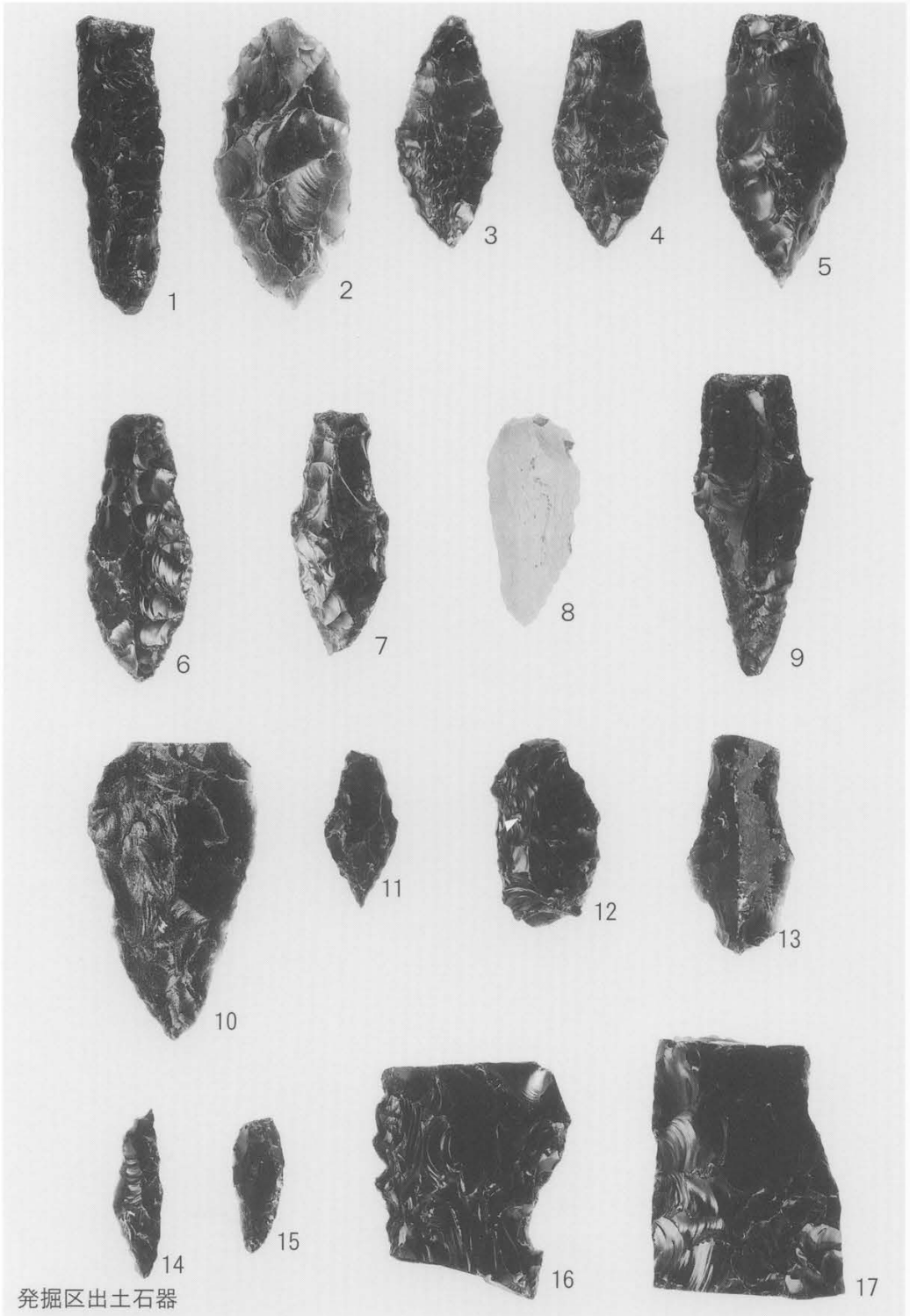
发掘区出土石器



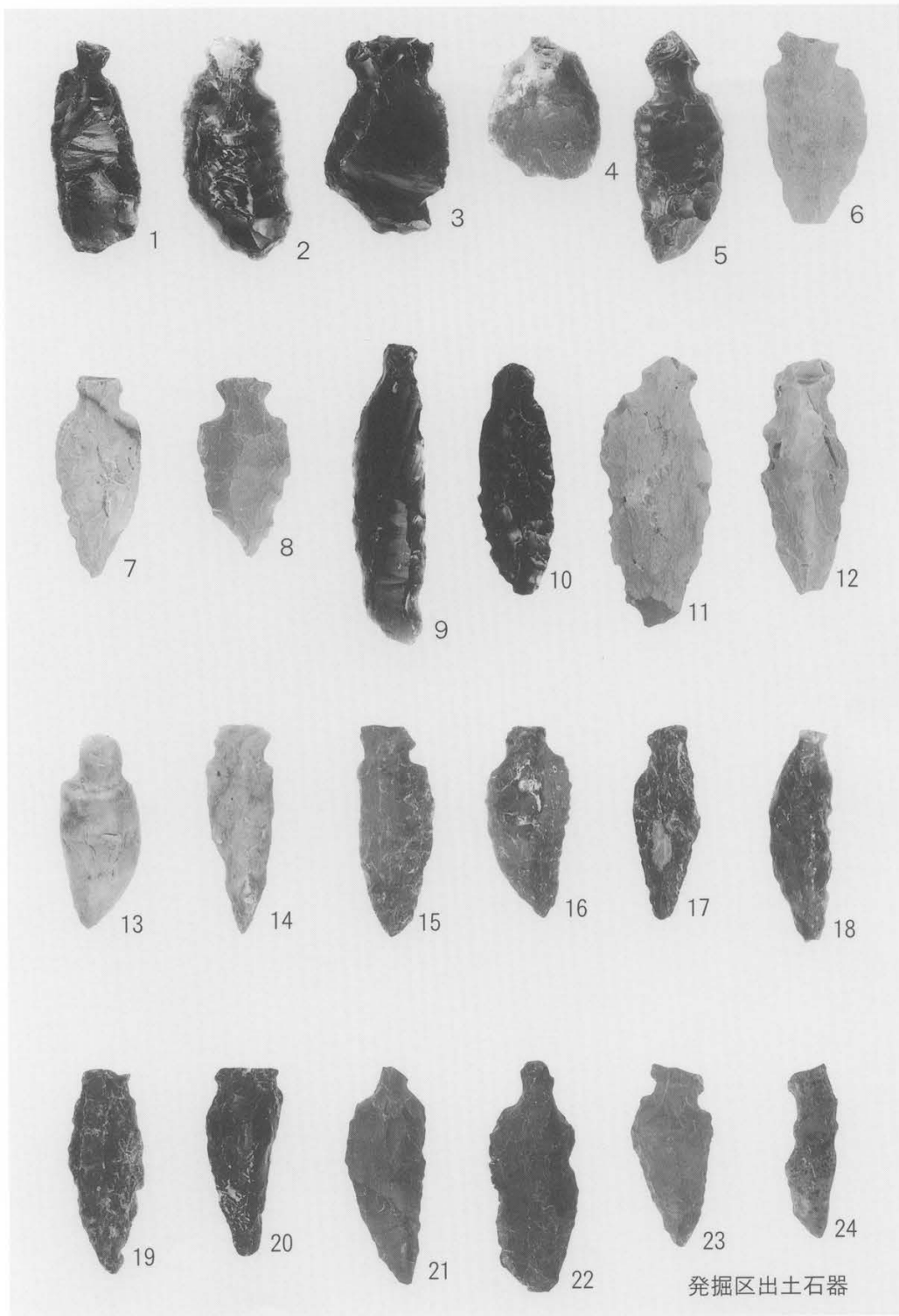
発掘区出土石器

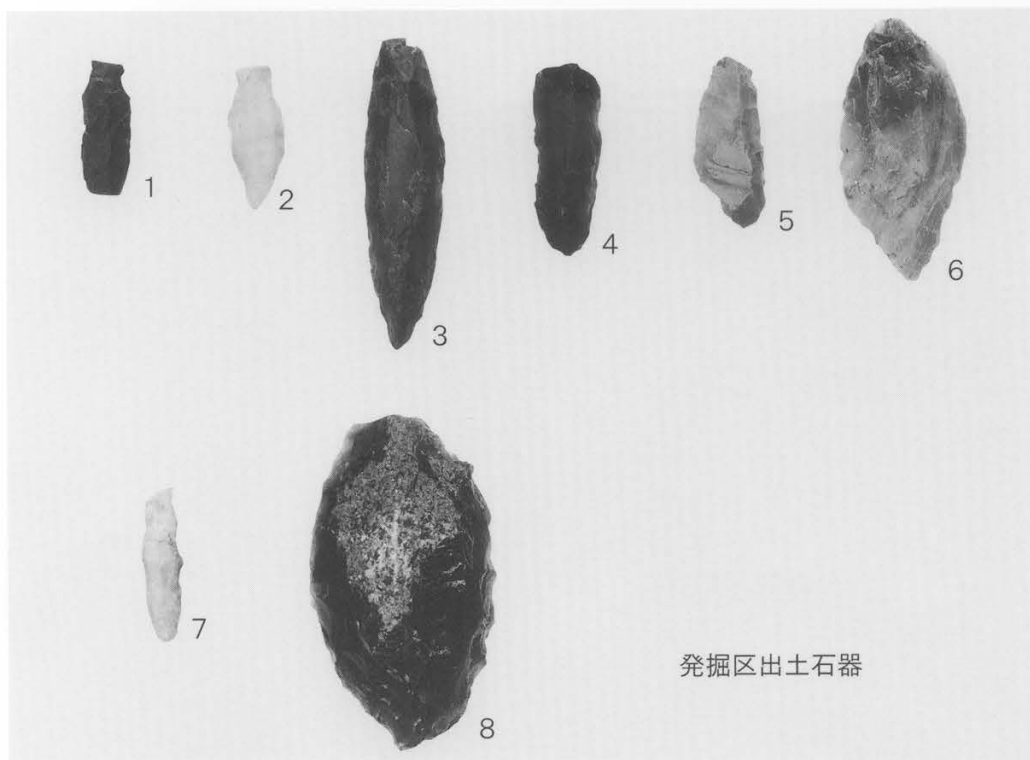


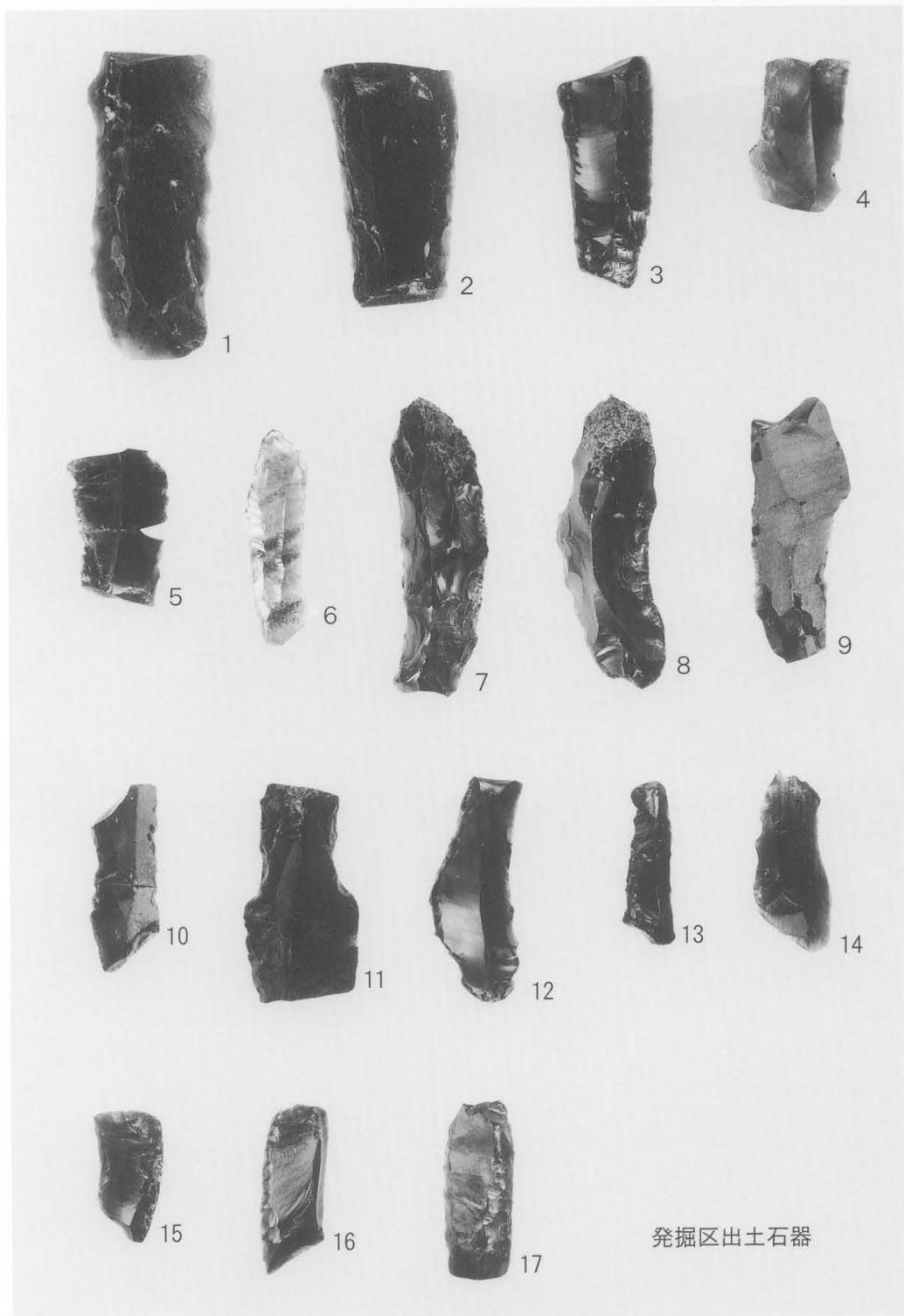
发掘区出土石器



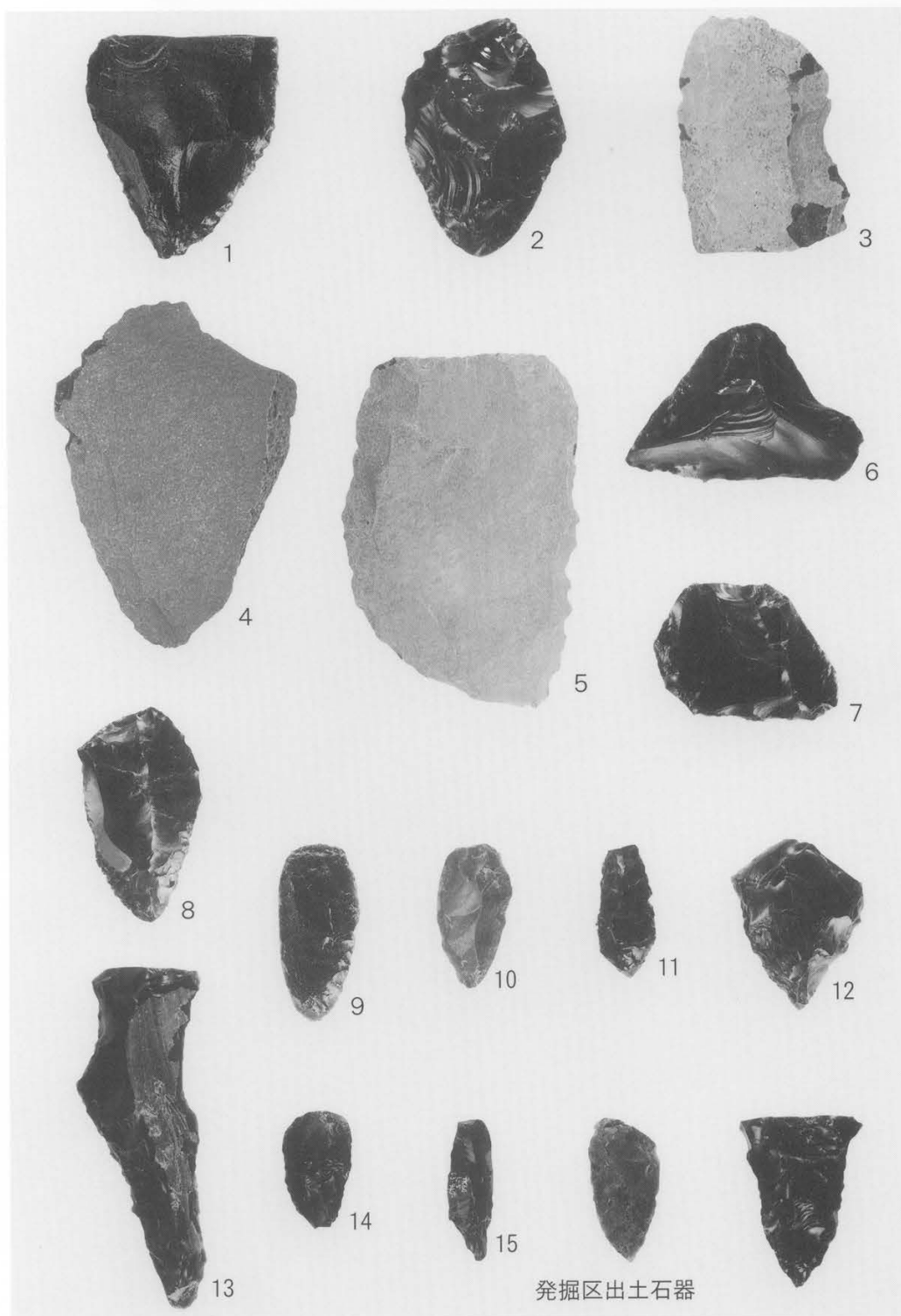
发掘区出土石器



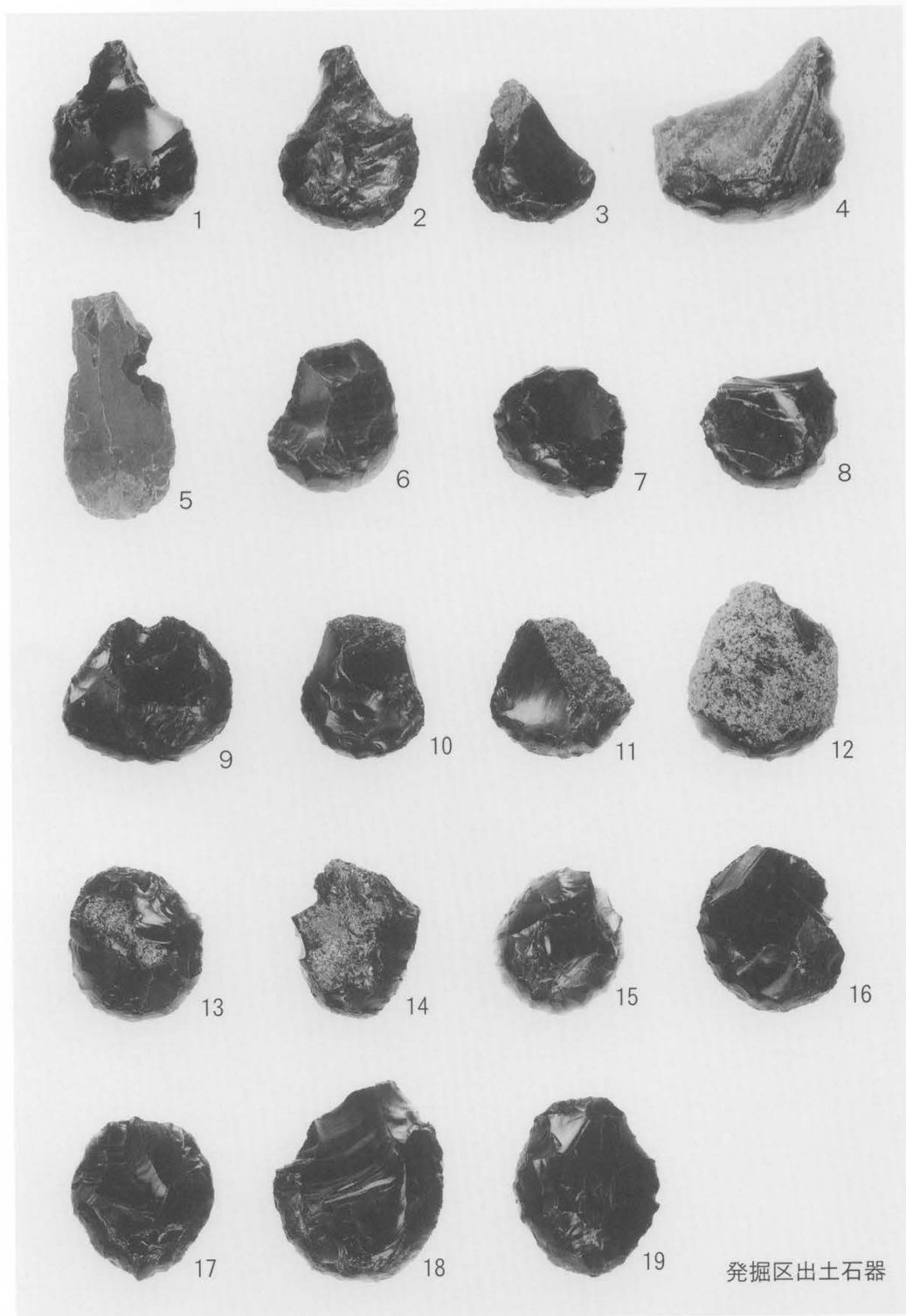


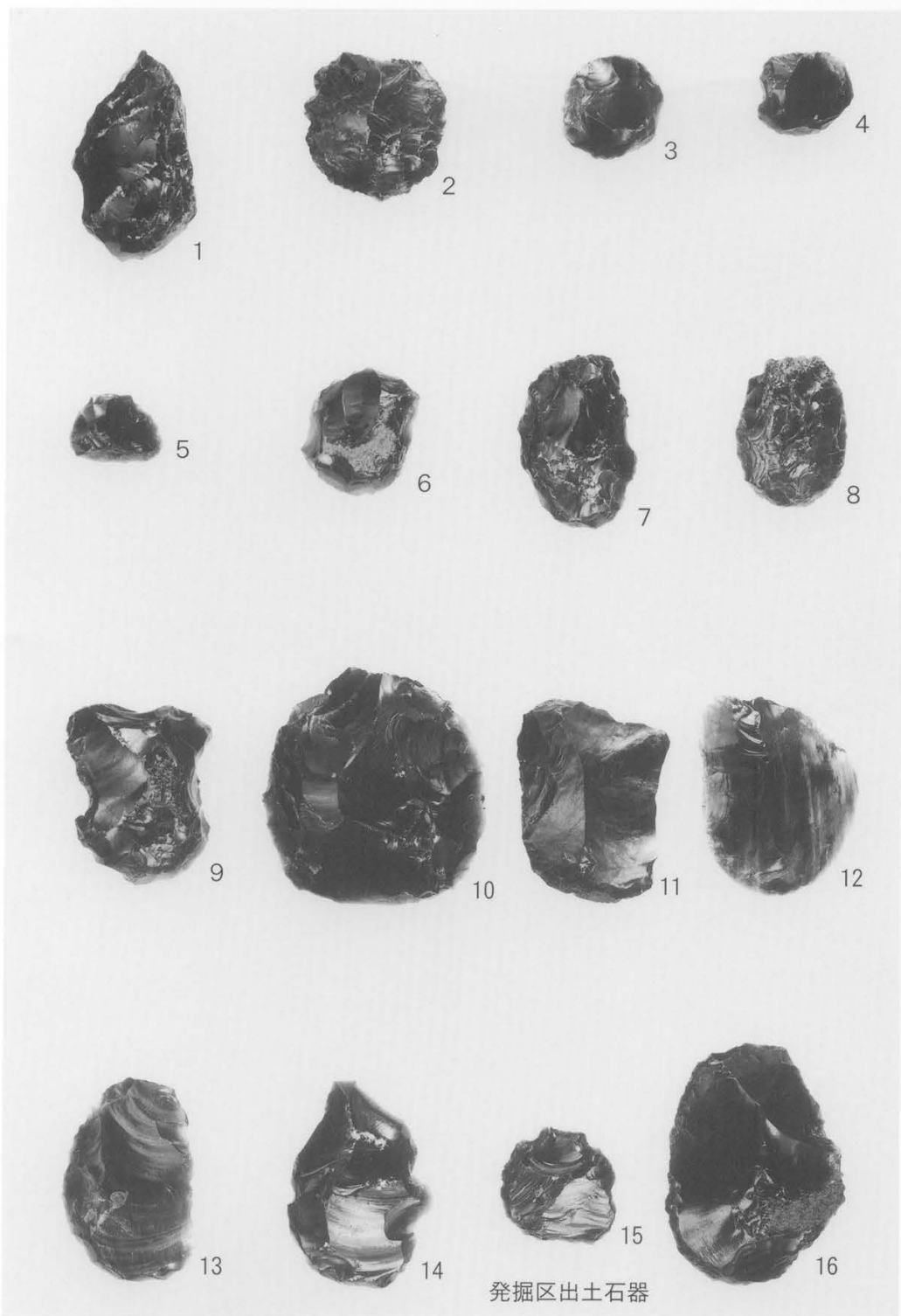


发掘区出土石器

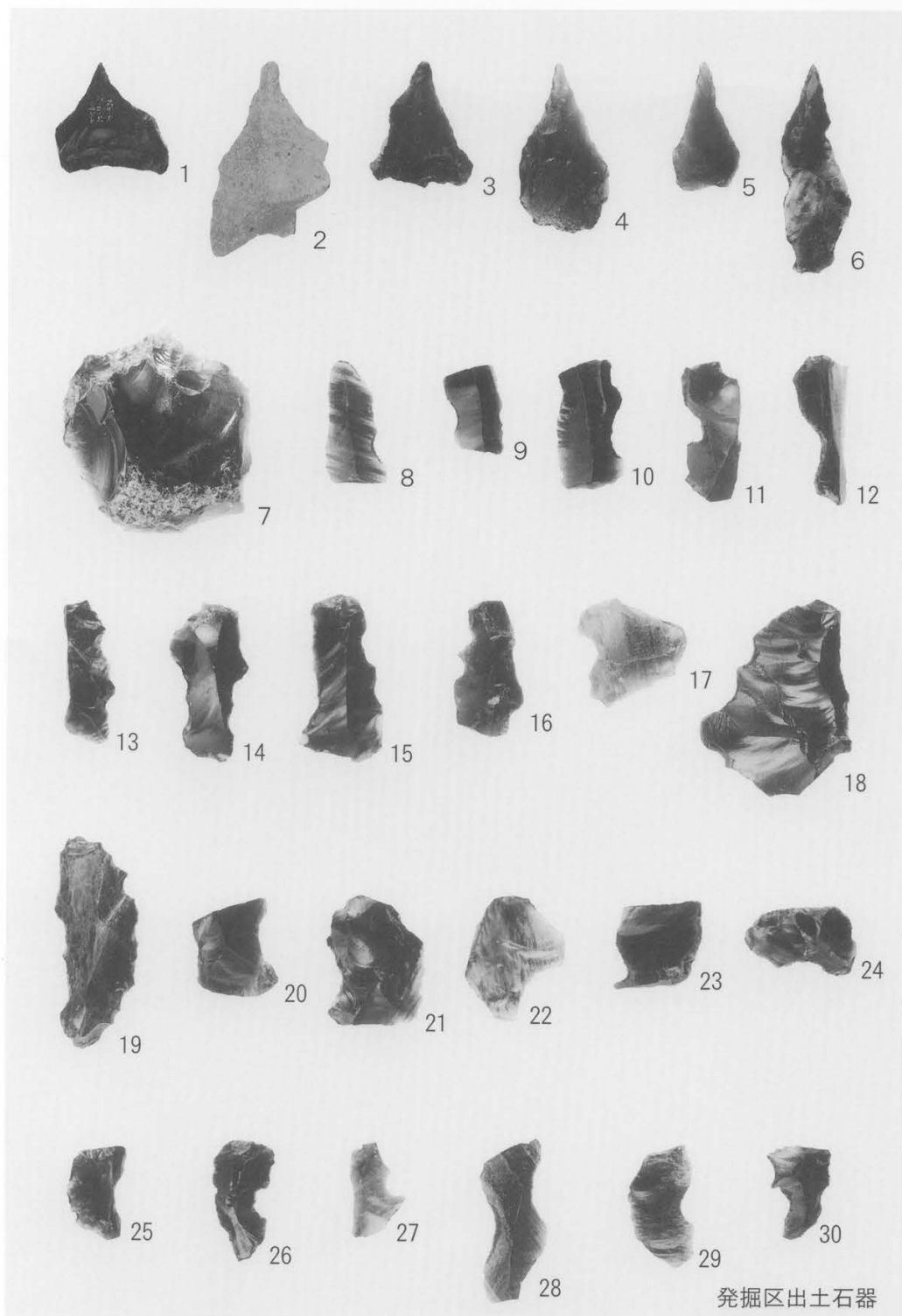


発掘区出土石器

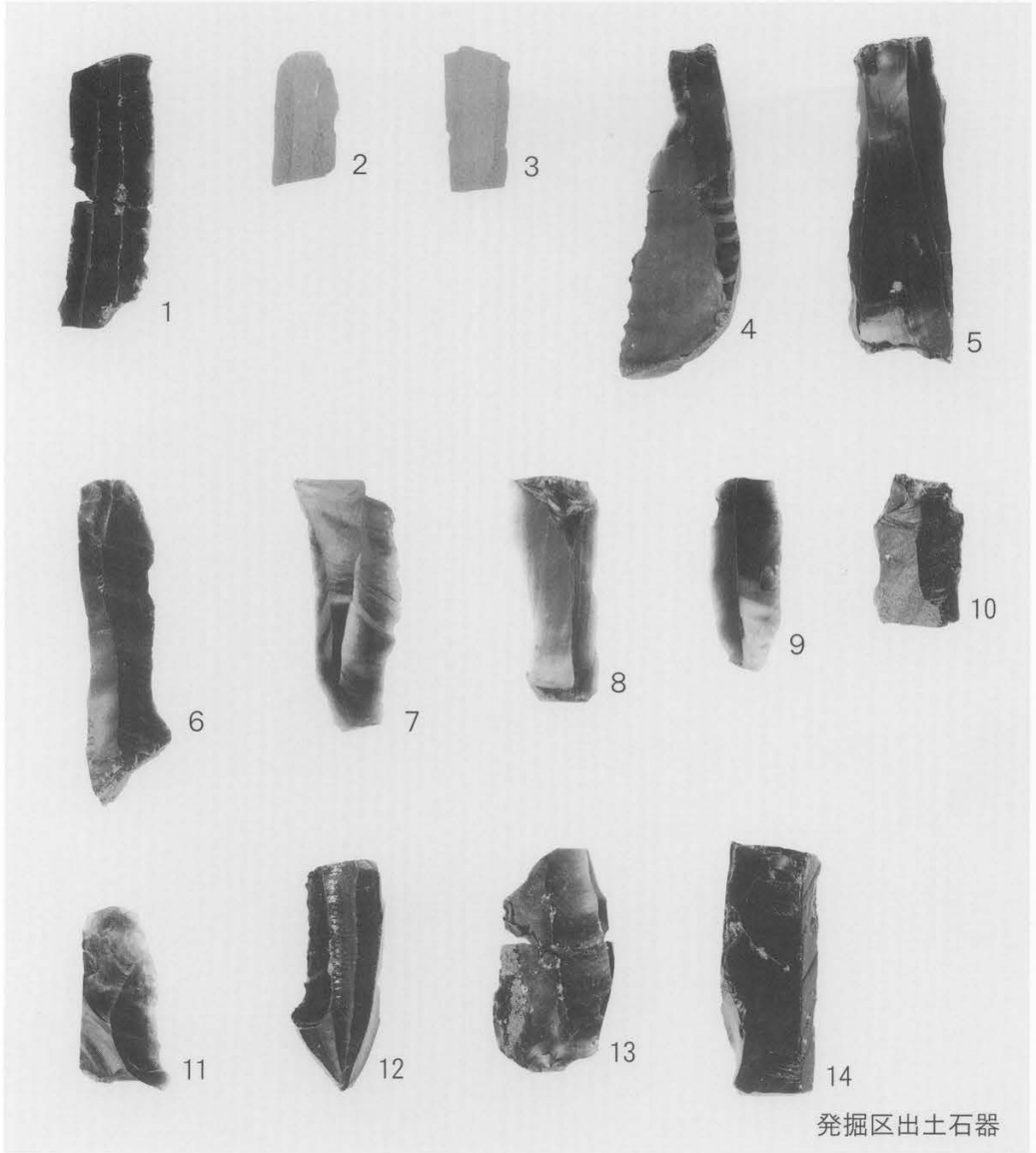




发掘区出土石器

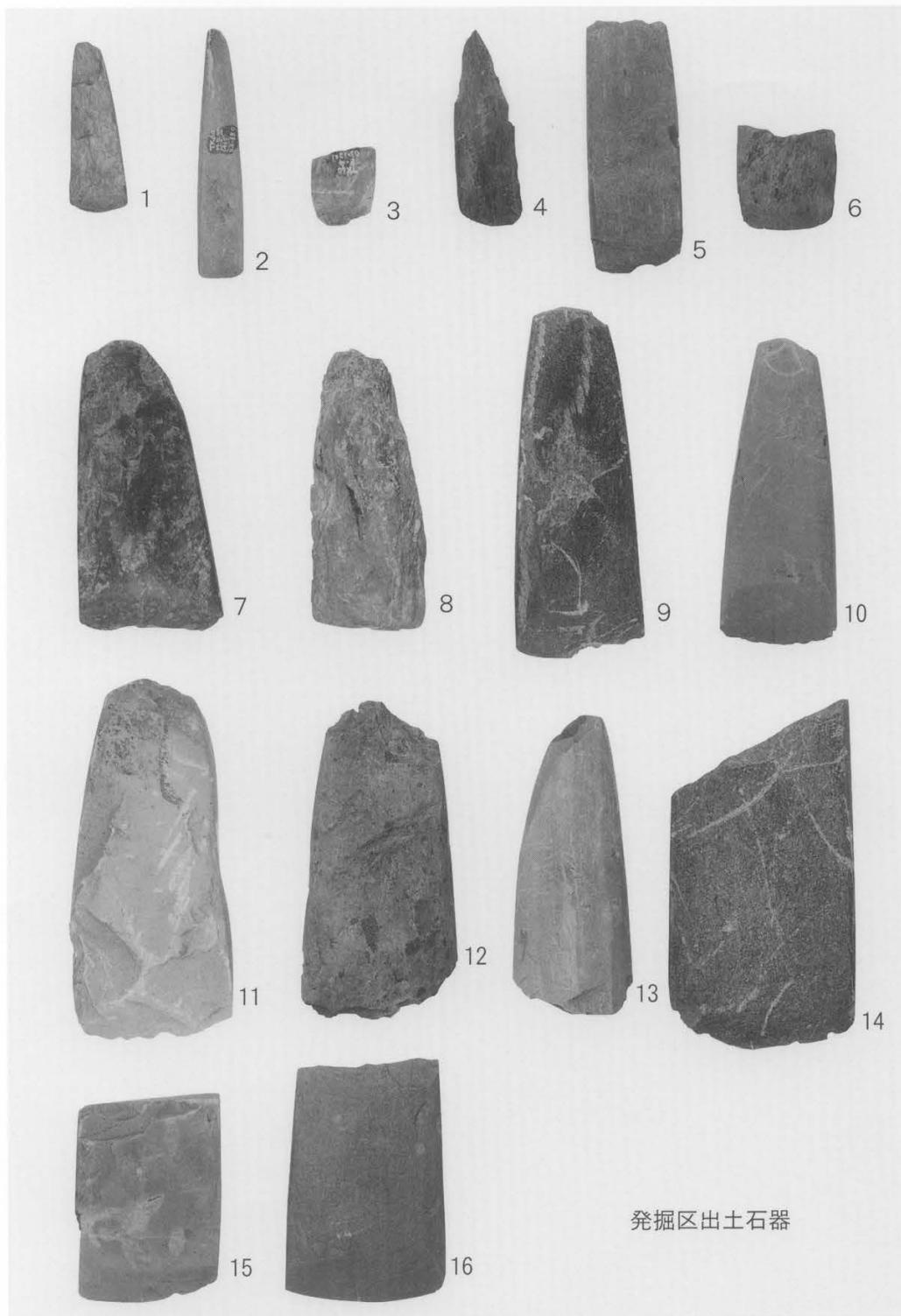


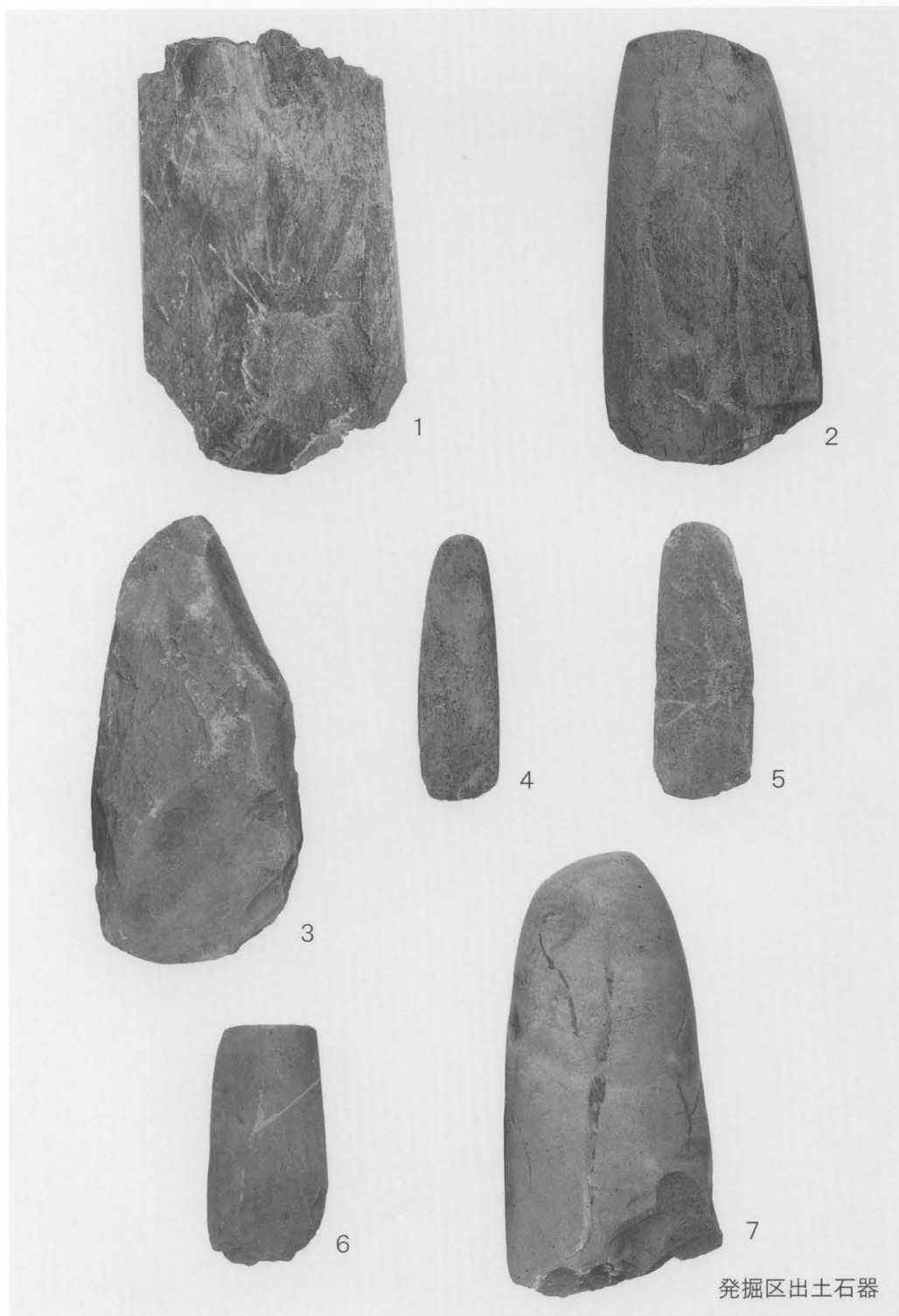
発掘区出土石器





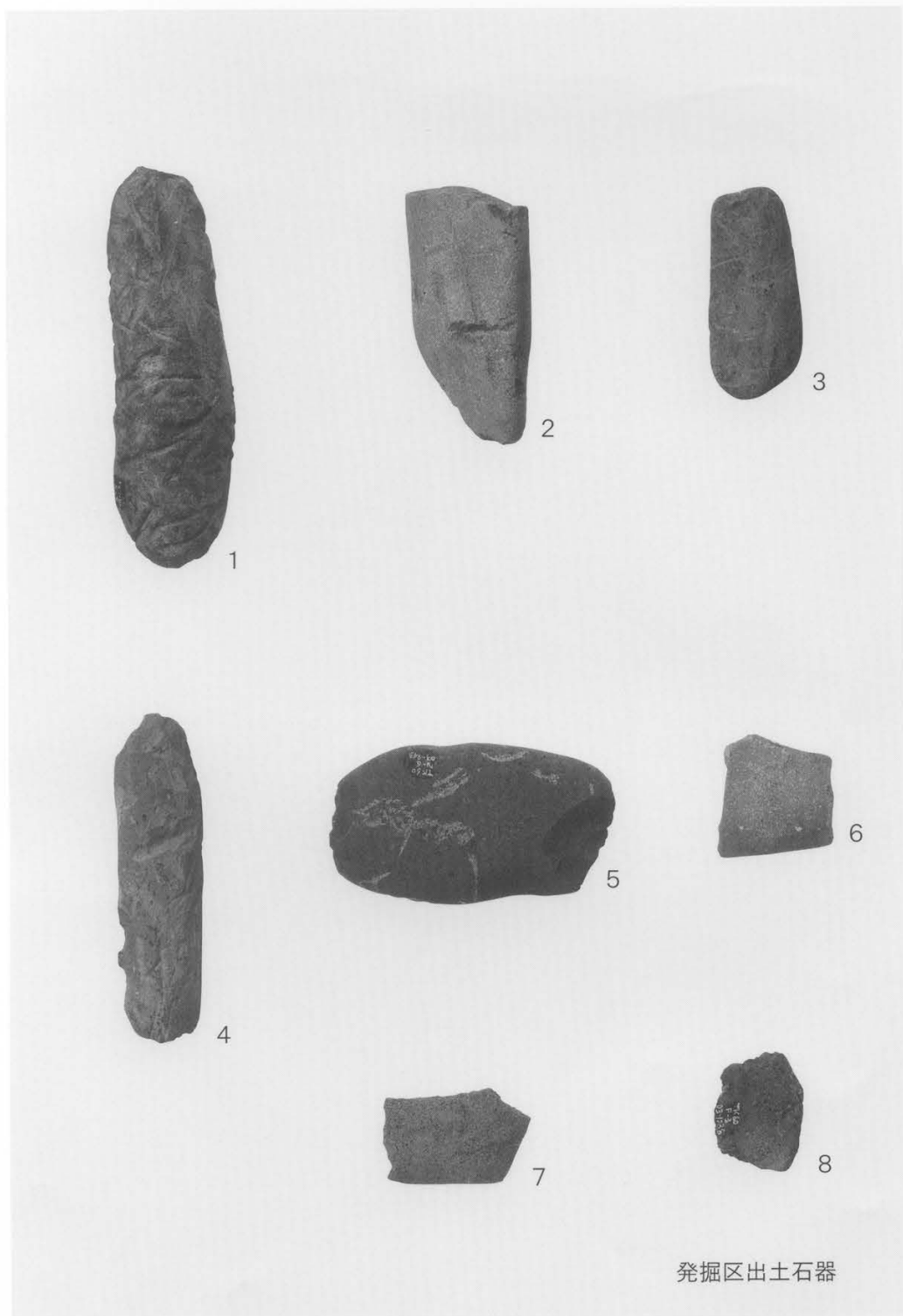
発掘区出土石器



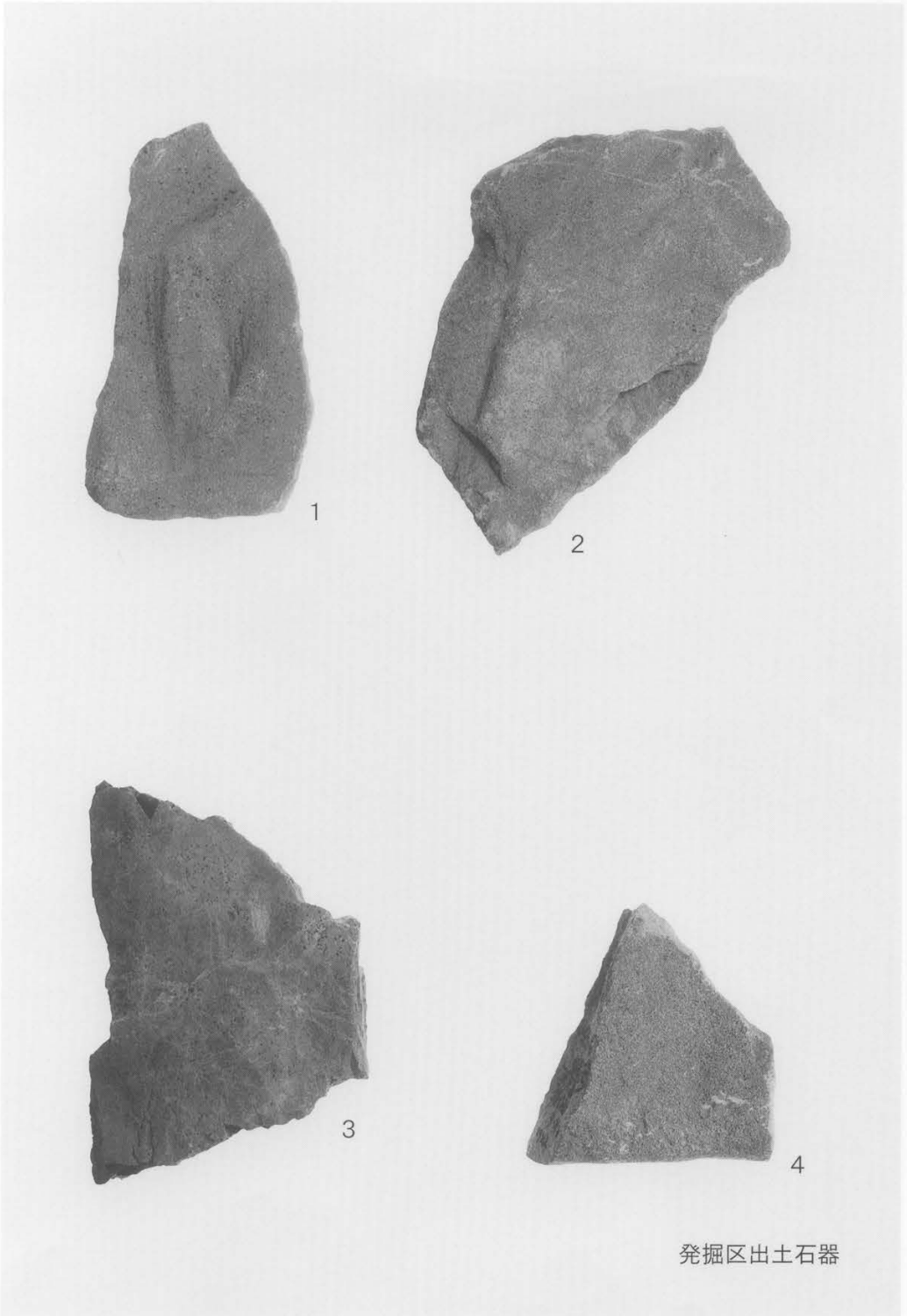




発掘区出土石器



発掘区出土石器



発掘区出土石器





1



2

報告書抄録

ふりがな	TK60いせき							
書名	TK60遺跡							
副書名	北海道営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著書名	武田 修							
編集機関	常呂町教育委員会							
所在地	〒093-0209 北海道常呂町字土佐2-1 tel 0152-54-2191							
発行年月日	西暦 2004年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
TK60遺跡 <small>いせき</small>	北海道常呂町 <small>ほっかいどうところちよう</small> 字岐阜343番 <small>あざぎふ</small> 地15	01553	I-16-58	44° 06' 40"	144° 0' 22"	2004 年5月 12日 ～ 10月 31日	1,200	北海道営畑 地帯総合整 備事業に伴 う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
TK60遺跡	集落	縄文早期、前期	縄文早期東釧路 Ⅲ式の竪穴3軒、 前期末葉の押型 文の竪穴1軒、 時期不明の竪穴 4軒。時期不明 のピット9基。	土器、石器		竪穴は南面した 急斜面を切り込 んで構築されて いる。		

2004年3月15日 印刷
2004年3月26日 発行

TK60 遺跡

北海道宮畑地帯総合整備事業に伴う
緊急発掘調査報告書

発行者 北海道常呂町教育委員会
印刷所 株式会社 小林印刷
北海道北見市本町5丁目